

# 東方書録

鳥の番

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

心から本を愛する青年が目を覚ましたらそこには一冊の本が置いてあり、それを守るために本の虫であった普通の青年だった男が苦難を乗り越えながらも旅をして、右往左往しながらも懸命に生きていき、様々な人種、人間から妖怪、さらには神やら悪魔まで関わり、影響を受けながらも本への愛だけは忘れない青年はこの長い長い年月の中どうやって生きていくのか——それは……読まないと分からないだろう。

※これは東方Projectの2次創作です。これには作者の妄想、それと原作と変わっている部分が御座います。

もしそれが耐えられないのであれば迷わずブラウザバックをオススメ致します。

※にじファンからの移転品

# 目次

第1書	番人の誕生	1
超古代編		
第2書	生きる術	14
第3書	修行の成果	30
第4書	天才の苦悩	44
第5書	消えぬ……	63
第6書	一時の時間	75
第7書	追い追われ	92
第8書	告白	107
第9書	豆腐だから仕方ない	129
第10書	やっと言えた	141

第11書	決意	158
第12書	サガ	178
古代編		
第13書	盛大な自爆	189
第14書	予兆休憩	209
第15書	境	219
第16書	待ち合わせには遅刻は厳禁	241
第17書	遅刻の後は……	273

## 第1書 番人の誕生

——暗い。此処は、僕は今どこにいるのだろうか？

不思議と体が動かせない。全身から力が抜けたかのようだった。微かに余力が残る目を動かすも、見えるのは深い、深い闇ばかり。

——わからない、なんだか体が冷たくなってきた。

寒い、目を開けることすら億劫だった。瞼に重く塞がれさらに濃密な闇が広がる。

——眠い、ああ、そうかこれは夢か……なら……。

そこまで思考が行き着くと、全身に暖かい何かに包まれた。でも、僕の心には不安一つないほどに澄み切っていた。知ってるこれは……。

——覚めない夢なんてないだろう？

不意に聞こえた声に不思議な暖かさに包まれた。僕はその夢心地な安堵感に似た波に呑まれ、最後にこんな誰かの呟きを聞いたような気がした。

——待っていた。ようこそ『書の番人』よ。



「——あれ……？」

目を開けたはずだったがそこは何も見えない真つ暗な視界。景色も何も見えなくて目が閉じているのかと寝起きの僕は錯覚してしまいそうなほどであった。

「うん大丈夫、ちゃんと起きてるよね？」

普通、目が覚めたら『知らない天井だ』とか、ベタなセリフを言うのだろうが……出てきた台詞に含まれているのは困惑、まさにそれだった。

あれ……たしか家で寝ててそれから妙な夢見て、あれ？　というか僕の部屋ってこんなに暗かっただけ？

そう確認するも先も言ったように何も見えない。と言うか瞼が開いているのかさえも自分では判断できないほどに周囲は暗く、天井と思える暗闇の中を睨み付けるように見上げるも、さつきと変わらず見えるのは先が見えない黒色。

暫くぼーっとして見ていたがそもそも天井なんてものがあるのか怪しいほどの深淵の闇に阻まれて結局は天井のそんがんを見る事は叶わなかった。

と言うか……。

「僕の部屋ってこんなに光を遮断するほど閉鎖的だっただけ？」

そう考えると僕は出てきた疑問に思わず頭を捻った。

いや閉鎖されている空間だからこれだけ暗いだけであって、少なくとも天井はあるのかな。自分でも呆れるほど落ち着いた思考でし……そんなどうでもいいことを考えなが

ら、取り合えず明かりをつける為に立ち上がった。

「うわっ」

やはり光度の足りない場所では平衡感覚が全くといひほど分ならず、危うく倒れそうになるも、めちやくちやに動かした両手で何とか壁に手を付き、頭から倒れる事に難を逃れる事が出来た。前が見えない事で覚束無い足取りながらも何とか立ち上がる。

「取り合えず電気……つてどこだっけ」

一寸先も闇の中で彷徨いながら、一先ず明かりを求めて壁伝いに動き前に進んだ。しかし自分の家の中で迷路の真似事をやるとは僕自身思わなかったよ、と自分への呆れを含めた溜息を吐き出した。

昨日、仕事から漸く我が家に帰ってきた訳なのだがいきなりこんな探索染みたことをする事になるとは。引き攣った笑みが浮んだような気がする。

そうそう、帰ってきた。と言ったがそれは言葉通り。そもそも半年に一回帰ってくるかどうかかな家だけであつて明かりを付けるためのスイッチの場所すらわからない。というか忘れていた。

我ながら一目見ただけで契約を済ませた家なだけであつて、自分の家の間取りすら記憶に残らないほど忘れていた。自分の事ながらこの時ばかりはアホかと思つた。

「んっ」

そこで家の中で彷徨っていて気づいたのだが、何だこの足に伝わるほんのりと柔らかい感触は？ 手で触ってみると羽毛を敷き詰めたような、その触れた物を包むような柔らかなさに僕は驚いた。

素足だったからか、ダイレクトに足裏に伝わる毛糸のようなザラザラとした感触だが、不思議と不快な気分を感じさせないような、逆に言えば手触りがいい感触に僕は再度目を剝いた。

何とも言えない違和感、冷や汗が背筋を伝う。

「…………ウチって畳だったよな…………？」

流石の僕でもそれくらい覚えてる。貧乏社会人らしくワンルームだけの部屋だった筈なのに…………。

そこでやつと違和感に気づいた、『広すぎる』と。

——目測だが今の今までおよそ五分ほど歩いてるにも関わらず、手を付いている壁以外、僕の前進を阻む壁に一度すらぶつかっていなかった。

僕の住む場所は都会、とも言えないが程ほどに発展した街だった。それでも数分歩いても壁に当たらないとはどう考えても可笑しい。

それに一社会人でもあり、その字の前に貧乏が付く僕がこんな広い家に住んでいる訳がない。

なら、此処は何処だ？ 最近ニユースになつていた拉致か何かなのか？ でもそれであれば僕が拉致される理由がない。何故なら狙われた人達が皆裕福層一般人なのだから。

……知らない場所にいる事で動揺する僕に畳み掛けるように鼻を衝いた独特の何かがかビ付いたような匂いにうつと呻いた。

しかしこの匂いは知っている。嗅ぎ慣れた——その匂いは、僕には馴染み深いモノと感ぜさせると同時に言い表せられない懐かしさを感じていた。

「いいにおい……」

蜜の匂いに誘われる『虫』のように、いつの間にか手を付けていた壁からは僕は手を離して足が勝手に前へ前へと動いていた。

「？」

何かに急かされているような気がして不思議と歩みが速まった。でも一度も障害物にぶつかる事無く、徐々にだがその事で僕の中にあつた暗闇対する恐怖心が薄れていった。

既に、暗闇の中で奔っている様な感覚さえあつた。自分の足音が響くほどに足早に、周囲が暗いせいで速度はわからなかつたが前から来る風からそれなりの速さなのだろうと予測した。

普通であれば暗闇の中で走るなんて危険な事はしないが、薄れた自意識の中、僕はそんな事に構わず足を前へと進んで行った。

何処に向かっているのか、自身でも分からないが止まってはいけない。そんな気がした。

それは唐突に、途端に、僕の進んでいた足が止まり。最初からここで待っていることが決まっていたように足が動かなくなった。と同じく、鼻を衝く臭いがより一層強烈に感じ、ふと頬が緩んだ。

——そしてそれは突然に。

シャーと小気味いい音と共に何か引かれるような音が部屋中に響き、差し込んできた燃えるような日の光に僕は顔を顰めた。数秒の間の後、引き延ばした目の中でそれは視界に入った。

「……………」

言葉が出なかった。僕はただ呆然とその驚きを目を丸くする事で表現した。

台座……。いや、台座と言うには些かおかしいか。それは余程の職人が作り上げたと思われるほどの王座とも言える椅子であった。

一目では台座と見間違えるほどに豪華でもはや唯も椅子とは言えないほどに見事な出来であったそれは、一国の財と並ぶであろうほど金銀と数多くの宝石で遜色されてい

て、まさに王座とも謳われるモノであった。

しかしそんなモノより、僕の目を引いては離さないモノが静かに、その王座に立て掛  
けられている一冊の『本』があった。

『ようこそ、我が書の番人よ』

「——え？」

荘厳なそんな響きを持つ声を、空気を震わせて僕の耳元まで届いた声は側で囁かれよ  
うな、相手を威圧する覇気を含んだ声に思わず体を身構えて驚きから体を縮ませたさせ  
た。

「……？」

改めて警戒するように体を窄め周囲を見渡しても、人影すら、音の発生源とも思える  
スピーカーの類すら見つかからない。あるのはあの王座と本、それとなぜか空の本棚のみ  
が僕の周囲を囲んでいた。

暫くじっと待っても声の主は一向に現れず、困惑から長い沈黙の警戒への疲労が僕に  
溜まつていき、それがとうとう限界を迎えようとした時、タイミングを図ったかのように  
に話しかけてきたのは又もやあの声だった。

『汝、まずはここらまで馳せ参じて来た事に先ずは感謝を』

そこでやっと気づいた。いや、というか嫌でも気づく。

王座の本が動いていることに。この現実ではあり得ない光景を目にして、さらに困惑すると思つたら答えは否、自身から沸いてきた感情は歓喜、愛しさそしてなにより、未知への興奮だった。

そして次に、自分でも押しとどめることができないほどの【読みたい】という欲望の感情、それに付き添い一歩ずつ、確実に本に近づいて行つた。

よく見ると、本の表紙は黒に染められていて、至る所に金で煌びやかに遜色されていていたがそれは本本来の役割を阻害する事無く、美しく飾られていた。その威厳さえ感じさせる姿に僕は心の底から感動を、それを読める事に感激した。

すごい、すごい！ 目の辺りにした不思議な物への浮かれる僕の心を表すなら、感想などそれだけで十分だった。

依然として本は悠然とその王座に居座り、そして左右から日の光を浴びる姿は何処かの国の王の姿を幻視させるほど幻想的で、夢を見ているのではないかと錯覚を思わせるようで——いや今はそんなことはどうでもいい。

読みたい、読みたい食欲に、強欲に文字からその断片まで読みつくしたい！

「……あ」

「僕は、何をしているんだ？」

そう呟く事が出来たのは指が触れ合うかどうかの距離だった。頭がハッキリとし、気

が付くと同時に現実に引き戻されたのに何かに冷めた感覚に僕は自分の意思ではない何かに弾かれたように本から離れた。

「っ」

無意識の内に、僕の体が芯の底から震えた。肌が粟立ち、気持ちが悪い鳥肌が立った。その拒絶反応に似た感触僕はすぐに否定するようにかぶり振った。

「……いや違う」

拒絶された事を言葉に表し、すぐさまにそう否定した。

僕には騎士道精神なんて大層なモノはないがまるで絵空事にあつた主従に従者が逆らえないような、あの時は頭の上がらない上司と相對した、そんな感覚に襲われた。

勝手に触れちゃいけない。そんな戒めの様な思いが僕を夢から現実へ引き戻したのだとハッキリとした意識の中でそう結論付けた。

不思議と気疲れしていただけにも関わらず、息は荒れて指の震えが止まらない。

『怖い』

その考えに自分でも首を傾げた。何が怖いのか、自分でも理解できない恐怖心に内心戦いた。

震える指先僅かに付いた埃。

それは催眠術に掛かったように、僕は本能のまま本を求めていた。これじゃまるで――

『人間（じぶん）ではないみたいか？』

「——っ！」

実に的を射たようにあの声に、僕はハッと視線を向けると未だにその場から動かぬ本が僕を見下げていた。

凶星かと言ったようにあの声が失笑する。

僕は呆然とそれを見ていた。耳障りと感じない声が落ち着き、無音の幕が下りても僕は立ち竦んだまま、動けなかった。

沸いてくる疑念の感情も、僕の意思を押し殺して。そう、ただ命令を待つ従者として僕はその場で棒立ちに立っていた。

『そう。汝はすでに人に非ず、書物に憑かれそれを貪欲に、壮絶にまで求める獣、いや虫と言った所か』

そこでなにか可笑しいのか。ハハと笑う本に対して普通ならば、何一つ理解できない謎が多い言動に憤りの一つくらい覚えるだろうが。僕はなぜか、それらを含めた負の感情何て何一つ沸かなかつた。

あるのは尊敬と畏敬の念のみで、何時もであれば謎を追及する考えが一つや二つ浮ぶ筈が何一つ浮かばず、とにかく普通の自分ではないようだった。

本の言葉を否定、反対するなんて考えは思い浮かばず、逆に深く理解しようと気づけば僕は頭を回していた。

そしてこの方が言った事、それは間違はなく事実なのであろう。そう受け入れた。

僕は本の言葉を、素直に飲み込み、それを理解し、さらに自分が高なるのか想像、予想してまるで自分より目上の者と話すように恭しく口を開きかけるも、その前に片膝を付き、頭を垂れ、やつとの事で口を開く事が出来た。

「——なぜ……私なのですか……？」

考えた終点、与えられた言葉を熟読し、噛み砕き、咀嚼してでてきた、僕が考えられるだけの答えだった。

本、いや「主」は、ほおと感嘆の声を上げるのを聞き、それが正解だと分かり僕はほとと、荒れる心を落ち着かせようと安堵の息を吐き出した。

『汝は輪廻転生を信ずるか？』

いきなりの問いに、思わず目を回しそうになった。出かけた唸り声に喉を詰らせ、思考するために自然とその眉を硬く顰めた。

輪廻転生、それは社会が、体内の血液が循環するように、人が生まれ、死に変わりし続けること転生輪廻とも言われ、数多くの宗教に、組み込まれている思想……のはずだ。

しかし何故今そんな事を？ 素直にそんな疑問を懐いた。しかもそもそもとして無

宗教の僕はそんなモノは信じてすらいなかったし、神という存在を書物だけの存在と認識していた僕には全く浮ばぬ考えだった。

だがこう質問されるとなぜか、頭にチクリと刺されたような違和感があった。

これは僕の前世があった、と言うことを示唆しているのか？

そう疑念を浮かべると霞んだ景色が頭に浮上する。それは昔の、それとも少し前なのか、大昔からなのかわからないが不明瞭な記憶のためか、酷くおぼろげに見えた。

僕と考える男が古びた電車に乗り込み、田舎町を走る風景が脳内に再生されるとぷりと途切れる映像に僕は確信と共に一度大きく頷いた。

ふむ、どうやら輪廻転生というものは意外にもあるらしい。と長くない思案の中で自分でもあっさり理解できてしまった。

『どうやら思い出したようだな』

満足そうに言う【主】の声に思わず、顔が綻ぶ。なぜならこれからどうなるか、水に沈んだ浮き輪が浮き上がるように思い出せた。わかってしまったからだ。

『前にも言った。が、ここにもう一度問おう。汝、書の番人よ。契約に基づき我、  
×××  
において生涯、我を守り書物を守り抜くことを誓うか？』

一陣の風が舞い、バサバサと自分の服が肌を叩き、床に蔓延る埃が浮き上がり、髪がかき上げられる。大いなる者と対面するプレッシャー。

嘘偽り許されない問い。それは悪魔の契約のようで——いや、ようではなくそんなのだ。

「……」

だが悲観する気持ちなどこれっぽっちも湧かない。それは今までの世界を捨て、一人の下仕えるための契約だから。

光栄だ。満面の笑顔を浮かべ、顔を【主】に向け問いに答えるべく、喉から声を張り上げた。

「はい。不肖ながらもこの私、一生貴方様に仕えることを今までの名を捨てここに誓います！」

前に一度答えた問い、勿論答えは同じだった。

『よかろう……』

そう満足げな声が聞こえた瞬間、僕の視界は光に包まれ、それは収まる事を知らないかのように、世界は光に飲み込まれ、僕という存在はこの世界から消えた。

## 超古代編

## 第2書 生きる術

不意に冷たい風が頬を撫でるように吹き抜け、僕の起床を促すように瞼に白い光が落ちた。

体を動かそうにもまだ頭の中には靄が覆ったように、不透明な思考で今自分がどうなっているのか事態が把握できず、思考がうまく纏まらない。

朝のまどろみの中のように——それから早く抜け出そうと靄を掻き出すように手を動かすとなにやら硬いものが指先にあたった。

「ん……？ あっ」

同時にハツと目が覚めて上半身を起き上がらせ、周囲を警戒して周りを見渡すも、とりあえずは危険がないようでほっと胸を撫で下ろした。

どうやら先ほど触った硬いモノは本だったようで、二重の意味で安堵の息を吐く。確認するように本を手にとると上の角に取り付いていた鎖に気が付いた。

ふむ……これはこうしろって事かな？ 前、見た時付いてなかったし。あ、でも前って何時だったけ？ そう呟きながら一先ず作業を終わらせてしまおうとグルグルと、足

の太ももあたりに鎖を巻きつけて腰に付属してあったホルスター（どうやら主が用意してくれたようだ）に設置、一先ず自分の状態を確認すると驚くことに、作業に夢中で気がつかなかったが手が小さくなっていった。

一瞬「は？」などと、呆けた声を出してしまったがたぶん僕は悪くない。

いやこれはなにかの間違いに違いない、うん。突然変異で手だけが都合よく小さくなったとかそういうに違いない。

と、立ち上がり確認するも地面が近い。

「んー？ まさか目も悪くなつたか、そう言えば掛けてたメガネもなくなつてるし——  
そうか、は、はは……」

おおふ……。その枯れた笑みには後にはにも言えず言葉に詰つて黙つて膝を抱えた。

と言うか何で？ 別に子供にする必要ないじゃん。あれか、よく大人になつてから一度は童心に帰りたいとかそういうの思いに反応しちやつて思わず再現しちやつたテヘペロとかそういう出来心的なあれなのか？

服装も確認するもやはりと言うべきか、僕（子供）に合わせた服装だった。それは契約を交わした時と違ってスカートのように見えなくもない。足元まで届くようなぶかぶかの灰色のパーカにそんなはずはないと思いつながら、パーカーの中を弄るように確認するも、あまりにも、確かにあつたが自己主張が低すぎであろうショートパンツを穿

いていたことに人知れず安堵した。

そして運良く？ 性別も変わっておらず、一人安堵から額に滲み出た汗を拭った。

何だかそれほど動いてもいないのにとんでもなく疲れた。

それでなのだが僕には残念な事に靴はなく、素足であった。

今はこんななりでも僕は立派な現代人。靴ない外歩きは厳しいモノがある。何時も靴を履いていたから裸足と言うのは何だか落ち着かない、が。不思議と地面を踏んでも痛みというものは感じなかったからこれは一先ず保留としておこう。

「だけど……」

しかし僕の姿を見る限り、上だけ着ていて、下は穿いていない、とまるでどこかの痴女よろしくが如くなのだが。いや、この場合僕は男だから痴漢となるのか？ いやまあそれはとりあえずは置いとくとして。

「んー……というかここどこだろ？」

軽く伸びをして体を解しながら出てきた疑問、なぜなら周りを見渡す限りの、木、木、木。

目印なんて存在しないし当たり前のように此処が何処なのかさえ知らない。

在るとしたら上で僕を嘲笑うかのようにその有り余る熱気を辺りに振りまく太陽と、緑の草木のみである。

「んー……わからん」

少し此処が何処か思案し、そうそうに諦めた。

そもそも此処が何処なのか、何が周囲にあるのかさえわからないのだから太陽の位置とかで方向が分かってても目印には到底なり得ないだろうし、下手したら星の流れ、配置すら違うのかも知れない。

それにたぶんだが当分は一人で生きていくことになるだろうし、とりあえずは僕はサバイバルの基本である水場を目標に探すことにした。

水場を拠点にできれば、すぐ死ぬと言ったことにはならないだろうし、少なくとも水場は生物の生活拠点になりえる場所だ。

可能性は低いだろうが、知性がある生物と、接触できる可能性はなくもないだろう。「つて、そう簡単に見つかる分けないよねー」

それから数分ほど目が覚めた周辺を歩き回っていざ本格的な探索に向かったわけだが、水場のみならず見つからず、森を掻き分けていたのだが森を抜ける様子もなく、最悪な事に絶賛迷子中だった。

勿論どこにあるかなんて当てもなく進んでいた僕が悪いのだがこれは予想外だった。と言うか広すぎ、予想出来るかこんなもん。

当面の目標を決めて水場を目指して適当に歩を進めて森の中を邪魔な草を掻き分け

て突き進んでいたが始まって早々僕のテンションはただ下がり、若干諦めムードが漂い始めていた。

「本当に何処なんだ此処は……と言うか木、大きすぎじゃないか？」

いや、僕の背が小さくなったのか。そう思うと更にモチベーションと自分の体の縮小に落胆を隠せずに頭が下に落ちる。

しかしここは、本当にどこなのだろうか？ 現代の記憶を照らし合わせてもここまでの大自然は存在しなかったのだから最悪異世界、と言う線もあるかもしれないが。少なくとも現代の線は限りなく薄いだらうと僕は予想した。

それでなくともタイリブ、つまりは大昔かそれに順ずる古代、ということもあるかも知れないが。

その可能性は低い……と思う。そもそもこの場所が日本かどうかすら怪しいのだけだ……。

「んー考えても分からん！……せめて歴史の欠片でも出てくればなあー」

此処が異世界の可能性が捨てきれない今、僕としては古代と考えたほうが精神的にもそつちのほうが現実的……いや、もはや自分の中では現実の定理がおかしくなっているような気がしないでもないが、この森を見る限り科学が確立されているのかどうかさえ怪しいし、いやまさかね……？

「あんまり期待はしない方がいいのかなあ……」

というか、この辺りを見る限り人が頻繁に通るような道なんてないし、どう考えても未開拓状態で文明発達もあまり期待できそうにない。

落胆する一方の心情のまま、何とか諦めずに水場を探していると、何かと何かがつづかり合う音、争い合う様な物音とそれに合わせて怒声が耳に入ってきた。

「？」

どう考えても動物の泣き声に聞こえないそれに、かき分けようとしていた草から手を離して耳を澄ませた。

『………ツ！』

——よく聞き取れはしないがどうやら空耳ではというのは確かなようだ。しかし運がいい。僕は内心そうつくづく思った。

と言うのも、声を聞いた限りここに住む人達の言語は日本語に近いようだったからだ。話せるということとは少なくとも知性があるということであって今の時代に付いて、何かしら詳しく聞けるかもしれない。

良ければ今がどんな時代か、それとも違い世界なのかと言うの事にある程度は目星がつけられそうだ。

そして争い合っているなら手助けをして恩を売れば待遇も最低でも悪くなりはしな

いだろうし、コンタクトを取れば尚更だろう。遠目から見て危なければ逃げればいいしね。

『……………！』

ふむ、それほど距離がある訳ではない様だ。

しかし恩を売るにしても手遅れな事態になつては相手に悪い印象を与えかねない。僕は急ぎ足で、声が聞こえてきたほうに向かおうと獣道を進むと木々が少ない、開けた場所に出た。

「だいじよ——、うぶ、です……か？」

藪から顔を出して声を掛けようとした所で思わず僕は固まった。

そもそも最初からおかしいと何故疑問を懐かなかった？

一度は考慮するべきだった。何故これほど人気が少ない森の中で騒ぎ合っているのかを。

その広場の中央、そう表現できる場所にはまさに異形の化け物が今にも自身の体を抱いて震える少女に襲い掛かろうとする瞬間だった。

周囲には、数分前まで人間であつたであろう、肉片が当たりに散らばり、その大体は原型すら留めないほどグシャグシャにされていた。

「ん——？」

それは所々に噛み千切られた痕が残っていた。それは生きてまま体を喰らわれた苦痛からか、死ぬ瞬間まで苦しんでいたと僕に問い掛けるかの様に死体達の顔は苦悶に歪んでいた。

その犯人である醜悪の根源であろう異形は、芋虫のようなブヨブヨとした胴に、そこから蜘蛛のような毛むくじやらの手足を八つ生やし、頭部には、口のようなものが、グバと八つに裂かれており、唾液だろうか、口元からは透明なそれが際限なくたれ落ち、その醜悪さがさらに増している。

「うえ……下手な映画に出てくる寄生虫見たいな奴だな……それにしても気持ち悪い」  
その化け物の気味の悪い姿に眉を顰めながらも化け物を見ても、死体を見ても不思議と自分が落ち着いていることに気が付いた。

どうやら『前』での記憶で似たようなものがあり耐性というのか分からないが、動揺しないことに越したことはない。

それにしても少女は腰が抜けているのか、まったく逃げる気配がないその様子にご満悦の化け物は此方にいる僕に気づいている様子もない。

（——好都合、かな）

その感想と共に僕は足元に落ちている石を拾い上げ——。  
なにをするかって、そんなもの一つしかないじゃないか。

僕はその石を思いっきり油断仕切っている化け物の後頭部をカチ割る勢いで、石を投げた。

普通の生物なら気絶、もしくは下手をしたら即死するであろう勢いで、ヒューと空気を切りながら石は吸い込まれるように頭部目掛けて飛び、ボコと生々しい音を立てて不意の衝撃に体勢が崩れた化け物はドーンと砂埃を上げて地面に落ちた。

ストライク！　と思わずガッツポーズしてしまうほど、我ながらそう自画自賛した。

何だかこの世界に来てからいやに体の調子がよかったのはどうやら気のせいではなかったらしい。悲しい事にへたしたら前の大人だった時よりも体、身体能力的にも調子がいいかもしれない。

いや、だって体を動かすって言っても一日中イスに座ってるだけなのだから当然そうなるよね、自業自得です。ええそうですとも。

「ねえだいじよ——」

若干落ち込み加減で未だに呆然としている女の子にそう声を掛けた。

そこでまだなにか起きたのか把握できないのか、目を白黒している少女に声をかけようとした所に、それは起きた。

「あ、れ？」

僕の読みが甘かった。と言うか謎の生物に対して普通と言う常識が通用する筈が痛い痛感した瞬間だった。

倒れていた化け物が何事もなかったように起き上がったのだ。「はい？」と間が抜けたような声を上げ、こちらを見る化け物の目に宿るのは、明らかな僕に対する敵意と食事を邪魔された憎悪の感情。

あ、こりやまずい。そう声も出さずに、

瞬時に、180度回れ右をし脱兎の如く、その場から離脱を謀るも、僕を追うように背後からバキバキと音を立てて木々を薙ぎ倒しながらも、追いつがってくる化け物の姿が視界の端に入り込んだ。

さ、作戦道理だ。これで少なくともあの子は助かるだろう。というか最初の目標が住民とのコミュニケーションに関わらず逃げてどうするんだ僕は!?

バカなのか! Q II というかこの場を脱却術は!?! A II ももちろんそんなモノ考えていない。現実是非情である。

「ですよねー!?! じゃなくてツうえ!?!」

そうこうしているうちに既に後ろまで迫っていた化け物に思わず悲鳴を上げそうにもなるも堪え、懸命に逃げた。

しかし体が小さくなってきているせいか、進む速度が遅く感じる。

いや、違う。見ると風景もすべて、スローモーションのように遅く感じられる。頭に浮かぶ言葉まさに走馬灯と、言うものだった。人間死に直面すると、時間が遅く感じるとはよく言ったものだ、人事のように關心しながら後ろを見ると、すでに背に絡みつくように口を開く化け物が。

あるのは後悔の一言、ああ。行動した自分が悪いがせめてあの子だけは——と不意に足元から地面が消え、視界からあの化け物が消えた。

「——は？ あああああああああ!!」

その瞬間、一瞬の浮遊感と共に地面に引きずり込まれ視界が真っ暗に包まれた。その後すぐにお尻衝撃がきた。

「つうく……い！ なんだつてんだよ」

そう悪態を吐いて心臓を押さえた。内心ドキドキして動悸で息切れがやばい。もう死ぬ瞬間は二度と味わいたくない。

そしてどうやら運がいいのか悪いのか、洞穴に落ちたらしい。それで出口が見えない。周囲を見渡しても漏れる光すら見えない。上から落ちて来たはずなのだがどうも上の入り口が入り組んでいるらしく此処まで光が届いていない。

「冷たっ」

範囲を確認しようと手足を動かすとピチャと指先が水溜りに触れた。

「……ほんとに運がいいやら悪いやら」

我ながら呆れながらそこそこ慣れてきた目で洞窟の全貌が見えてきた。洞窟自体はそこまでの広さはなく、せいぜい僕が前に住んでいた家というかワンルーム程度。

この体で暮らすにはちよūdいといえるだろう。だが出口はなし、いや上にはあるが。というか天井が高くて出れそうにないんだけど。

「いや、助かったんだけど……これって助かってない？」

出ようにも洞窟にあるのは石ころと湧き水だけ。上にはどう考えても手が届きそうにない出口だけ。これと言つて脱出の策もあるわけもなく、途方に暮れる。

「これからどうすれば……」

なにより洞窟の中は暗く、お世辞にも本が読める環境ではないというのが致命的だった。

思わず目じりから涙が零れそうになるものの、耐える。

自分を勇気付けるようにホルスターから本を抜き取り手の平で本の背を撫でていると、突然本が勝手に開いた。

と同時にまるで僕を元氣付ける様に、そこから七色の光が漏れ出した。漏れる光は虹色で、藍に、緑と、様々な光彩が幻のように輝き、それは其々に幻想的な色を持ち、煌々と光る光と色が合わさり合い、その光に湧き水が反射、湿気から濡れた洞窟内の壁と乱

反射し、光が虹色に景色を変えていく。

「わあー……」

その光景に感嘆の声を上げながら、光に見入ると希望が沸々沸いて来た。

これだったら本が読める、と。

そこでふと開かれた本に目を向けると表紙のページに文字が刻まれていた。

『汝欲望のまま望め、さすれば願ひ叶わん』

これは……ここから出してとかだろうか？ いやどうもしつくりこない。

前の僕が覚えているような気がするのだが、記憶に霞が掛かったように見えない。欲望……これは僕の心からやりたいこと……なんだ、あるじゃないか僕が今やりたい事が

！

そこまで考えると、僕の行動は早かった。そうしたら一つしかないじゃないか

！

「全て、いや——なんでもいい。読ませてくれ！」

そう願いを込めるとペアと一度光が瞬き、パラパラとページが捲れて僕の好きなジャンル、今読むことが必要であろう内容が選択画面のような物ができてきた。

凄い。これの一言だった。そこでどんなものがあるか、本に食い入るように探していると、あったのが『4種の力学』と言うものに目が惹かれた。

なぜならそれだけ赤線が引かれていてまるで最重要事項だと、言わんばかりの圧倒的威圧感を感じさせていたからなのだが。

よし何だか知らないがまずこれを読もう。そう思うと勝手にページが捲れ、内容が浮き出してくる。その本一つ一つの性能に驚きながら僕は本を読んで行つた。

それから数分、いや数時間かもしれない時が過ぎ、やつと読み終えた。

ある程度だが予想通り、これから生きていく為に必要な内容が書き出されていて、本当だつたら多分此処にきた時に真つ先に読むべきもだつた。今更ながら自分の浅はかさに少しの後悔の念が湧いてくる。

「ふうー」

まあ、それは兎も角として読んだ内容をまとめると、この世界の生物には微力ながらも4つの力が存在するらしい。それは妖力、霊力、魔力さらに神などが持つ特性として、神力と言つた、モノがあるそうだ。

妖力、つまりはこれも妖怪が持つ一つの特性のようなものだそうで、霊力は人間が持つ一つの特性として、魔力に関しては才能だそうだ。

ということとはさっきの化け物は神と言う感じはしなかつたし、妖怪と言うことか？  
んくにわかには信じがたいけど事実は小説よりも奇なりと言うからには見た僕としてはそれを信じない訳にも行かない。それにしてもいやはや、異世界にきたかもしれないと

思っていたがまさか当たるとは……。

そして驚く事にどうやら僕は人間ではないらしい。体内に宿る力の識別方法を試した所、該当するのが妖力に僅かな魔力だった。

主も言っていたが僕は本当にもう人間ではないのだろう。

その事に少し悲しい気もするが後悔など微塵もなく、ただただこれからずっと本が読み続けられる、悠久の時を過ごせるのだ。うれしくない訳がない。

と、話が逸れたが魔力を扱うにはそれなりの修行がいるようだ。

それも魔方陣に魔術文字、魔力の宿ったアーティファクトと言った魔力が籠った品物を媒体にする魔術などと魔法はまさに多種多様。勉強……考えただけで心が躍る。読書が好きな僕は勉強もそなりに好きだった。

今では懐かしい事だが学校の休み時間を使ってまで勉強をしていた僕はよくその事を友人に弄られたものだ。

話が少し逸れた。しかしながら魔法の事だが残念な事に僕の魔力の絶対量が少なすぎるせい、僕にはまだ扱えないようだ。当分魔術の勉強と言ってもやるとしたら読書くらいになるだろう。

ということに残るは妖力の扱い、修行になるのだろうか。とりあえずは退屈しなそう  
ない。

しかしご飯はどうするのだろうか？ 本には妖怪の主食は人間の恐怖から感情、果てには人間自身という偏食ぶりだったが僕はどうなのだろうか？ まあ今のところお腹もさほど空いていないし、なにより、主であるこの本を守るために、力を付けなければいけない。魔力の絶対量増長に加え、妖力の扱いに研究に読書。やることはいっぱいだ。

「ふふ、楽しみだなあー」

その時の水たまりに映った僕の顔には外見相応の、子供染みた笑顔が映りこんでいた。

### 第3書 修行の成果

穴の中に落ちてから数年か、はたまた数ヶ月過ぎただろうか。僕は未だに洞窟の中に居座つて本を読んでいた。やる事と言えば妖力の扱い、更には魔力の応用と色々あるのだが本を読む事が好きな僕はどうしてもそれを疎かにしがちでどうしても読書を優先してしまっていた。

それに洞窟内は意外と過ごし易く、喉が渴いてもすぐ水が飲めるしこれといって日常生活にはまったくと云つていいほど苦勞なんてしていなかった。そのせいで僕は昔のように体なんて滅多に動かさないと云つた怠惰の生活を送っていた。

だけどそれには理由があつた。

どうやら僕はほかの生き物のような食事と言うものが必要ないらしく、この来てからというものの口にするといつたら水のみで肉と言つたタンパク源などまったくと云つていいほど口にしていなかった。

食べ物を必要としない生き物、そもそも生物は何の為に動くのか？ それは食事を取る為、生きる為である訳であるがそれは僕から食べ物も必要ないしたぶんだけども要らない。なら動く必要ないじゃないか？ と、脳内では見事な引き籠もり思考が成り

立っていた。

しかし、そんな生物なんているだろうか？ 僕は少し特殊かも知れないが紛れもない生き物である。栄養を取らなければ弱るとか、それに準ずる変化が在ってもいいはずなのだがそれが何一つない。

そこで自分は何なのかと、疑問に思い、本で調べて見た所、あったよ。

それは『生物図鑑』と言ったもので気になって見てみるとそれには驚愕の内容が書かれていた。

そこには生物は勿論、一般的な妖怪に至ってもその能力表が事細やかに書き綴られており、それは生物の名前さえわかればその者の能力値が分かる。と言った物だった。

そこで僕のことを検索してみようとした所で名前がないせいか未登録となっていた。

契約の際名前を捨てていたので、今更ながらそういえば僕は名無しだったと思いついた、と。のほほんとしながら気づいたわけだが。

「しっかし名前……なまえか……」

別に自慢でもないが僕はネーミングセンスといものが一切なく、前に飼っていたペットの名前なんて付ける事すら諦めて『犬ー、猫ー』なんて呼んでいた。そんなレベルの僕が自分の名前をどうするか……。不安です。悩んだものの結局の所どうなったかと言うと——結局は少し、うん。本の力を借りた訳だが。

「輪廻転生……つまりは魂、魂の形……つまりは靈魂——うん、れい。これから玲でいいか」

そこで名前が登録されたのがきっかけか、開いていた本がパラとページが捲れると能力値が出てきた。

△▲▼▽△▲▼▽

◇苗字なし 名前 玲

種族：本の虫 能力：間合いを計る程度の能力

体力：200 / 185 スタミナ：40 / 34

状態：正常

装備：灰色のパーカー

緑のハーフパンツ

英知の書

ステータス

妖力 | 150 / 140 霊力 | 0 / 0

魔力 | 56 / 52 神力 | 0 / 0

腕力 | 15 IQ | 155

素早さ | 22 運 | 12%



ふむ、どうやら説明を見る限り妖力は小妖怪程度で魔力は並以下と……。あれから自分なりに頑張ったと思っただがそうはうまくいかないのが現実である。少しそれを残念に思いながらも視線を逸らしていく。

というかそれより酷いのが腕力に素早さだ。一般人の大人より少し上程度って、もしかして僕は種族的に言うとか劣悪なのではないのだろうか？ 僕、本当に妖怪だよな？

IQは知能という認識でいいのかな？ ま、それは兎も角として。本を読んでいた為かそれなり、体力もまあ……なんというか。スタミナに関しては、正直すまんかったと思う。平均の大人以下ってほんと僕妖怪なんですか？

で、先から気になっていた運だけ……簡単に言えばその人の運の良さを数値化しただけのようだが。これはいいのか、悪いのかは僕としては判断が付かない。約十分の一ってどの程度なのよ？ 分からんがこれは要検証すべきだろう。

そして妖怪の中でも平均以下、運動能力で言えば人間にさえ劣るかもしれない僕であるが、しかしまだ希望がある。今まで気づきもしなかったこの能力と言うものだ。

間合いを計るということは……限定的な対象を選択、もしくは確定して自分の危害を加える生き物などの曖昧な奴でも位置とか把握できるのかな？ 使いように因っては敵の間合い、攻撃範囲も分かると……。

ふむ、意外と使えるかな？ 何だか戦う、と言うか逃げるに特化したような能力だけど。僕としては戦う気すらないのでそれはいいとして。とりあえずこの能力を常時使用型にして自分よりつまりは強い物が何処にいるかどうか間合いを計るようになしよう。

一先ず深呼吸をして息を整えてからイメージし易い様に手を前方に突き出しては目を閉じた。体の内からモヤモヤしていた意識が次第に固まっていき、何かが見えた……様な気がした。

初めて感じた違和感に少し戸惑ったが、気を取り直して自分の中にソレを握り、力を込めた。

能力発動中——

……実感は湧かないが、これは周辺に敵がいらないと言う事なのか？ それに妖力が僅かに減ったような気がするのだから発動はしているのだろう。しかし能力を発動中に絶対強者、つまりは大妖怪に合わないとも限らない。(ま、洞窟の中に引き籠もってれば会うことはないだろうが) どうやらこの能力には限界があるらしく僕の妖力を使って発動しているためか、周辺に僕より強力なそれも大妖怪クラスとなると、その位置や間合いを計ろうとするとさらに妖力が激しく消耗するようだ。

しかし幾ら居場所が分かっていたとしても決して遭遇するわけでもなく、あくまでそれは僕次第、運任せと言った部分が多い。こう考えるとステータスにあった運の要素の

重要度は途轍もなく大きいような気がする。

間合いを計るだけという、つまりは僕の逃げ足にかかっているということなのだからスタミナと体力諸々が少ない僕としては少し心もとない。まあつまりは修行が足りない、と言うことだろう。

「……はー……」

何だかこれからの事を考えるといきなり気分が落ち込んだがこういうときは時は読書に限る。僕は本を開き漏れる七色の光を横目で見ながら、魔術書にページを選択。

僕はこれからどうなるか分からないと言った不明な未来、拭えない自分の不安な気持ちに煽られながら自衛に必要であろう魔術の術式の公式を学んでいくのであった。



自分の弱さを改めて実感してから幾年か、もしかしたら数週間しか経っていないかもしれないがそろそろこの洞窟から出る必要があるかも知れないと思い始めていた。

確かに此処に居れば安全なのだろうがある意味では密室である。もし位置がばれりしたら脆弱な僕じゃ相手にならないだろう。

今まで此処で暮らして来て何で今更そんなに警戒しているのかと言うのも、最近何だか上のほうが騒がしいのだ。今僕は能力を使用して妖怪と僕の間合いを計っているのだがどうも慌しい。頭上をウロウロされて何時僕に気づくか分からない状況で不安の

あまりオチオチ本も読んでいられないほどだ。

しかしここに住み始めてからずいぶん経ったような気がしないでもない。

服装は変わらずとも立ってみると僅かながら身長が伸びていた。詳しく言うとなら、パーカーが足元に届きそうだったのが、弁慶の泣き所まであがったと言ったものだ。

「……くっ！」

ここまで成長しない自分を憎らしく思ったことはないだろう。おかげでいつになつたら幼少期から脱することができるやら……。そう嘆息しながらも自分の成長を確認するため本を開く。

△▲▼▽△▲▼▽

◇苗字なし 名前 玲

種族：本の虫 能力：間合いを計る程度の能力

体力：246 / 244 スタミナ：68 / 55

状態：健康―『十全』

装備：灰色のパーカー

緑のハーフパンツ

英知の書

ステータス

妖力—289 / 280 霊力—0 / 0

魔力—127 / 112 神力—0 / 0

腕力—26 IQ—155

素早さ—32 運—12%

△▲▼▽△▲▼▽

「おおー！」

これは素直に嬉しかった。自分の努力が目に見えて分かるとなるといこう、来るものがある。ただ唯一鬼門となっていたスタミナがまだ心元ないが、今回はそれには目を瞑ろう。そもそも洞窟の中でぐうたらしてたからスタミナなんて付くわけがないし、一応準備運動と言う事で体操やらスクワットをしていたが……それだけで増えているに衰えなくて驚いた。

……初期のスタミナがそれほどまでに少なかったという事なのだろうか。

「さてつ」と呟きフードを被り、本を腰に据えて埃を払う。忘れもないかと、洞窟内を見ると妖しく光る壁達——あるのは実験で書き込んだ魔方陣の数々、防御陣に、妖力漏れないように対魔の陣に、周囲を強固に囲む結界に能力の応用で試しに作った妖力察知の陣と、ほか様々な幾何学模様が壁にびっしりと書かれている。我ながらずいぶんと嚴重にやったものだと言えながら思う。

最後にそれらを一瞥し、ふわつと体を覆う浮遊感。この修行の中で覚えた洞窟からの脱出手段がこの武空術——じやなくて魔力を浮力に浮ぶ手段である。

そのまま飛び出すように天井に飛び込むと、天の井の穴を通り抜けて何年ぶりかの地上の景色が目に入ってきた。思えば結構長い時間此処に居たものだ。今更ながら考え深くなる。

「……」

長年住んだであろう洞穴に感謝の念を込めて空中にて一礼して僕と人の間合いを計り、そこに人がいるであろう場所に向かって飛んで行く為に足に力を込めた。



開いた口が塞がらないということはまさにこのことだろう。今僕の目の前には信じられない光景が映っていた。

少し前まで森が広がって場所がまるでスターウォー○のような、SF映画に出てくるような近未来都市と化しており、遠くには車のような物が空を飛び、ビルは摩天楼のようにそびえ立っていた。その大都市とも言える都市外で木の端からぬつと顔を出して観察中の僕にはそれがあまりにも信じられない光景だった。目を何度も擦っても変わらない光景にくらりと頭にきた。

こんな物21世紀にも存在しなかった。ここまでのモノを見せられると、本当に異世

界にきたんだなーというまた確信にまた一步近づいた、近づいてしまった。

「はあ……」

しかしどうやって入ろうか……。都市はドーム状の半透明の壁に覆われており、試しに妖力を纏わせた石ころを投げると案の定、何かの術が掛けられているのだろう簡単に弾かれてしまった。

何度か同じ事を試してわかったが、どうやら妖力を纏う物が入ろうとすると拒むようにできているらしく、妖怪である僕は容易に入れそうにないがここで出てくるのが今までの修行の成果である。

僕は本を開き、そのページから紫色に光る魔方陣を抜き取った。

これは結構前に見つけたことで、僕は本に載っている文字を外に取り出せることが出来るのだ。僕はその魔方陣をペタと右腕に貼り付けると、妖力が縮まるのを感じると同時に体から力が抜けていく倦怠感に襲われる。

「——ッ」

……意外につらいが死ぬほどではない。これで僕は常人からしたら普通の人間にしか見えないだろう。

そのまま草むらから抜け出してまるで自分の庭を歩くように、堂々と都市に潜入する事に見事成功した。ふふ、何があるのか楽しみだなー。

始めてみるモノに浮かれた僕は跳ねるように舗装された道を前へと進んでいった。

都市内はやはり、SF映画の如く道を進めばロボットとすれ違い、現代で言う自動販売機と思えるモノまであり気になった飲食店はどうかやらこの都市ではレトルト商品のような簡易食事が主流のようだった。その観察している間、僕は能力を使用して消費する妖力から魔力に変更して発動していた。

その間僕は自分に害となりうる物から間合いを計り、悠々と都市内を歩いていった時、妙な違和感に襲われた。

「……………まさかもう気づかれたのか？」

脳内この都市のMAPが広がり、僕を中心として緑のマーカー、それと現れた赤いマーカーを見ると先までの高揚した気分は嘘の様に沈んでいった。

首を捻ってその方角に目を向けるも姿はまだ見えないにしろ数名、それもかなりの速度でこちらに向かって来ていたことを察知出来た。何故気づかれたのか分からないがまだ僕との距離はあるがこのままだと捕まるのも時間の問題。

「……………意外に早いな……………こりや危なそうだ」

それならさっさと逃げるが勝ちだ。僕は明るい繁華街から身を翻して路地の中に駆け込む。同時に魔術で足を強化、身体強化の術を掛けて脱出を急ぐ。

それで都市の外に向かって走りだした訳なのだが、やはりと言うべきか、それに合わ

せて追跡者と思える赤マーカーが後を追ってくる。

なんで居場所がばれるのか分からないが、僕と同じように敵の位置を把握できる能力者がいるのかも知れない。どうやって追跡しているのか知りたいがしかしそんな暢気に事を考えている時間はない。このままだと最悪、僕は殺されてしまうかも知れないのだ。

「はあ、はあ——」

本では妖怪と人間は近い存在、人間と妖怪の多くは憎み怨み合う関係と書かれていた。

おそらくこの追跡者達もこの都市を守るために全力で僕を殺しに来るであろう。正直今は妖力を自ら封じているため人間にすら勝てる気がしない。確かに術を剥がせば使えるが妖力をもし使った時の都市の防衛システムがどう作動するのかわからない以上、下手に出る事は出来ない。

しかし反撃しようにも僕の魔術と言っても今使えるのは初級の攻撃魔法に防御の術と身体強化のみ。攻撃と言える物は少ないし何よりこれだけの数を相手にすると魔力がもたなそうにない。それなら肉弾戦に持ち込めばいいのかと言えばそうではなく、録に戦い方を知らない僕がそんな事をすれば肉体強化があっても勝敗は目に見えてるし殲滅に時間が掛かれば増援の危険性もそれだけ増す。

だがどうやら、僕がどんなに頑張つて走ろうとも距離的に逃げ切れそうにない。ないよりマシと言つた魔力で更に身体強化を施していても、既に僕のスタミナが限界に近い。

息が上がリ、酸欠不足から視界がぐるぐると回つてきた。

必死に視界で逃げる糸口を探しているとそこには小さめのポリバケツが……！　こんな科学都市のような場所にもポリバケツは現役なんだ、と。どうでもいいこと考えながらも蓋を開けその中に飛び込んだ。

するとすぐその近くを通り抜ける複数の気配。

(……ツ！)

唇と息を噛み締めて息を潜める。

それは僕の事に気づくことは無く、すぐ側を走り去り思わず安堵の息を洩らすも、すぐにそれを引つ込められた。

誰かが目の前に止まるような気配を感じる。

そして手をゆつくりこちらに伸ばし、蓋に手が掛かる。

一か八か飛び掛ってみるか？　いやそんなことしたら捕まつた時余計に罪が重くなるよなというか今は捕まることより今どうするかだろ！　どうする？　どうしたら!!

頭が思考で混乱する中で無情にも蓋があげられ、覚悟を決め飛び掛ろうとした瞬間、

思わず動きを止めた。

「大丈夫かしら？」

そこには太陽の光を背に浴び、奇抜とも言える赤と青の、僕が前いた場所では中華風とも思える服を身に纏い、キメ細かい銀色に輝く髪を靡かせながら笑顔で僕に微笑みかける少女が居た。

## 第4書 天才の苦悩

「……いつまでそうしているのかしら？」

「……………」

そう僕に声を掛けたのは目の前にいる銀髪の女性。そして声を掛けられた僕であるが無言で警戒する姿勢を崩さず、それを女性が節目がちに確認するとまた深くため息を吐かれた。

あの後、訳が分からなくて頭が混乱する僕はこの女性に連れられ、屋敷と思えるほどの大きな平屋の一室に通されて今に至る訳だが。

「……………」

敷物に座る女性は未だ敷かれたその布地に一向として腰を下ろさない僕に痺れを切らしてさつき声をかけて来た訳だけど、事情も分からずに敵とも味方ともわからない相手に無謀な姿を晒すわけにもいかない。

正直此処に来る事すら嫌だったのだ。しかしそれならば逃げればいいだけの話なのだけれど、情けない事に僕は目の前の女性、と言うか彼女の何とも言えぬ雰囲気圧倒されていた。

その為僕は不足の事態を考え、一步も動かずに入ってきた襖に立ちふさがるように直立の姿勢を取りながら誰か入ってこないかと警戒し、何時でも逃げられるようにしているのだが。

蛇に睨まれた蛙とはよく言ったものだ。今なら蛙の気持ちがよく分かるような気がする。いや、立ち竦んでる訳じゃないよ、ただ怖いだけなんだよ。

ぶつちやけ彼女の事は信用出来ない。

テーブル越しに見る女性はお断なく、漆黒の瞳を鋭く細めて僕を見ていた。

瞳の奥は深い知性の色と僕を見定めるような、値踏みをするような未知に対する探求心が見え隠れしている事に気がつき——僕に似ている。そう思ったが頭を振ってその考えを振り払った。

思わず警戒心が緩みそうになるのを本を無意識の内に撫でそれを戒める。

どうせなら今すぐここから逃げ出したい。ああ、なんで出てきたんだろ……久しぶりの外出に浮かれていた、もう満足したから早く洞窟に戻って今度は大人しくしてずっと本を読んでいたい。

何ならこのまま強引に突破してみるか？

しかしそれは悪手だと思わしくともわかる。妖怪の僕が怪しい動作一つすれば、都市の安全のための大義名分とやらで彼女に通報、又は何らかの力で一瞬で消されるかも

しれない。なんだか本能で分かる。この人に逆らっちゃだめだ、と。

そもそも彼女は知っているか分からないが僕は妖怪である。しかしそれを知らなくとも追われていた者、それも怪しい服装（目の前にいる女性も大概だが）の男と一対一で対面する事に動揺する様子がない。

その姿を見るとそれなりに武道の心得やら何らかの作戦、とまあ何かあるのだろうか？ 勘ぐってしまう。今のところは大丈夫だが不安がある僕としては何とも心細い。

そして僕の使命は主の安全が優先、この場合は本だが契約の内容は単純、誰の手にも渡らないように守ること。

そして何より僕には他にもやりたいことがある。こんな所でヘマをして死ぬ訳には行かないのだ。それなら尚更警戒を緩める訳にはいかないだろう。

「その本がそれほど大事なのかしら？」

「——ッ」

急に話題を振ってきた女性の声は実能的を射てる質問だったからか、思わず頭の中で想定していた事態と考え、体が強張ると同時に本を抜き取り反射的に警戒態勢に入った。

その僕の行動にさらに眉を顰める女性だが、なにも言わずお茶を啜る。部屋の中はお茶を啜る、ズズと言う音だけが残り、沈黙が僕達を包み込む中でそれを破るように口を

開くのは僕だった。

「……なんで、なんで連れてきた？」

それはこんな状況だからこそ浮んだ素朴な疑問であろう。そもそもあそこにいたら見つかるのも時間の問題だった筈なのだ。

位置的にもそう、追跡者達は何故か僕の逃走経路を把握していた。あの時は運良く通り過ぎて行ってくれたが消えた場所を再調査すればすぐに見つかってしまつてただろう。だから尚更それが解せない。

それなのに態々こんな所まで僕を連れてきて何をしたいのか、考えるだけ無駄と分かつていても憶測が頭の中を飛び交う。

彼女は頬に僅かな微笑を浮かべながら、ゆっくりと口を開いた。

「だつて貴方、妖怪なのに人を襲つたこと無いでしょう？　自慢でもないのだけれどこの都市に張られた結界は一度たりとも妖怪に破られた事がないモノに守られているの。其処に貴方がやつてきた。普通あれば浮かれて考へてる暇もなしに人間の一人や二人襲うんじゃない？　……ああ、貴方も少しばかり浮かれていた様だけれど人つ子一人襲わないし、逆に落ちてるゴミを拾うなんて、私としても無害な妖怪を殺すなんて良心が痛むのよ」

その後女性はやれやれと、言つた様子で何処か芝居掛かつたその答へに僕は目を細

めた。

言っていることはあなたが嘘は含んでなきそうだけれど、後半の内容にはどこか陰つて見える。

質問に答えてるようで答えていない……それに何故僕の正体に限らず行動まで把握しているのかが分からない。そこに内心イラつき覚え、歯を噛み締めながらもこう問い掛けた。

「——じゃあ、僕達は初対面？」

「……ええ」

そうすまし顔で答えた女性だが僕には何処も違和感を感じなかった。しかし僕の能力でもある『間合いを計る程度の能力』では——彼女はあまりにも『近すぎる』のだ。

この女性が僕に抱いている心の距離があまりにも……。

人間と妖怪が線引きされている線の上を明らかに、僕と言う存在に交わる様に越えて来ている。

しかしそれは僕という存在だけ、他の妖怪に対しては凄まじいほど距離が離れ、逆に嫌悪すら懐いているレベルだ。

それなのに相手が妖怪と分かかっていてそれは在り得ないだろうという事実が一層僕の頭を悩ませる。

いくら人に危害を加えない人間でも初対面なら少しくらい警戒心を抱くだろう。しかし今は妖怪である僕がいるのにそれらが全くと言っていいほどない。安心仕切っている。しすぎているのだ。

元からそうなのか……？ いや少なくともそれはないはずだ。ここに来るまで僕はずっと能力を発動してこの女性とほかの住人との間合いを計っていた。

その結果、すれ違った人達に対してこの女性はそのほとんどに、少なくとも警戒心を抱いていた。その表す意味は孤独……だろう。別に天涯孤独といった訳ではないだろうが少なくとも人を避けている印象を僕は受けた。

しかし彼女が返答を返したとおり初対面なものにも関わらず何ゆえ僕がここまで彼女に近い間合いにまでいるのかがわからない。それとも先の言った事が嘘言とすれば、離れた時に逆に僕の警戒心が強まるのだから更に相手にうまみがない返答だろう。

それならば彼女の言葉を素直に聞くとして、少なくとも言葉通り僕に危害を加えるつもりはないのかも知れない。

そう僕は思案に結論付け、のそのそ女性が座るテーブルの反対側に腰を下ろした。それに少なからず女性はその僕の姿に瞠目していたのを僕はそれをあえて無視した。

「一先ず、自己紹介しようか。僕は玲というよろしく」

今更感ばりばりだが、まあ初対面として接するならば当然の成り行きだろう。

「あ、え？ ああ、私は八意永琳よ。ここでは主に都市の管理を任せられてるの」

そう少し慌てて言った彼女——八意の言葉に次はこちらが瞠目をする番だった。

「え、都市の管理？ 先も言ってたけど結界、それに今まで一度もつて言つてたのだから歴史に関して、いや調査書の閲覧で確認か？ 防衛……まさかだけど軍の管理——指揮官だったりするの？」

ぶつぶつとそう呟いて最後にそう質問すると縦に頷かれた。うそー、強攻策に出てたら本当に命が危なかったようだ。

少なくとも容姿は12〜14歳そこそこ。まだ発育が仕切つていない体のせいか、ひどく若々しく見えた。

これほど大きな屋敷だ。僕は少なくとも名家の出からの七光りくらい、だろうと先までは考えていたが……。全く違つて訳ではないだろうが少なくともこの若干10歳でこの都市の管理すら任せられているのだ。七光り、名家出と言つても異常とも言えるのではなからうか？ 歴史上ではそんなものは幾らでもあつたがそれはあくまで本、歴史書での話してそれを目の辺りにして僕が驚かない訳が無く、不思議と彼女と目線を合わせないようにと目が泳いだ。

それにこの歳で少なくとも複雑な政治、理念、法律が絡む役職を任せられるほどの頭脳を持つていることに少なからず身震いを覚えた。それと出来るだけ動揺を表さない

ように、僕は無言で彼女に中身が見えない位置で本を開いた。読む内容はもちろん『生物図鑑』だ。これさえ見れば大体のことがわかる。この混乱する頭も少しは落ち着くだろうと深呼吸をしながら僕は念じてその記述を開いた。

△▲▼▽△▲▼▽

◇苗字 八意 名前 永琳

種族：人間 能力：あらゆる薬を作る程度の能力

体力：94／90 スタミナ：45／40

状態：精神—『不安』

装備：永淋製のワンピース

八意製薬品

(弓) 霊吊

ステータス

妖力—0／0 霊力—340／320

魔力—0／0 神力—0／0

腕力—29 IQ—165

素早さ—63 運—65%

△▲▼▽△▲▼▽

「……（まずいまずいまずいまずい……！）」

「あら、いきなり本を開いたかと思つたら固まつてどうしたのかしら？」

「ふう……どうやら少しばかり走つたせいで疲れてるんだな、あーちよつと緊張したせいで目が痒かつたからたぶんそのせいだろう、うん——」

「二人で何を言つてるの？」

そういう彼女は歳相応に可愛らしく、首をこてんと傾げるのも全く見ずに、他の事が目に入らないほどに僕はもう一度確認する様に本を凝視。

この八意という女性、今分かつたことだが、化け物だ。

人間とは思えないほどの能力……この馬鹿げたステータス、もし相手にしていたらと思うと冷や汗がとまらん。い、いや落ち着け、まず冷静になろう。少なくとも彼女は人間ではないと考えよう。とりあえずは——。

「八意さん、ほんとに人間ですか？」

敬語は何となく、反射的にそうなつた。理由としては弱肉強食と言う言葉はあるだろ。

「あなた、いきなり何を言い出すかと思えば……もちろんそうよ」

「嘘だ！ 何で僕のほうが長く生きてる筈のなのになんだこの化け物ステータスは！」

「すて……ええ？」

なんだか今まで自分の努力が踏み躪るところか潰されたような気がする。まあ魔術なんて本読むだけの簡単な作業で、半分くらい趣味としとしても、ああ……でもあれだけががんばったはずなのになあ……。というか僕の種族は普通のそこらにいる人間より劣るのか、なんとという劣悪種族、僕はこの体を持って生まれたことを生涯怨むであろう。ちくせう

「ちよつ、どうしたのよいきなり泣き出して!」

「泣いてなんかいない! これは心の汗だ!」

もはや自分でも訳が分からん言動を吐きながらも、指摘された通り袖で心の汗を拭い深呼吸、落ち着くんだ僕よ。

そもそも人間にも人外級の人だつてたまにいるだろう。実際前にもそれに似たような人が、僕の周りにもいた。人間諦めるが肝心、そう僕の目の前にいる人は人外なのだ。人外、それならしょうがないね、うん。僕も人外だった気がするけどそれも気のせい、そうに違いない。

「そうそう、人外さん。もうそろそろ帰っていいですか?」

突拍子も無いこという僕。

「……あなた何を言ってるのかしら?」

そう笑顔でピクピク頬をひく付かせてる八意さん。心なしか握っている湯のみにヒ

ビが入っているような気がする。高そうなのに、壊しても大丈夫なのだろうか？

というか帰してくれないのだろうか？ その有無を聞くと

「あら？、これだけ言っておいて五体満足で帰れると思っっているのかしら」

その後光が差すような、見たものを戦慄を覚えさせる笑顔で、そういう八意様。はて？ 無言で取り出した注射器は何を意味するのだろうか。

「ちよ！ 落ち着いてください八意さん！ なにその毒々しい色の注射器は!? なにその無言の笑顔、怖い怖い！ 針をこっちに向けてどうするつもりですか!? ちよ……ま、アー！」

血管の中に何やらドロドロ黒い色の液体が流し込まされると同時に瞼が重くなり、僕の意識は暗い闇の底に落ちてしまった。

◆ ついやってしまった。沈鬱な声色でそう呟くのは八意永琳、その人であった。

その項垂れる彼女の足元、その真下では白目を剥いて生物が物理的に出せるはずが無いであろう紫色の泡を吹いて倒れていたのは妖怪である玲であったが気絶しているのか、全く動く気配はなく、いや、確かに時々動いてはいるがピクンと脱力している手足が跳ねる光景は何とも不気味であった。

「いめんなさい……」

永淋は少なくとも恩人である玲に手を出してしまったことに少なからず、後悔の念を抱きながらも表情は何処か恍惚の色を含んだ笑みを浮かべていた。

そもそも玲の質問には初対面、そう答えたが実はと言うと会ったのは初めてではなかった。

初めて会った、と言つてもそれはほんの少しの時間であり、それにお互いに会話すら許されない状況であつた為に玲は永琳に会つた事など忘れていた。

その日、二人が出会つたのは森の中であつた。永琳はその日、屈強な男達の護衛を引きつれて不足であつた薬剤の材料である薬草の調達をしていた時に妖怪に遭遇してしまい、偶然にもその時は永琳の武器である弓を薬草採取に邪魔だつたために護衛である男にその時は運悪く預けていた瞬間だつた。

そして不運にもその男は真つ先に妖怪に殺され、護衛であるほかの男達も永琳を庇う様に盾となり果敢にも攻撃を加えようとするも、所詮はただの人である護衛が妖怪に勝てる訳も無く。蹂躪され、刻まれて、喰ひ殺されていった。

普通なら妖怪に対抗する為の力を持たない男達を連れて来る事はおかしい事だろうと思うだろうが、それはあくまで彼女が弓を引く時間を稼ぐ為、そしてその唯一の妖怪に対抗する手段を奪われたのだからこうなる事態は必然とも言える事だつた。

武器をその手に持つていなかった永琳同時に其処までに考えが至り、死を覚悟した。

そこに現れたのが彼だった。

彼——いや玲は妖怪が永琳に今にも飛び掛ろうとした瞬間、自分が囿になるよう石を投げる少年を永琳は視界に納めていた。

その姿は一言で表せば子供らしい、顔立ちは可愛らしいとも感じさせる幼子そのものだった。故に、目の前で投げられたただの石で倒れた妖怪の姿が永琳には信じられなかった。

子供は此処ではあまり珍しくない平凡な漆黒の髪だった。そしてふと目に入った普通では在り得ない、灰色の目。そして見たことがない。明らかに体に合っていない、身の丈に合っていないと思えるだぼだぼの灰色の服はまだ幼子と言える少年の体には凄まじい違和感に永琳は混乱している頭の中でも素直に不相応だと感じた。

それに彼女の眼下に納められた遜色された本がその違和感を一層極めていた。

永琳は瞬時に危ない！　そう警告の声を上げようとすると、喉から出るのは唸る様な音のみ。このままじゃあの子は殺されてしまう、それを分かっているながらも声が出なかった。それは何故なら妖怪がこの程度の攻撃で倒れる——死ぬ筈がないと理解した上での判断だった。

だから彼女はあえて自分の保身のため、声を上げなかった。

結果、永琳は無事に今の都市であった村に帰れた。しかし護衛は全滅、囿になるよう

森に逃げ込む走り去った少年の安否に至っては消息不明。

この時、永琳の心の中にはなんとも言えぬ自己嫌悪の感情が渦巻いていた。それは他人から見たらそれをハッキリ言うなら仕方ない事、正しい判断だったと賞賛を贈るであろう。何故なら更なる犠牲者が一人増えたのかもしれないのだから。

そもそも護衛が全滅する中で生き残ったのが永琳だけで、それに少しばかりの怪我はあつたものの無事に帰って来れた事はまさに奇跡に近いと言えた。

この世界では外に出て妖怪に殺されるなど日常茶飯事、そんな事は永琳自身分かつている。

だが永琳の心中にあるのは若さ故の、あの時声を上げれなかつた自分に対しての罪悪感と後悔の念と、あの自分の窮地を助けてくれた少年の姿が頭から離れなかつた。

それは幾末の年月が経とうとも、村を発展させるのに心血を注ごうとも消えることが無い負の感情が彼女の頭をそれこそ永遠とも思える長い時間の間悩ませていた。あの自分を助けるため身を投げ出した少年の姿が、自分の冴える思考が月日が経つ後とに罪の意識を増長させ、深まり、心の奥底までその傷残は根深くなつていった。

そして何時からだろうか？ 永琳自身、無意識の内に人を遠ざけるようになっていった。

しかし永琳自身は此処まで村を発展させた天才と周りから持てはやされおり、もちろ

ん周囲は嫉妬など感情を持ちながらも、永琳自体に畏怖の気持ちを抱いていた。

その為か、彼女が無意識ながらも人を遠ざけていることには周囲は特に何も言わなかった、と言うよりも村人達が自分達とは掛け離れた、違い過ぎる存在と思っっている彼女に声を掛ける事を諦めていた。

それは勿論日常生活に支障ではないにしろ。深く、だがそれは確かに村人と彼女の間には見えない深淵のような溝が出来ていた。

彼女は八意家の長女として周囲から天才などと称される中、それでも自分は一人の少年すら救えなかった。あそこで声を上げていればなにかが違ったかも知れなかった。

そう今にしては無駄な問いを何度も繰り返し、自身を卑下して生きてきた。

そして、運命と思える日がやってきた。あの少年に会ってから385年8ヶ月と6日の今日、其処で運命の再開を果たした。

最初は結界に異常があったと言う通報で気だるさを感じながらも性格としては真面目な彼女は業務を真つ当しようとする結界の調査と、都市内に張り巡らされた監視カメラの確認をしていた時、画面越しにその姿を見て永琳自身、自分の目を疑った。

幾分か成長していたものの、見覚えがある黒髪にまだ幼いと感じさせるその体にあの灰色の服、それと忘れもしないあの本だった。

(生きてた！生きてた！)

それを見て子供のようにはしゃぐ永琳は心の奥底から、飛び上がりそうなほどそのことを喜びが湧き上がると同時に涙した。

あの少年が生きていたこと、それは自分の罪の意識は消えることはないだろうが、救われるような気持ちになつた。

永琳は涙で曇つた目を擦りながらも、その何事もない様に興味のまま、周囲に目を向ける少年の姿を見て、自身の手で苦しくなる胸を押さえていた。

いつの間にか、それは何時からだつただろうか。何時しか永琳は罪のことを考える後悔の念と同じくして自分の事に命を懸けて助けてくれた少年の姿を思い出す毎に愛しいという気持ちを抱いていた。

誰もが思い浮かべた事がある、子供らしい考え。それこそ御伽噺である白馬の王子様を彼に置き換え、自分はその姫と置いて。

しかしそれは叶わないこと、実際少年と合つてみるとそれは歴然と、壁となつて立ち塞がっていた。

先まで玲は警戒心で威嚇するように、彼女——永琳を憎悪とまでは言わないが明かな苛立ちを含んだ眼で睨んでいた。

それは初対面の者同士では当たり前、無理矢理連れて来られたのであればそれは当然とも言えたが彼女は其処まで頭が回らなかつた。

玲からしたら一時は追われていた身なのだから警戒するのはそれこそ普通のことだっただろう、が。少なくともその敵意を含んだ彼の姿勢に永琳の心を深く傷つけた。すつかり、玲は永琳のことなんて、あの時の事なんて覚えていなかった。

自分を支えていた都合のいい妄想、それが脆く崩れた瞬間だった。

永琳は何時からか、彼が私の事を憶えてくれていたものだと、恋する乙女のように期待を抱いて感動の再開を果たせるものだ……そう思っていた、そう勘違いしていた。

それと対面して分かった事、彼は妖怪だった。

そしてなにより永琳の中に深く、それも奥深くまで根を生やす罪の意識、もしそれを玲が知ったら彼は迷わず、生きてたしどうでもいいなどと言うだろう。

彼女自身覚悟していた。

嫌われてしまうだろう。拒絶されるかもしれない。

不安でいっぱいだった彼女は少なからず彼と会話して、その予想は概ね当たっていたと結論を付け、落ち込んだりもしたが直ぐにその感情を押さえ込んだ。

それより今のこの時間を大事にしたかった。

会話が出た事によって何かを満たされるような感情が、それが彼女には素直に嬉しかった。

それはただの自己満足だ。そんな事は誰よりも自分が分かっている。

だが誰も本当の一人、彼女を八意家の人間として見て来た周囲の人間達とは違って永琳として、彼は自分のことを一人の人間として見てくれる様な気がして嬉しさのあまり我を忘れていた。

しかし彼は言ったのだ。

『そうそう、人外さん。もうそろそろ帰っていいですか?』

え? そう唐突に言われた言葉に彼女は疑問に頭をかき乱された。

やつと会えた。それなのにどうして。もつと、もつと一緒に居たい、話していたい。

そう思ったのにもう帰ると彼は言うのだ。それもそうだろう彼は妖怪、彼女は人間。

根本的に違うのだ。彼女自身、彼から罵られることはどうでもよかつた。そもそもそれだけのことを、言われることやつたのだと彼女は自分の中でそう考えていた。

当たり前だろう。この時、彼女はすでに何処かおかしかつたのかも知れない。長年の孤独、罪の意識、周囲から視線、何より彼がまたどこかに行ってしまう事にひどく、落ち着いた気持ちで、どこか冷めたようなそう、一言で言うなら——歪んだ束縛の感情が湧き上がった。

——それから冒頭に戻る訳だが、彼女は……八意永琳は彼を膝に乗せ抱くように、そしてどこかに狂ったような光をその目に宿しながら微笑みを湛えその手は愛しいモノを愛でる様に彼の頬を撫でる。

「……絶対逃がさない」

眩かれた狂気の言葉はその時の彼には届く事はなかった。

## 第5書 消えぬ……

——あれ、ここは……

目が覚めたと思つて気がついたら闇の中だった。其処は一筋の光も、其処には差す事を許されない空間のようで目を見開くも見えるものは何もなかった。

——あの後どうなったんだっけ？

頭の中には霧が立ち込めたように思考が霞んで記憶も探るも何も見えない。まるでこの視界に広がる、深淵のごとく、どこか記憶がぼっかりと抜け落ちたようだ。

——というか僕、ここに来たことがある——？

不明瞭な思考の中でふと沸いてきたどこか確信めいた疑問に我ながら頭を捻つた。何故そう思つたのか、自分でも分からないが曇つた頭の中ではなぜか、それは当たり前と告げていて、同時に視界の闇が払われ、変わりに周囲には白い靄が立っていた。

視界の中央に映つたは、靄の中に佇むどこかおぼろげで、薄い影をさらに薄く引き延ばしたとも思える、灰色のナニカがいた。

それは複数居て、僕を囲むように佇んでいた。そのナニカの幾つもの探るような視線に、感じた奇妙な感触に身を強張らせ、次の瞬間に起こるかも知れないナニカに身構え

たが結局の所何か反応があつた訳ではなく、何も無かつた。

何もしないソレはまだ動く様子はなく、逆にこちらを見守つていようでもあつた。不思議と不安、不気味と言つたソレに対する印象が薄れ、同時にじよじよにハッキリしてくる意識に目を向けた。

敵意は感じないし、大丈夫か……。強張らせた体を緩めると、靄の中から一際大きな影から囁く声が入つてきた。

『主に付き従う者よ……。自らの責務を忘れるでない。もし、自身の力が及ばなければ、主の名の下に助けを乞え、願え、懇願しろ。さすれば我らは夜闇の風の如くそなたの下に今一度集うであらう』

「え？ それってどういう意味だ——」

それだけ言つと、影は薄れ、周囲には靄といきなり言われた言葉に戸惑う僕だけが其処に残された。

「主に付き従う者、か……」

そう言葉で反芻するとなぜだか嬉しさが込み上げて来た。無意識に顔が綻んだ、そんな気がした。

ふと腰の本を見ると驚くことに淡い蒼い光に本を包み込んでいて、それは徐々に僕の体を抱擁していく。次に目が開けられないほどの眠気に襲われて、腰を普通の地べたと

は思えないに床に落ち着けた。

途端に意識が保てなくなり、体を横たえると闇に吞まれる中であの声が聞こえたような気がした。

『——自らの責務を忘れるな書の番人よ。欲望は力、ゆめゆめ忘れるでない。お主の今この世に欲望が体現することを祈る——』

その瞬間、押し寄せる眠気に僕は身を委ね、意識はまた薄れて行った。



目が覚めるとまず自分が布団を掛けられた状態でベットの上で横になっていることに気づいた。

どこだろうここは？ 布団から顔を出して、部屋の中は見ると沢山のプラスチックやら何か分からない機械、そしてなんだかわからない色の液体と。

試しに匂いを嗅いで見ると鼻を突くような薬品の臭いに思わず顔を顰めた。

部屋の中は意外と清潔感漂うと言った様子でごちゃごちゃとしているにも関わらず、何処かしつかりと整理されていた。

「……とりあえず起きよう」

ここがどこだか今は置いておくとして、というか十中八九八意さんの研究室とかそんなんだろう。能力がそんなだったし。というかここは研究所兼、彼女の部屋なのだ

ろうか？

僕の横になつていたベットは研究室に置くにしては随分と高級感漂う物の気がした。普通ならただ寝るだけであればこれほどの寝具はいらないだろうし、なにより室内に洗濯物が……いや、断じて下着とか下着とか見てないですよ？ というかあの人は恥じらいと言ふものが無いのか？ ……それと触れないように目逸らしてたけど——。

「——なにしてるんです？ 八意さん？」

実はさつきから背中に感じていた程よい柔らかい感触で気づいていたのだが、意識すると詳しい所は省くがなんだかやばくなりそうだったから無視していた訳だけ……。

「あら？ 一人じゃ寂しいだろうから添い寝していただけよ？」

そう言つてより一層体を近づけてくるけど意識しないぞ、しないつたらしない。

「へえー僕からしたらまるで僕が抱き枕にされているだけなような気がします？ 出

来れば今、すぐにでも！ 手を離して貰いたいですけど？」

「まあまあ、反抗期かしら？ お母さん悲しいわー。さあ、そんな些細な事後にしてご飯にしましょうか」

「些細!?! どこが？ と言うか八意さん、髪の毛的にどう考えても貴方僕の母親じゃないですからね！ それとこれでも僕は八意さんより年上ですから子供扱いしないでください！ というかなんですかこの部屋は？ 僕も一応男なんですからもう少し恥じ

らいと言うものをですわね——」

「はい、お茶どうぞ」

「あ、ども……じゃなくて！」

不意を付かれて思わず少し飲んでしまった湯のみを机に叩きつけるように置くと、怒る僕を見て楽しそうに笑う八意さんがいた。その顔を見て直感した——この人絶対Sだ。見てみるよあの楽しそうな笑顔、室内は明るいのになぜか笑顔が黒い。

「ほら、案内するからついてきなさい」

「つて無視するな——！」

僕の声は無情にも屋敷に木霊するだけで僕のストップの呼び声も勿論、八意さんには聞いてもらえないはずもなく、にこやかに此方に笑いかける彼女の姿に出かけた文句の言葉も喉に詰って僕は渋々広い屋敷の廊下を進む彼女の後ろに着いて行つた。

「それと僕が子供って言うの、あれ訂正してくださいね」

「……以外に小さいのね……」

「何か？」

「いいえ、何でもないわよ？」



とある屋敷の台所、其処にはとある天才住んでおり、その女性は何時もは自分から台

所に立つ事は滅多になく、業務が忙しい彼女は日常的には簡易に作れる手頃なレトルト食品を口にしていた、筈のだが。何故か今日に限ってはそれが違っていた。

ところで話は変わるが周辺住民が懐く彼女、八意永琳に対する印象は、無愛想、無表情、無感情などと見事に鉄仮面その人のように思われているのだが、今朝台所に立つ彼女の姿はどうだろうか？

彼女は何時もそう笑っているのかというくらい、違和感が全くない自然な微笑みをその顔に浮かべ、今にも鼻歌を歌い出すくらいに手早く朝食を作っていて、誰がどう見てもそれはそれはご機嫌の様子だった。

「ふ〜ん♪、ふ〜ん♪」

もし、彼女を少しでも知る人が見たら顎をあんぐりさせていたであろう。と言うのも彼女八意家、つまりは今ここにいる屋敷だが、彼女以外住んでいない。

唯一いるとしたら週一度にくる家政婦くらいのものだ。しかしそれでも掃除、溜まった衣類の洗濯を済ませるとすぐに帰ってしまう為に、そして永琳自身、仕事がある為に家政婦とは知り合い程度の関係に納まっていた。しかしもし此処に彼女が居合わせたのであれば、思考停止の後で卒倒、その後間違いない病院に駆け込むであろう。その後の精神科か眼科かはお想像にお任せするが。

「八意さんやっぱり悪いですしご飯は……」

そう控えめに言う遠慮気味の声、発生源は小さい子供、勿論玲その人である。

何時ものようにぶかぶかの灰色パーカに本当に穿いているか、いや穿いていないかもしれないが見えないシヨートパンツ、そしてその体つきに似も合いもしない不恰な本を胸に抱くようにして持つていた。

彼女はそちらに振り向きながら布で水つ気を拭き取り遠慮している玲の頭に手を乗せ、寝癖であろう髪のを直しながら笑顔を向ける。

第三者から見たら親子と勘違いしそうな場面だが現実としては年齢的にはどちらも300は軽く超えている高齢である。

「料理なんて一人分も二人分も同じなようなものよ。それとも、貴方は人間以外食べないのかしら？」

茶目つ気たつぷりにそう言う彼女の顔は明らかに彼をからかったそれなのだが、悲しい事に昔から対人関係に難があった半コミュ障の彼にそんな冗談が通じる筈がなく。

「そんなわけ無いじゃないですか！」

そう心外だつと言ったように憤慨する彼は際限なく頭を撫でる永琳の手をバカにされてるのだと感じ、払いのけて元居た居間に引っ込んでしまった。

「……」

彼女は払われた手を名残惜しげにしばらく見つめていたものの、沸騰した鍋が泡を吹

かしていたことに気づき、先と変わらず何事も無かったかのように調理に戻っていった。

「ところで玲、今後行く所でもあるのかしら？」

平凡な家庭によくある味噌汁に何の魚か分からぬ焼き魚に白飯と言う朝食を食べ終わり、食器を片付けて彼が出されたお茶飲みながら一息付いている所、彼女がそう話題を切り出した。

そのいきなり出された話題に若干困惑しながらも玲は考える。

行く所、と言つても玲自身、ここに來てからずっと穴倉生活していたせいで知り合ひなんて一人としていない。そうなのだから行き場所などある筈もなく、彼自身やりたい事があるのだが今の環境ではそれが難しいと考え、此処に來る前にその事に関してはある程度妥協と言う事で当分は無理だろうと諦めていた。なら如何するか、強いて言えば今後必要になるであろう此処が何処なのか、この世界の事を深く知る事だ。

そもそもこの都市に來たのは偶然の産物でしかなく、侵入したのもこの世界を少しでも知る為で立ち寄っただけであつた。

その結果、大分手間取つたが必要な情報は入手は終わり、当分はまたあの穴倉に戻つて引き籠もる生活を続けようかなと思つていたのである。あえて口に出して言わないが

彼自身、本だけ読めれば後は静かでさえあれば別段何処に行こうがどうでもよかった。

「いや、行く所は特にないけど何処か静かな、安全な場所に行こうとは思う」

ゆえに、適当にぼかしてそう行つたのだが、彼がそう言うや否や、永琳の目が一瞬キラリと光を帯びたような気がした。

「ならここに住みなさい」

「え、いやでも迷惑だと思ふし——」

「住みなさい」

有無も言わさぬその言葉に玲は彼女の変貌振りに思わず口を塞ぐ。そんな沈黙が部屋を包む中で少しバツが悪そうに永琳が謝つた。

「あー……ごめんなさい。少し私らしくなかつたわね」

「いえ、こちらこそ……八意さんが気にする事ありません」

どこかギクシヤクした様子で言う彼女に軽く微笑みを向ける彼であつた。

先ほど空気は払拭され、ふと気づいたように彼女が言う。

「そうそう玲、私のことは八意じゃなく永琳と言つて頂戴」

「え、でも……」

「私が呼び捨てで玲と言つているのにそつちだけなんだか堅苦しいじゃない。それと私自身、あんまり八意家の名前は好きじゃないのよ」

何処か陰つたような彼女の顔を見て幾らか察したように玲は了解と言つた様子で頷いてそれに合意する。

「それじゃ永琳さん——」

「永琳ね」

「……永琳は僕がここに居ても迷惑じゃない？　人襲つた事ないと言つても僕は妖怪だよ？　本に書いてあつたけど……人と妖怪は争い合う存在でしょ？　正直ここに居たら永琳に何かと迷惑になるんじゃないの？」

彼が言うのは正論だつた。指摘された永琳は内心でそれに同意を示した。

実際この都市には元から居た住人以外に、都市外、つまりは他の集落から逃げ込んできた者達も数多くいる。

逃げ込んできた理由は様々であるが、大多数は近年拡大している妖怪の侵攻が原因にあつた。

そして少なからずとも、そういう者達は妖怪を憎み、親を殺された、又は恋人か兄弟を喰われた憎悪から傭兵、兵士と言つた軍に入団していることは周知の事実だつた。

この都市は結界に囲まれていて外と中の時間の流れが違い、都市内の住む人間は皆長生きだ。

永琳自身その一人という訳だが、その長い時の間平和に生活を過ごしても住民の妖怪

への偏見、憎しみは消えていないのが事実だと知っていた。

もしそこで彼が妖怪だとばれてしまったら、そう考えると永琳は無意識ながらも、拳を握り締める。

(考えるだけでおぞましい。それにやっと会えたのに、すぐに別れてしまうなんて……)  
永琳は何よりも彼と別れる事、それが我慢ならなかった。もし此処で都市の住人か、それとも彼を取るか。玲とこうやって他愛ものない話をする前なら迷っていただろう。だが、こうやって手の届く距離で話してみるとどうだろうか。考えはある片側に傾きつつあった。

そして彼は悪い妖怪などではなく、寧ろいいと言えた。何より唯一、私自身を一人の女性として見てくれていた。

(それに先ほどは彼が見つかつた場合での私の立場さえも心配までしてくれた……)  
言つてしまえばそれは意識して気遣つた訳ではなく、遠慮から出た言葉なのだが彼女はそう受け取らず、暗にそうなのだと言明付けた。

——永琳は『怖かつた』またあの時のように、時に流され、無気力な無駄な時間を過ごす事が。

(——またあの狂つた時間を孤独に又繰り返し返す。それが、そんな物、絶対、二度と繰り返すのは嫌だ)

悔やまれる過去、苦惱も苦渋と言う沼に嵌っている彼女にはもはや考えるだけ無駄であった。彼女は引き締めた顔で玲と向き合う。それを見て玲もそれに釣られ、緊張するように居を正す。

「——なにが合つても、どんなことが在ろうとも全て私がかんとかするわ。だからお願い——……一緒に居て」

それは正確にはお願いじゃなく——懇願だった。だが永琳それには気づかない。ただ彼だけは頬を流れて零れる透明の水の意味を理解出来なくとも、それを慰める事は出来る。

落ちる雫を途中、遮るのは彼の小さな手。

「……はい。僕でよければ、だからそんな哀しそうな顔しないでください、ね？」

いつの間にか近くに寄り添っていた彼の小さな胸に、彼女は飛び込むように袖を掴み、しばらくの間、屋敷には女性がむささび泣くような声が響いて溶けていった。

彼女は消えない罪を洗い流そうと、長年の苦渋を流すように、彼はさざめ泣く彼女の姿に少しの動揺と困惑を表すも、少しでもその苦味が薄くする為に精一杯、出来るだけ優しく背を撫で続けていた。

## 第6書 一時の時間

「お、落ち着いた？」

僕は彼女が突然泣き出してから泣き止むまで、どうにか泣きさまそうと焦りながらもなんやら努力してから随分と経った今、大分落ち着いた息遣いになった頃にそう声を掛けた。

彼女の鼻を吸る音がする。こう言うのは少しばかり失礼かもしれないけど正直驚いた。

初めて会った時、というのも僕と一緒にいる時は違ったが連れてこの屋敷に到着するまで間、ずっと無表情だったからもしかしたら冷徹な人か、それとも感情が冷めた、冷静沈着な人なのかと言う印象を持っていたのだが。

……こんな感情的な人だったとは思わなかった。

僕を呼び止めた、引き止める理由は何なのかわからないけど。しかし何かと深い事情が彼女にもあるのかも知れない。それはさっきの話でも出た家柄の事もあるだろうし、それに仕事も相当大変だろうと余所者僕ぐらいでもそのくらい予想できる。

だから初対面の僕がそれを深く追求する訳にも行かない。

しかし昔はよくこうやって母親にあやされたものだ。今、自分がその逆の立場になるうとは……何だか考え深いなあ。

と、そんな物事に耽つてしていると。

「……ええ、ありがとう」

まだ涙目の彼女は泣いた興奮のためか、目元を拭いながら上気した顔を僕に向けて何故だか礼を言われた。

「——っ、いや別に気にしなくてもいいですから」

そう言つて僕は彼女に気取られないくらいに目線を逸らした。いや、だって恥ずかしいし。

と言うか僕は本当にこの人と一緒に住めるのだろうか？ 啖呵を切つた後ながら自分の覚悟が全くなかつた責任のない言葉を言つた事に、そんな不安と後悔が湧いてきた。

こんな体だからか性欲と言つても微々たるモノで、襲おうなんて思わないし、て言うかそんな度胸も元からない。それよりももし襲つたとしても後のしつべ返しのほうが怖いとか別にそんな理由じゃない。……ない。

とにかく、不安な理由としては色々な経験が僕には無いからだ。

そもそもそつち方面に疎い僕からしたら性欲に釣られて事を起こすなんぞエベレス

トの山を生身で登山するくらい——それも男女に限らず他人と一緒に住む何て言う事が僕としてはこれが初めての出来事である。

前の世界での僕は暇さえあれば本、本、本と、恋愛のレすらなくらいに全くの無関係だった。

というか縁がなかった。恋もした事もない、特に好きな女性も居なかった。ま、閉鎖的な生活をしていただけだからそれも当たり前かと思うんだけど。

それに交友関係も同じで友人も指で数えられる程度で、親友と言ったら本くらい……。家を出るのも仕事に行くか、仕事場の図書館に行く位であった。言ってしまうば準、引き籠もりみたいな感じだったのだ。

職場と言っても女性なんて一人も居なかっただけであつて、こうやって面を向かつて礼を言われるというシチュエーションには慣れていないもんだから一緒に居るだけでも凄まじく恥ずかしい。それも将来美女になると思われる（あくまで僕主観だけど）異性に言われたもんだから……まあ、最終的になにが言いたいかという点、僕には女性免疫が極端に低いと言う事だ。

「……………」

いや、ですから顔が近いのですけども……少し僕の様子に気づいている感じだけど何だか不思議そうにしていた。と言うか体も近いって……分かってやっているのか、それ

とも天然なのかこの人は。

「え、あ、はい。すいません——って今すぐ離れますねっ」

混乱する頭で何とか絞り出した言葉を吐いてきつと体を引いた。

「……あ」

そう微かな音を洩らした彼女に僕は視線を向ける。

何か僕が粗相をしたかと疑問を込めて顔を向けると彼女は慌てたように手をぶんぶん振りまして、なんでもないと言ったのだが……なにがなんでもないんだろ？　しかしそんな疑問よりも、どうやら彼女の振る舞い見る限り、少しばかり憑き物が落ちたと云った様子、僅かに弛緩した雰囲気表情を緩ませながら元の位置に腰を下ろした。

「そうですか。そしたら僕はどこに住めばいいんですか？」

お互いに腰を落ち着けるのを待った後、そう僕が聞くと彼女は一瞬訳が分からないと言った顔をした。

まあ、まだ先の動揺でも残っているのだろう。そしてきつききはあんな事を考えたが、永琳と一緒に暮らす事は無いだろう。精々住むと言っても他の部屋か、最低でも物置くらいであれば僕としては十分なのだ。

うんうん頷く僕を見る永琳はすぐに気を取り直したよう、なんでもないと云った声でトンでもないことを言い出した。

「なに言ってるの？ 私の部屋に決まってるじゃない」

「はっ。」

思わず、思考が止まって固まる僕。

なにを言っているのだこの人は、それは最悪———というか彼女が言った事、それは僕が考えもしない答えだった。

混乱する僕に対して何故か彼女は満足げな、実にいい考えだろ？ と自慢顔をしているのが妙に腹立たしい。ていうかなんでさ！

幾らそう言う事に疎い僕だとしても普通、男女と言ったら別々の部屋に泊まるのが普通だつてくらい知っているし。しかもこの屋敷だ。

部屋なんて廊下を歩いている時に幾つか見たし、これだけ騒いで誰も来ないのだから住んでいる人も永琳だけだろうし予想できる。なら何で？ 訳が分からず其の佞言葉にして聞くと。

「ふうん、普通は男女別々なものね。まあ他所は他所、うちはうちよ。勿論理由はあるから少し落ち着きなさい」

やはり先ほどの泣いた時の動揺が残っているらしい、常識という頭のネジが一本や二本抜け落ちたみたいだ。

しかし、これをほっとくほど僕は人でなしではない。よし、これは一度衝撃を与えな

いとだめだなと、女性に手を上げること若干の苦心を懐きながらも硬い決心を固めるかのように拳を握り締めて振り上げた——所で彼女に止められた。

何だと睨むように見ると彼女は先ほどの泣き顔ではなく、悪戯が成功したような子供顔をしていた。明らかに冗談だと言ったその様子に、真面目に話を聞いていた僕としては若干むつとしながらも、ここは大人である僕が一步身を引くことが大事だろうと話を促した。

「この屋敷には私以外住んでいないのだけれど、一週間に一度、本家の家政婦が来るのよ。表立ては普通の家政婦となっているけど、正確には私の監視が目的なのよ。そんな中で貴方が彼女と鉢合わせになったらどうなるか、分かるわね？ 自分でも言うものもなただけれども私は友人が少ないと自覚してるわ。だからこそ、そこで貴方と言う存在がばでもしたら……」

そうつらつらと語る永琳だが、僕はあーそう、へえー程度に流していた。

だつてただ子供が監視なんて——と永琳スツペクを知る僕が侮る事なんて出来ないにしろ、いきなり言われた家族からの監視があるんだ、なんてカミングアウト、突拍子も無い話をあ、そうなんだ、と素直に信じるほど、僕は人間は出来ていないし、受け取った言葉をそのまま鵜呑みにするほど純朴のつもりでもない。

しかし全てを否定するのも僕としては気が引ける。というのも一部、その限りなく真

相に近い部分を読み取ったからだ。

言つておくが先の仕返しが出来るとか別にそんな事は考えていない。断じてない。

「あーなるほど、永琳は友達少なそうだもんね」

だから僕は出来るだけ同情するように、意気揚々とそう言った。

「——へえ、そう見えるかしら？」

「うん。だつて永琳つて人から見たら鉄仮面被つてる見たいで無表情だし、無感情なんだもん。それに変に常識がないし、正直、今日と昨日のこの短い会話だけだったけど実はコミュ障なんじゃないかと疑つた——く、らい……で？」

さっきの仕返しとばかりにペラペラと喋る僕。ちらりと今どんな顔をしているかを見ると——見た瞬間から後悔した。

「へえーそう見えるのね……」

「う、うん……だ、だからこれからは少し、気をつけたほうがいいかも……？　ハ、ハハ」  
永琳の笑顔が怖い。目が笑っていない笑顔とは存外シニールである。何時の間にか乾いた喉から枯れた声が洩れ、お互いに空笑い一通り笑い合う。

今すぐ逃げたい。どこへでもいいからこの場から一刻でも早く。

「さて、薬どこにやったかしら」

そしてなにやら服をポケットを探る彼女、定期的に服用する薬でもあるのかな？　僕

の予想では精神安定剤が妥当な所……いやもしかしたら頭が直るとかいうのもありかも。

「どこに言ったのかしら睡眠薬」

「眠らして何する気!?!」

「——冗談よ」

「なにその最初の間？ 出来れば断言してもらいたいですけども？」

「大丈夫よ。しっかり致死量を入れておいてあげるから」

「だめ！ それ僕が本当に永眠ちやうから！」

「私が永眠……？ 冗談にしてはつまらないわね」

永琳が永眠って、何それ、今の状況でなくともそんなの少しも笑えないんだけど。というか。

「僕そんな事一言も言つてませんが!?!」

はあと深いため息を一緒に流れ出してきた嫌な汗を拭った時、来訪者を知らせると思われる現代と似た、ピンポーと音が聞こえた。

「……ちっ」

「舌打ち!?!」

すると永琳は一度僕を牽制するかのように一瞥をくれるとめんどくさげに襖を開け

て出て行ってしまった。

助かった。そう思うと同時にここでも鐘の音は変わらないのかと、僕はそう実にどうでもいいことを考えていた。

「……………」

しかし考えが途切れると途端に静かになった居間に僕は僅かな違和感を感じ、一人ちよこんと座つては思わず分からないその異変に首を捻つた。

暇だ……。耳を澄ませば微かに聞こえる音が耳に入るも、その音は小さすぎてあまり形にならず、内容まで把握は出来ない。そもそも盗み聞きなんてするつもりさえないのだからそれほど積極的に聞くつもりもなかった。

屋敷内を散策したいが勝手にやっつては失礼だろうし、何より先の話が本当だったら僕が見つかつたりしたら大変な事になってしまう。

結局の所、色々考えた結果、しようがないので僕は一番無難な読書で時間を潰す事にした。

「ふふふ」

でも、久しぶりの人との会話、楽しかつたな……。しみじみそう感想を懐き、一人読書に没頭する事で遅い時間の流れに身を任せた。

空の頂上で光る太陽の下、雑に生えている低めの草木を掻き分けながら現在、僕と永琳は森の中を進んでいた。

いきなり何を言っているんだと思うかもしれないが、兎に角。僕は今永琳と共に草木が生えた道とも言えない道を歩いていた。

来訪者が帰ったあの後、いきなり言われた出かけると言う一言。極力人との接触は避けるようにと言われた傍からその的外れな言葉に僕はほかーんとした訳だがそれは今はどうでもいいとして。

出かける、と言うのも誰しもが、そして僕自身が想像していたモノとは違って、都市内にはなくただの外への外出だった。

それならそれで疑問が湧く訳で、なんで外に出るんだ質問したところ、どうやら永琳が実験に使う多くの薬草のほか、原料が都市内で手に入れられないためにこうやって定期的にそれを補充する為に外に出ているらしかった。

一般的(?)では多くの人は外に必要なモノがあった場合、警備隊に使いの依頼を出すらしいのだが、なぜか永琳はそれをしないと、僕視点だからかもしれないが自慢げに言っていたように思える。

何だか期待するような視線に耐え切れず、溜息混じりにそれを聞くと本人曰く、自分で見て取ったほうが品質のいい物が取れるし、何より場所が場所なので警備隊での大所

帯で行く場合にしては危険だそうだ。

……まあ、要はただの自慢したかっただけと。

「永琳、左手から23メートル先、妖怪が一匹」

ハンドサインを交え、ある一角を指して僕がそう言う。

「了解」

つがえた弓がキリキリと唸り、そこに添えられた矢が不思議な光が包み始める。

で、それを聞いて当然の如く僕が思ったことがある。

そんな場所に二人で行っても大丈夫なんだろうか？ そう内心不安を抱きながらも来て見れば、あの自信も強ち嘘ではなく、僕の考え、今になってはそれはまさに杞憂だったとしか言いようがない。

「——ハッ——」

まず僕が能力を使用し、周囲の妖怪との距離を計る。

近づいてこない限りは出来るだけスルー、または遠回りに迂回して避ける。もし襲ってきたようなモノがいたならば先のように永琳に場所を伝える。

そして相手がこちらに気づき、近づいてきたところに攻撃を加えられない距離から永琳から放たれる霊力が籠った矢で打ち抜かれる寸法、と言う訳なのだけれど。

『シャッ——キ、ギギギイイ！』

今も此方に獣の妖怪が茂みから飛び出してきたところで、弓から放たれた矢に因つて妖怪の頭を正確に打ち抜かれ、その体が木に張り付けになった。最後に上げた断末魔の悲鳴とまだ力なくカクカクと動いている四肢が実に哀れさを誘う。

「ふうー……」

それはもう永琳の腕前は僕の予想以上だった、正直見ているこつちが怖いくらいである。

「さあ行きましよう?」

「あ、うん」

まるで流れ作業のように、射つて、射つて、ずんずん進んでいく永琳の背中に内心慄きながら僕も連れられるかのようについて行く。

そこでふと気になったこと、先までに上げられた断末魔で周囲の妖怪が散つたのか。漸く妖怪の気配が消えた事で気紛れをかねて隣の彼女に湧いた疑問を口にした。

「そういえば永琳、都市側でつい最近で妖怪になにかした?」

「いえ、特にそう言った報告は受けてはいないけれども……」

「どんな小さい事でもいいんだけど……本当に何も無いの?」

「……何か気になることでも?」

ちらりと僕を見る彼女の表情を窺うも特に嘘を言つてる様子はない、だとすると

……。

「貴方の能力、間合いを計る程度の能力って言ったかしら？　今は探知に使用しているみたいけど何か、見つかったの？」

思案する素振りを見せるとすぐそう口にした彼女の声には僅かな不安の色が混じっていた。

「いや、別にそうゆう訳じゃないんだけど、ね。ほら僕が前まで洞穴に住んでたつて言っただでしょ？　そこから出来て来た理由が上の妖怪が騒がしかった、と言うものだったからさ。何も無いんだっただけ。」

……それでも、それなら何でこん何も妖怪が少ないんだろねえ……」

出来るだけ安心させようとそう言い、尾が付いた最後の一言は思わず考えから出ていたものだ。彼女は僕の言葉に僅かに頬を緩ませたが僕はどうも嫌な予感めいたものを感じていた。

上の騒ぎ、それは始めは妖怪を駆逐しようとする人間が原因だろうと当たりを付けていたのだが、彼女の言葉が真相なのであればそれはハズレ。この異変も特に理由がないのであれば越した事はないがどうしてか気になった。

今もこの周辺には今みたいな雑魚妖怪しか居らず、そしてなぜか中級妖怪、大妖怪とも言われるほどの強者達の間合いを計ろうとも、近くにいないのか反応がまったくな

い。

ちなみにだが、僕の能力射程は全力で計りさえすれば約数キロまであるのだから、この妖怪の少なさは洞窟に引き籠もっていた僕でさえ分かるほどの、正直異常と言える事態だった。

洞穴に居た時に感じていた妖怪の気配がほとんど感じない。普通ではあれば幸運と考えるかも知れないが大体の位置が把握できる僕からしたら何かの前兆では？ とどうしても勘ぐってしまう。……妖怪は縄張り意識が強い生き物だ。それらがそれを放棄してまでどこに行ったのか。

「判らないわ。確かに前来た時より随分と少なく感じるけど、それは貴方が妖怪を避けてくれているからとも考えられるし、私の判断は当てにはならないわよ？ —— 思いつくとすれば偶々、妖怪同士で大きな争いが遭って共倒れ……って事くらいかしらねえ……」

ふむ、たしかに彼女の意見も一理ある。

そもそも妖怪は本能に純粋だ。戦いたくなったら近くにいた生き物に喧嘩を売るし、腹が減ったならそれを満たすまで止まらない。それ故に、妖怪は純粋で、個々それぞれ元来我が強い、そう書いてあった。

もしかしたら今のこの現状もその気まぐれの一つ、なのかもしれない。

しかし妖怪同士の争いか——そう言えば少し前の話だが、僕が何時ものように読書に興じていた時に突如、上から大きな妖力を感じた。もしかしたらそれが原因なのかもしれない。

「むむむ」

考えを出そうにも材料が少なすぎる。そう何時までも答えが出ない問を重ねていると、肩に触れる手に気がついた。どうやら目的地に着いたらしく、永琳は僕に「見張りよろしくね」と一声かけると早速、僕から見たらただの草にしか見えないモノを手提げのカバンに詰めていく。

警戒する僕と違ってその手早く材料を採取する様子は、僕に凶太い神経の持ち主だと感想を抱かせた。勿論言ったら何をされるのかわかったもんじゃないので口にはしないが。

しかし、ここまで来てしまえば今更後戻りなんて儲けのない、疲労が溜まっただけのそれこそくたびれもうけと言うものだ。意味のない事この上ない。

それならば僕の役割と言えば周囲の警戒だけ、それくらい真面目にやってやるさ、どうせあととは帰りは来た道を帰るだけなのだから。

まだ危険はあるかもしれないにしろ、一度は通った道なのだからそれほどでもない……と思う。

「あーっ……もうめんどくさいなー」

途端に考えるのが面倒になった。纏まらない思考にイライラして先まで考えた考えを手放し、手頃な木に背を預けて目を瞑り、暫くの間、彼女が草を巻く音を耳で聞いていた。

「さ、帰りましょう」

「んー……了解」

それほど長い時間ではなかったがあまり体を動かさずにいた凝った体を伸ばしながら背中の木から体を離す。日の光を浴びて気だるくなつた体で立ち上がり、服についた着いた土ぼこりを払う。

あれから数十分経つた頃、葉草が入つた手提げを携えた彼女がいつの間にか僕の前に立ち、一つの影を落としていた。

それを見て僕は僅かに落胆する。

この体の小ささはなんとかならないだろうか……。そう切実に願うも、今も背をピンと伸ばしても彼女の肩に頭が届くどうか、我ながら情けなくなる。

「どうしたの？」

「何でもないです、はい」

もしかしたら身長で言ったら140無いのではないのだろうか……。今更だろうがそんな絶望感にうちひがれつつ、能力を使用し妖怪サーチ、うん異常なし。

「なら行きましょう」

そう言う彼女はなぜかこちらに手を差し出す。

訳がわからず彼女の顔を見るとやれやれと行った様子、それを頭に？ を浮かべ見ているとぱつと僕の手を取り歩き出す。

「え？ は？」

それを呆然と、成されるままひきづれるように既に歩き出している彼女の横顔を見上げると、やはり少し気恥ずかしいのか、少し顔が赤い。恥ずかしいならやらなきやいの……。の……。

そう思いながらも僕としては別段嫌ではないのだから拒否することもないだろうと、悪戯心からこちらからも手に力を少し込めて見た。

「——っ」

驚いてびくつとする彼女の肩を見て笑いが込み上げて来たがばれたらどうなるかわからないし、焦る様子を茶化すのもいいが、ここはニヤニヤと緩む口元を手で覆うまでにおさめ、経路の道を進み始めた。

## 第7書 追い追われ

用事も終わり、あとは来た道をゆっくりと辿るだけだったはずの二人。

それが日常であれば——それこそ軽い雑談を交えながら、安全に都市へと帰宅が出来たかも知れない。

だが時には理想と現実では結果は噛み合わず、事象としてそれは必然として起きる事もある。

細い木々が生えそろう緑の中で二人はそれぞれ赤と青、灰色の影を残し、障害物が多すぎる場所での疾走から、それでも肌が傷つくことも厭わずに土を踏みしめた。

「もう少し、だからがんばって……！」

「……」

玲はそう後ろを走る彼女に励ましの言葉をかけ、更に元気づけようと繋がれた手に力を込める。彼女はそれに苦しげながらも何とか頷き、前へと振り返って尚も走る速度を上げる玲の表情は先まで彼女へ見せていた笑顔ではなく、焦燥しきったものに変わっていた。

「……くっそー！」

誰に対してもなく、自分に対して吐いた悪態。それは油断していた、気が緩んでいた自分に対しての叱咤だった。

背後から追ってくる追跡者、感じる力は紛れもなく妖怪のモノ。

「逃げられる？……いや、無理だろ……」

一度たりとも視界に納めなくとも感じる力だけでその差は歴然としたモノ。勝てるか？ と考えるだけで自分の思考に呆れてしまうほど、今でさえ相手は手を抜いて、遊び半分での追跡だと玲は理解の上で——逃げの一手の予定が、それがこのままではどう足掻いても不可能と判断した。

ならどうするか、一瞬の迷いさえも表に出さず玲は決断を下し、能力を発動した。

その目標は——

「僕は囿で……せめて永琳だけでも逃げれば……」

その言葉は幸い、擦られる木々のざわめきで永琳の耳には入らなかつた。

不意に背後の彼女の表情を覗いた時、自らが囿になると言う決心が揺らぎかけたのを何とか引きとめ、深呼吸を繰り返して、深く意識を集中させる。

(戦るしか、僕一人でも戦うんだ……)

沸騰する感情に何とか頭だけは冷静さを保とうと、当に限界を迎えている身体強化の魔術を自身に重複させ、力一杯振り絞った右腕を八つ当たり気味に行く手を阻む木々た

ちに叩きつけ道を開いて行く。

「ちよ、ちよつと！」

障害物の破壊、玲が移動の最適化に取ったと永琳に思われたその行動は、到底遁走を凶っている者の考えとは思えない行動だった。

それもそうであろう。今も道無き獣道を無理に走る事が、後に続く追っ手を皮肉にも助けることになっているのに、更にその行動が苦しくも防波堤の役割をはたしていた物を自ら破壊しているのだから。

それに幾ら魔術を掛け様とも、そもそも魔法使いとして未熟な玲が掛けた程度の魔法では効力、それこそ高が知れていた。

乱雑に振るった腕が木々の幹に打ち当て、灰色の袖を布越しに紅色に染め始めた頃、今まで黙っていた永琳が傷を気にした様子がない、未だに腕を振るい続ける彼のその異常な行動に悲鳴を上げたのだ。

永琳は繋がれた手を引き、それでも止まらない玲を無理矢理引き止めた。

「つ……貴方、可笑しいわよ。それに、こっちは都市とは」

足を止め、玲の恐慌とも思われる状態を何とか落ち着かせようと『逆方向』、そう言ううとした永琳の言葉を遮って玲は又も、乱暴に走り出してしまった。

それも、繋がれた永琳との手を離してまで。

「ま——待って！」

しわがれた永琳の懇願にも聞こえる悲鳴にも、玲はまったく反応を見せず、そのまま走り去ろうとするところで永琳は自失から気を取り直し、必死に前を走る玲を見逃さんと追い続ける。

△▲▼▽△▲▼▽

◇苗字なし 名前 玲

種族：本の虫 能力：間合いを計る程度の能力

体力：200／150 スタミナ：40／14

状態：遠隔集中——『一時的な周囲への視野の低下』

装備：灰色のパーカー

緑のハーフパンツ

英知の書

ステータス

妖力—150／150 霊力—0／0

魔力—56／30 神力—0／0

腕力—15 IQ—155

素早さ—22 運—12%

△▲▼▽△▲▼▽

△▲▼▽△▲▼▽

◇苗字 八意 名前 永琳

種族：人間 能力：あらゆる薬を作る程度の能力

体力：94／75 スタミナ：45／10

状態：不安定な精神—『意思の低下』

装備：永琳製のワンピース

八意製薬品

(弓) 霊弔

ステータス

妖力—0／0 霊力—340／120

魔力—0／0 神力—0／0

腕力—29 IQ—165

素早さ—63 運—65%

△▲▼▽△▲▼▽

——能力で言えば、確かに永琳がほぼ全てにおいて勝っているように見え、玲に追いつくのも容易い。そう考えるのも、そう思うのが普通であろう。

「……………」

しかしそれは能力だけでの話しであって、自身がそれを全部引き出せるのもまた、自分次第という事。

自身の力がどこまでであり、限界がどこまでなのか。それを知ってるか知らないかでは力の運用は大きく変わって来るであろうそれは、力の消費量にも関わってくることもあった……。

永琳は自前の俊足を活かし、何とか彼との距離は離れた状態で維持しているものの、それは一向に狭まる事無い隔たり、壁のように彼女の前へと立ちはだかっていた。

足の速さでは明らかに彼女が上、しかし何故か、二人の間合いは埋まることなく、逆に離されているのではと錯覚してしまいそうなほどに永琳は自分が追いつけないことに動揺し、啞然とした。

「何でッ追いつけないの!？」

まさかこのまま彼は自分が手の届かない何処かに行ってしまうのでは？ 決して自分がこの場に置いてかれているとは考えず、玲がまた何処かに行ってしまうのではないかと言う考えが頭を掠めた。

一度想うと想わずには……。という言葉があるように、ある種の不安から永琳は歩みは次第に力を失い、ペースを考えぬ走りからくる疲労は焦燥と変わり、走る時間と共に

彼女の足かせとなつてその体を蝕み始めた。

——勘違いしてもらつて困るが、今の彼女の走り、それは紛れもなく自身が出せる全力のモノだった。

……それならば、何故その手が届かないのか。

振られた腕が前への前進を図り、前のめりに縮められた全身が踏み締められた足に力が籠らせさらに前と体が進んだ。彼へと伸ばされた腕が姿を捉え——開かれた手が空を切つた。

追いつけない。

……永琳がその考えに至るまでにはそう時間は掛からなかつた。

彼を射る？

追いつけないのであれば……深層の奥にあつた暗い感情を持つ自分がそう囁いているように感じた。

この時、永琳の頭の中には背後にいる敵の存在などすっぽりと抜け落ちていた。  
(此の俣彼が何処かに行つてしまふなら……いつその事)

「……………」

無意識の内に腕は背に回され、その手の平には弓が握られていた。

「……………え……………りん……………と……………！」

スローに見えた視界で、番えた弓がゆっくりと玲へと向けられ華奢なその姿を次はしつかりと、視線の先に捉えた。

「永琳と、すストツプ！ ストーツプ!!」

「はえ——？」

過度の集中状態から浮上した意識に目を向けると玲が足を止め、こちらを向いているのに気づいた時には既に遅く。

「けげんぶ!!」

「きゃああああ!!」

全力疾走が急停止出来るはずもなく、衝突した二人はそのままぶつかつた勢いを殺すことが出来ずにもつれ合う様に、運悪く空いていた地面の穴の中へ落ちて行つた。



永琳と正面衝突して視界が暗転したと思つたら次に来た軽い浮遊感のあと、“目的地に着いた合図が僕の頭に響いた。”

「つゝつゝ」

文字通り、地面に頭をぶつけただけなのだが（僕にはお迎えの鐘のように聞こえた）。そもそもだ。僕が妖怪だと言つても体の出来で言つたらまだ人間の方が頑丈だ。ていうかこの子供体形（フォルム）に耐久性だとかそんなものを期待するほうが可笑しい

と思う。

今回は“予め張って置いた”魔術のおかげ助かったが……

「はあ……決心して損した気分」

僕の上をあの妖怪が通り過ぎて行くのを感じ、ため息混じりにそう呟いた。まあ別段に戦いたかった訳ではなかったのだからある意味、幸運ということなんだろうけど——何だか納得行かない気分だったのだ。

「は、そういうえば永琳は——っと、ん気絶してるだけかな」

「ん……」

ペチペチと顔を叩いて確かめると微かな吐息が漏れている事に一先ず安堵の息を吐いた。

あの凄まじい邪気に感じた妖気は間違ひなく大妖怪のモノと直感していたが、その予測が正しかったと洞窟内に張っていた陣が煌々と光ったことにより肝を冷やした。

探査境界というモノらしく、その術式範囲内に侵入して来た相手の力を計るものなのだけだ。これは少なくとも中級程度のモノでは淡く光るくらいなのにそれが思わず目が眩んでしまいそうなほど輝いたのだから、

「そーういや帰りどうしよう。飛ぶ？ いやいや、目立っても後が怖いと言うか二の舞は勘弁……はあ」

追っ手は相当の強者ということなんだろうと人事のようにやや現実逃避を試みた。けど衝撃が大きすぎたと言うか何とと言うか、何十年ぶりの命の脅威に心底疲れた。

湧き出る水で乾いた喉を潤しながらふと一息をついた。

そう、ここは僕が前まで住んでた洞窟。そして僕が敵を迎え撃とうとしたのはこれが近くにあつたから。

壁に刻まれた紋、擦り付けられた魔力の痕跡は最早この洞窟自体が一つの大きなアーティファクトの役割を果たしていた。もしここで僕が魔術を行使するならばそれだけで代償は最小限まで削られ、威力もそれ相応のモノとなっていたであろう。だから——「ここ」まで釣つて、戦ろうと思つてただけ……」

思わぬアクシデントと言うより永琳ならば、二手に別れるなり、一人で都市に行つてしまうのかと考えていたのだけだ。

「ふーん……ま、人それぞれだよねー……」

時が経てば人の価値観なんて変わるし、時代によつては殺人さえも黙認されるのだから。

彼女の乱れた綺麗な髪を整えていると断続的な鈍い鈍痛が骨の髄まで響いた。先までなかった痛みが安心しきつた今になってやってきた感じだ。

「あー右腕、どうしようかな……」

魔法を使えばどうにかはなる。とは思うんだけど、外傷が裂傷だけではなく内部まで至っていたこの場合では僕の魔法では治しようが……あるにはあるが到底僕の今のレベルではそれは扱えない。

「ふっふ、そうだよ。今思えば僕は妖怪じゃないか！ 人間の時ならいざ知れず、妖怪の僕ならば包帯でもこの際何でも巻いとときゃこの程度の怪我なんてどうとでもなる——はず」

とは言ったものの。

「布ないじゃん」

早速問題発生。

布の確保であれば服を破ればいいのだろうかそんな事をしてまで傷を包んで何の意味があるのかと。

骨折であれば添え木でもしとけばいいだろうし、言い出したのは自分だけど処置をせずにほっとくのも体に悪そう、確実に悪い。長考の末、一先ず傷を洗ってから表面だけ傷を癒すことにした。

下位魔法を使うこと自体には然程手間は掛からない。力のある言葉、自身の想像を固め易い。大体のモノはこの呪文を使うことで発動することが出来る。

「傷の対象は肌の裂傷、傷ついた事変を癒すことで確立させよ」

本には魔法の一番の大切な部分は発動者の想像（イメージ）と書いてあった。つまりはその先の予測がしっかりと出来ていれば呪文も必要ではなく、確固たる自信があればより成功に近づき、集中できていない場合には発動しないことも稀ではない。

つまりは。

所詮呪文や魔方陣は術者の補助の役割でしかなく。アーティファクトも魔力の増幅品、装備品でしかなくて——面倒な説明は兎に角。

「大事なのは自分……つと——成功、かな」

肌はすっかり治り、流れていた血は止まっていたが試しに力を込めた手から筋肉繊維、腕の内部から伝わった痛みが完治はしていないと僕に知らせていた。……暫くは右手を使うのは自重しよう。

「……………」

あとは帰るだけ。そう思ったのだけれど永琳はただ今絶賛気絶中であり、どう考えてもこの狭い入り口では洞窟から抜け出すには一筋縄で行くとは考え難く。

「はあ……。……ん？」

難題とも言える脱出の手を考えていた時の僕は、まだ淡く光る魔方陣に気づきはしたものの、周囲からは妖怪の気配はなく、その時は何かの誤差だろうと考え、その違和感を気づけずにいた。

◆ トン——トン——とんつと。

「……ん——」

「んん？ 起しちやつたかな」

ゆらゆらと揺らぐ視界で最初に動く地面が見えた。その次に

「固まってどうしたの？ あれ、何だかいやな予感が——」

「どこ触ってるのよ！」

「理不尽っ!？」

玲から冷静に話を聞けば私は気絶している間おぶさつて移動していたと説明してくれた。私は素直にそれを信じ、そうなのだと理解した。

「素直に、つて分かつてくれたら謝つたりの一つや礼の一つでも言つたらどうなのさ」

腫らした頬を撫でながら、私を睨む玲の姿は怒っている、というよりはどちらかと言うといじけているように見えた。

その姿に思わず緩みそうな表情を何とか引き締め、出来るだけ無然とした顔に見えるように取り繕う。

「ふん。そんなの自業自得じゃない。貴方が一人で走り出さなきゃ、そもそもこんな事にはならなかったじゃない」

「いや、だからそれには深い訳があつてだね君……」

「だったら説明して見なさい」

そう説明を要求すると彼は悔しそうに「うぐぐ」と一通り呻いてすぐ諦めたようにこ  
うべを垂れた。

「――」

一人で走り出したあの行動には確かに怒つてはいるが、実際はそこまでその事に怒つ  
てる訳ではない。私はただ、今のような『何かを隠している』、彼のその様子が気に食わ  
ないのだ。

——どんな親しい間柄でも、人には言えないことなどいくらでもあるくらい知ってい  
る。

理解してもいるし、分かっているつもりだった。

今までは。

「永琳……まだ怒ってる？」

そして今日、わかつたことがあつた。私は彼の事になると妥協が出来ないんだと。

「ふう……別に、もう怒つてないからそんなうじうじしないで頂戴……」

「うじうじつて……ぼーつとしてたから心配してあげたのに、何だよその言い草」

ぶすつと私から顔を背けても、繋いだ手を離さないのは見えない彼の優しさなんだと

この時はふとそう思った。

不意に見上げた空はすっかり紅く染まり、遠くに見えた都市が紅く輝いていた。

「……ごめんなさい」

こんな私で。

「ん？ 何か言った？」

「——何でもないわ。さあ、早く帰ってご飯にしましょ？」

「え、え……帰ったら本読んでいいってさっき言ったじゃないか？」

「はいはい、ご飯を食べてからね」

「僕、別にご飯食べなくてもいいんですけど」

はいはい。

そう何時もの様に笑って、彼に勘付かれずに対応できた。

その後の数日間、落とした筈の薬草を回収してくれていたおかげで無事薬は作る事が出来た。

私が作業している間、彼はずっと本を読んでいたものだから、よく飽きないわねと愚痴ったりもして、幾分かは大人しい日々を過ごしていた。月の移住計画が立案されたその日までは。

## 第8書 告白

「魔力操作の基本は使用者の集中力とされているけど……一般的ではないが一部では秘術とされる術は特殊ながら複雑な形を持ったために——身体的な、術式によっては根本的な、術者の体質的な適合性……相性と性質があるからそれによっては使い分けする事を進めると……ふむふむ」

つまりは術者によってはその個体差で威力も、その効力も違ってくる時があるのか。魔術の手解きをする場合、下手な自分の先入観を与えると相手にも悪影響になることもあるのかも知れない。

「それが大魔法となると……より、リスクが高まる、と……。ふうー……」

まだ、大魔法だの秘術などとそのレベルに達していないとは言え。やはり予防線としてこのような予習をするのも悪くはない。

知識を埋めた充足感に浸っていると布が擦り合う音とベットの軋む音が耳に入ってきた。

「朝が早い……と言うよりはまた寝ていないのね。休息を取ることは時には必要なのよ

「？」

僕が夜通し起きていた事にそんな呆れた感想を漏らした。

「ふふ。それだったら休息が僕からしたら読書だったってことだね」

実はこれは僕の密かな自慢でもあったのだが、彼女は特に驚いた様子もなく、諦めたようにため息を吐いた。

「それもそうね。おはよう玲」

「うん……おはよう、永琳」

ところ変わって居間に移った僕たち。

面倒ながらも、もはや日課となってしまうた自分が作った朝食をもそもそと食べている中、一向に箸ならぬフォークが進んでない永琳が浮かぬ顔をしていた事に気がついた。

「？ どうしたの。あ、やっぱり僕の料理じゃ口に合わないかな……」

味が心配で自分でそう言ったが決してマンガや小説でよくあるような作ったものか、すべてダークマターとか、この世のものではない、食べられない物に変換されるからという理由ではなく。

それはお前の料理は薄っぺらい味がする、と両親のモノとは思えぬ言葉、指摘を母親

から受けていた為の懸念であつた。

「いえ、そういう訳じゃなくて……」

「なくて……？」

内心ほつとしながら、見るとフォークをからんと音を立てて置いてやがて彼女はふと息を漏らすと口を開いた。

「——何でもないわ。あらもうこんな時間、さ！ 早く片付けちゃいましょう」

「う、うん。そつか……遅刻しても大変だもんね」

食べ物をお口にかきこむ彼女を苦笑いで見つめながら、「行って来ます」と出てつた彼女の背中についてらつしやい、と声と手を振つた。

「……………」

彼女が居なくなつてから静かになつた居間で少しぼーつとしていると冷め始めた料理に気づき。

「……………はあ……………」

僕はかちやかちやと音を立てながら残り物に手をつけ始めた。

この家に住み始めてから既にうん十年くらい。僕の時間間隔は曖昧で詳しくは知らないけどこの前だけにそんなお祝い事を永琳とした覚えがある。

その時は僕がケーキを作ろうとしたり、この都市にはケーキなるものがなかった事に驚いたが何より材料が足りない部分が所々ありその試行錯誤の末、結局出来たのはスコーンなのだからあの時は一人で大笑いしたものだといふまでも時々思い出してはくすつとしたりする。

他には永琳が薬の実験を一緒にやったり、新薬の実験台には僕がなったり彼女がなったりと馬鹿な事も沢山やってきたが、この数十年は僕が人間として生きていた中でも特に濃厚な日々で、暇な日など、それこそ殆どなかった。

だけどそれから数年か数十年か、とたんに彼女が家に居る事が少なくなつた。

その為に僕の一人の時間、つまりは読書時間が増え、この数年間は特筆する事は一つもない日常を送っていた。

思い浮かべた思い出と一緒に僕はぼたんと読んでいた本を内容と一緒に閉じた。

今居るのは永琳の寝室。窓から差し掛かる光が薄暗い部屋を照らし、黒と白の明暗が別れている室内を僕は沈鬱な気分で眺めていた。

「ふう……」

最近、こんなため息をつく事が増えたような気がする。

好きな読書をしていても、それでも最近では何だか気分が晴れない……何時もは無心になれる筈の時間が異様なほど気持ち悪かった。

体を感じる気だるささに身を任せ、ごろんとひんやりとした床に体を脱力させた。

今は起き上がる事さえ億劫だ。

「こんな事今までなかったのになあ……」

現在、季節で言ったら夏くらい。五月病とか夏バテではないと思うのだけれど現状何もする気が起きない。

本を手取る事さえ気だるい腕を動かすのも今では面倒だった。

「……………」

もんもんとする頭の中で、絶え間なく浮かんでは消える考え。僕は本の背表紙を撫でながら、そつと目を閉じて視界と一緒に思考を自分から切り離れた。

「……………永琳……………」

自分でも微かに聞こえたその眩きに、我ながらイラつきを覚えたのは何でだったんだろうか。

◆ そんな事を考える暇などなく、その日僕は数日ぶりの遅い眠りについた。

「ただいま……………」

今日も一段と疲れた……。この数年には珍しく早めの帰宅を果たした彼女はそう思いつつも口には出さずにガラガラと自宅の門をくぐった。……しばらく玄関で立ち尽

くして永琳だったが、待っていた迎えは一向に来る気配はない。

「……まだ寝ているのかしら」

少し残念そうな表情にそう言うの一つ、大きなため息を吐いて靴を脱いだ。玄関から繋がっている木製の通路を歩くと目的の場所、彼女の自室に着いたのだが手を掛けたドアノブをそのまま捻るかと思いきや、握られた手をぱつと離れた。

「……………」

引き締められた表情で自らの手を見る姿は、温まった室温とドアノブの冷たさの差異に驚いた訳ではなく、何かに恐怖したそれであった。

「……………(ごくり)」

平和そのモノだった筈の室内の空気は一変し、彼女の周囲だけ不思議とぴりぴりとした緊張感に包まれた。永琳は依然として強張った顔のまま、再びドアノブを握って力を加えようとした瞬間。

「——っ」

「ふあ………んん？ ああーえいりん………今日は早いね、ふわあ………ねむ」

彼女が引くよりも早く押されたドアの先には寝ぼけ眼を擦りながらふらふらと立つ玲がいた。

先まで立ち込めていた緊張はドアが開かれた事に霧散され、残された彼女は暫くきよ

とんつと玲を凝視するとすぐに疲れたように溜めていた息を吐き出した。

「はあ……」

「？」

「何でもないわよ。それよりもほら、起きたばっかりなら早く顔洗うついでにお風呂でも入ってきなさい」

「ん」

何時もはそのような子ども扱いする言動に食って掛かる玲であつたがまだ寝ぼけたままようで、特に何も言うまでもなく玲は短く返事を返すと、本を持って——引き摺りながら脱衣所を指指して歩いて行き、何事もなく曲がり角の影へ消えて行つた。

永琳はそれを見送ると、開かれた自室に入り、手荷物をテーブルへと置いた。

「……私は何を緊張してるのかしら……」

毎日とは言わないがそれこそお互いを知らないという訳ではない相手。それが好きな相手であれば、少なくとも緊張をするのは当たり前前のモノと思えた。

しかし既に自分が彼に叶わぬ好意を抱いている事など永琳は分かっている。だからこそ理由は別にあり、それはこの数十年間、自分たちの成長の違いで十分分かつてのことだった。

「——唯の緊張とは違う……」



れているような気がして……気に入らない。

やはり僕は少しばかり苛ついていたのだろうか、それを思うのと少しでも永琳にそれを気取られないようにもそもそと食事を再開させた。

「あらあら、ほんとうに拗ねちゃったかしら?」

「拗ねてないっ!」

「ねえ玲?」

「なに!」

やつと僕の食事（強制）が後一口で終わろうとした時、僕より食が太い（早いでもいいが）永琳が僕より早く食事を片付けてお茶を飲み終わり、一息ついたところで声を掛けて来た彼女に僕が嘸み付いた。

「……どうしたのよそんな大声出して」

「自分の胸に手を当てる聞いてみたら?」

先も言ったように、彼女は僕より食べるのが早い。と言う事は必然的に食に勤しむ僕、それを見守る——というより毎回のように永琳が食事が遅い僕を暇つぶしに茶化す構図ができるのだ。

それが今日は何時よりもよりしつこかった。彼女は存外粘着質な性格なのかと、今回ばかり

りは温厚な僕でも切れかけた。

「ストレスでも溜まつてるの?」

「……柔らかいわ」

「……今僕が聞いているのは別に物理的な胸の柔らかさじゃないからね! それと平然と言ったけど永琳は羞恥心っていうモノがないのかい?」

「そう言うつもりはないのだけれど……何を焦つてるのよ?」

そりゃ目の前で急に胸を揉まれたら男性でしたら焦るかそれこそ何かとリアクションの一つは取ると思うんですけど? この数十年間で成長して本人は自覚症状がないようだけれど永琳は成長した。それもほぼ僕の予想通りに。

居候としてそれは喜ぶべきなのかそれに比べてまったく成長しない自分に凹むかは別にして、彼女は残念な事に体は成長してもあまりに常識が足りないと思わせる箇所がいくつもあつた。

それが今の行動(これ)である。

彼女の話を聞く限り(それと能力を使用して心の間合いを計った限り)ではやはりこの都市にはそれほど永琳と親密な関係を築いてる者は少なく、話すとしても事務的な会話くらいで同年代の人間と会話する事など滅多になさそうだ。

身近な、それも同年代との接触は大事だ。それこそ年中ぼっちだった僕が言うのだから

ら間違いない。

突然な話にはついていけないし、同年代に問わずテレビの話題についていけないかったりして微かに覚えていた知識を使って知ったかぶりでも何度も凄いではばれないかと冷や汗をかいていたりしていた。

それが幼い時から、人間同士の会話の繋がりというが全くない事が続いているのならば、永琳がこの様な常識が欠如している状態なのも頷ける。

他人を超越したとも言える頭脳に研究に掛ける熱意。それに比べて欠如と言うよりは欠落している常識。

普通であれば相応の知識、常識が釣り合つて自我が出来ているはずなのに……言つてしまえば不自然なのだ。

前までは「だからそんなファツションセンスがないのか」と位にしか考えなかったが今のような行き過ぎた相手への不配慮——僕はそれほど気にしないが外でそれが果たして通じているのか？ 要するに僕は……、

「ああーもういいよ！ で、結局何なのさ？」

「あ、ええつと。明日仕事を休もうと思うのよ」

「へーそれで？」

浮かびかけた考えを振り払うよう、フオークでグサつと刺した残りの一口を口に入れ

た。

「それで……なんだけれど」

何だかとても言い難そうにしているが今回ばかりは僕は何も言わないし今の不機嫌な態度を直すつもりはない。

別に怒つてるとかそんなんじゃない。兎も角、僕は口に入れたままのフォークを噛みながら辛抱強く彼女の言葉を待った。

「一緒に外へ行かない？」

「痛っ！！」

永琳の口から出た言葉に驚いて思いつきり噛んだフォークが跳ね上がって鼻先にぶち当たった。ツーンとした痛み耐え切れずに床に転げ回る。

「何をしてるのよ……」

「いや、何言ってるの!? せつかくの休みだったら家でゆっくり休んだほうがいいに決まってるよ! それに外は危険じゃ——」

すぐさまに起き上がって反論を繰り広げようと口を開いたが。

「その為の貴方よ。それに今回は近場だし、何よりこれはもう決定事項! 明日は外出だからそのつもりで用意しておきなさい」

「あつ、ちよつと永琳!」

勝手な言い分、それだけ言う食器を持って居間から出て行つてしまった。

「ぐぬぬ……毎回勝手な事言つて……！　もう、ムカつくなあ」

あの事件。外で襲われた時からお互いの安全と言う事で極力外に出ないよう、彼女と約束して。それと永琳に出禁を食らっていた身としては彼女のその言い分が凄まじく勝つてなモノで、律儀にそれを守つてた身としては高が偶の休暇という身勝手な理由で破られていい道理ではないと思うのだ。

「あーもうー！」

荒れる思考を自分で嗜めても、それでも治まらないむかむかとした気分には今日は不貞寝しよう、そう僕は決めたのだった。

「それで、結局何処へ行くんだ」

翌日、朝食が用意された席に挨拶も返さずに座つて無言で食べ終えた後、僕は開口一番にそう言つた。

「無理言つてわ、悪かつたつて思つてるわ。けど……いえ、だから、ね？　昨日の事は水に流して機嫌を治してくれないかしら……？」

食事を先に済ませた永琳は僕が食べ終わるまで慌しくそう言つて来た様、そう機嫌を窺う永琳だが。

僕は別に昨日の事を引き摺ってもまだ機嫌が悪いとか言うわけではない。確かに気分が悪いのは確かだがそれほど根に持つ事でもないし、それに一緒に生活をしていればこんな外出などと言う突拍子もない事態などと比べる事態なんてざらだ。

それ思うと辟易する僕の心情は兎に角、僕が機嫌が悪いのはそう言った事ではなく別の事なのだ。

それは暗に永琳が話を逸らして行き先を言わないこの態度であった。

——気に食わない。

「うっ………そ、そんなに睨まなくとも……」

「………ふんー」

言わないならそれでいい。それなら僕はそれに見合った相応の態度で示すだけだ。

「あ………」

僕は立ち上がって食器も片付けずに、皮肉にも昨日とは逆に黙ってスタスタと居間を出て行った。



私は何をしているのだろう……。後悔にも似たつぶやきが平屋の一室に響いた。伏せた顔はテーブル越しからでは探れないほど、こうべを深く垂れ、背には言い表せないほどの負の感情が漂っている。

「私は何時も何時も……っ」

大事な時になんでこうも——下手なんだ。

その眩かれた悲哀の言葉を誰に聞かれる事なく、壁に吸い込まれて消えていった。

昔からそうだった。言いたい事をハッキリ言えない。昔も今も業務であれば滞りなく出来る事が私情となると途端に駄目になってしまふ自分が嫌いだった。

そのせいで家に居られる事が少なくなった。彼と一緒に居られる時間が減つてしまつた事を何度後悔したか。

彼と出会う前、それは親と子の関係が仕事だけの関係になつてことも、家庭での会話もが全部、義務的な、業務だけの話題で埋まるのはそうそう時間がかかる事ではなかった。

それに段々と慣れ始めた自分が、感情が死んでいく感覚。それが嫌で、何より怖かつた。ある日勇気を出してついた自分の役職を理由に家を飛び出したのは彼女の一世一代の決心だった。

今回の外出も、元はといえば自分のせいなのだから——上層部の老いぼれ共に一言いってやればどれだけいいか……。

それが出来たら——

勇気が出せない自分が悔しい。

制御し切れない感情に頭の中を掻き乱されて。

何より離れていく現実が悲しかった。

溢れた情緒が重力に逆らえ切れずに。

「……………うあ……………」

抑えようとも抑えられない涙が瞑った瞼から漏れ出し、耐え切れずにととう永琳は両手で顔を覆った。

「……………はあ……………」

「なっ、れ、玲!?!」

動揺のあまりに玲が近くまで戻って来た事に気づけなかった。自分が涙を流している事も忘れ、反射的に顔を上げようとした時、かぶらせられた何かに視界が遮断された。永琳は呆然としながらもその正体をつぶやいた。

「ぼ、帽子……………」

「出掛けるんでしょ? 何をそんな驚いてるのか知らないけど、今日は外も暑いし、出るんだったらそれくらい用の意は普通でしょ」

「で、でも……………」

「自らが言い掛けた言葉に詰まってそのあとの語尾が続かなかった。乗せられた帽子の端で濡れた目元を見せないよう玲の様子を見ると、無言で永琳の言うことを待ってい

るようだった。

「……私が、行き先を言わないせいで玲が怒って……それで今日はもう駄目なんだって……だから……」

「はあく……」

必死に絞り出した言葉は最後には掠れ消え、気まずい雰囲気の流れ始めた頃。玲の大きなため息に叱られた子供のよう、びくつと体を浮かせた。

「あのさあ……」

「はいっ」

感じた怒気に驚き、咄嗟に出た返事に永琳のかつと顔が赤くなつた。

それは恥ずかしさからか、それとも気まずさ故にか、居ずまい正すほどであり、玲は別に気にした様子でもなく口を開いた。

「『気にしてないから』」

「……えっ？」

「永琳が何をそんなに落ち込んでるのか僕は知らないし行き先を言わないのもそれには何かしら理由があるんだと思うし理解してあげるよ。気に食わないけど、まあそれは今はいいとして。」

あ……それを踏まえて、つまりは僕が言いたいのね……えっと」

滑らかに動いて舌は言葉が続くことにその勢いを失い。最後には困ったように視線を彷徨わせ、ない場所で言葉を探しているようだった。

「僕はね、永琳」

「？」

「——僕は信じてる。君を。だからあえて理由も聞かないし、隠したいなら言わなくてもいい——でもあまり蔑ろにされると、やつぱりちよつと不機嫌になっちゃうかもしれないけど」

そう苦笑いを浮かべて言う彼の姿が永琳には眩しい物に見えた。

現実を受け入れながらも、自分の心を曲げずに相手を思い遣る気持ちだが、優しさではなく自分と比べた時の劣等感が痛みとなって身に突き刺さった。

届かない。

「永琳？」

「……生意気」

「ちよ、ちよ永琳!?! どうし」

「いいからジツとして、今はちよつとこうしていたい気分なの。……貴方的に言うなら、蔑ろにしていたご褒美ってどこかな？」

「ご褒美って……」

ため息混じりにそう言う。玲は諦めた様に黙って抱擁を受け取った。少しの間重なり合っていた二人は、その後居間を出て行った。

「それで、僕は着いていけばいいだけかな？」

「ええ、後に着いて来て」

隣から聞こえた。と言うのも玲に対して永琳が返事をしただけなのだが、驚くことに音源の主である玲の姿は彼女の視界に映っておらず、あろうことか体そのまま消え去っていた。

「ふっふっふ、すごいでしょ？」

玲の自慢げなその声が、姿が見えなくともどんな表情をしているのかは永琳には容易に想像できた。

「ええすごいわね。全く……そう言うところが子供っぽいつて言うのよ……」

「ふふ、この透過の魔術は習得には結構時間掛かったけど中々便利だね。だけど欠点があつて激しい動きについて行けないことなんだよね。これには色々理由があるんだけど説明するには根本的な魔術の構成が身体に付属する物として扱うからであつてね

——」  
確かに玲の嬉々とした説明を聞く限り、姿は完璧に消えていたおかげもあつて無事都

市にから出る事が出来たのだが。

はあ……姿は消えても声は周りに丸聞こえなのだけれど。その彼女の眩きの通り。

彼女の後ろから聞こえる幼い声にすれ違う人間が奇異な目で彼女たちを見たのは言うまでもないだろう。



「……着いたわ」

「だから核となるのは術式ではなくてこの魔術で最も重要なものは——ってあれ？ 着いたの？」

「貴方の魔法だか魔術っていう話、聞いてる私は全く着いてけてないし。自慢ではないけれど学問では理解できなかったのはその説明くらいなものよ」

「そりやそうだよ、だって初心者に要点だけ掻い摘んで話して理解できるはずないだろう？」

手を上げてそう言ったら永琳は何だか肩を落としてため息を吐いていた。

「もういいわよ……それよりもうその変な術とか消していいわよ」

少々自棄に聞こえる言葉で言われた通り、僕は魔術を解いた。

「……」今になって周囲に景色に目を向けた僕だが、飛び込んできたその光景に言葉を失った。

小高い丘の上。その僕が立つ場所から見えたのは始めは森の緑に遠くには連なる山々、それからぼかんと空いたサークル状に模られた都市がどかっと居座っていた。白く光沢さえ持つ都市の中央付近の建築物は太陽の反射により宝石のように輝きを帯、逆にビルを囲む建物は落ち着いた色合いに統一され、感じた懐かしさに思考が止まった。

「ハハハ」

呟かれた言葉にふと気がついて見た彼女の横顔は鋭く、凛々しいものとなっていた。「外で唯一私たちが住んでいる都市が一望できる場所。そして――

私が生まれた場所なの」

「……ハハハ」

「勿論この地つて意味だけど。ほら、通って来た道の端にあつた人が住んでた名残があつたでしょ？ 元はあれが私が住んでた村、もうただ見ても判断がつけ難いと思うけど」

一度振り向いて眺めるも、僕には自然と同化してか、元は建築物の木材か、それとも自然の物なのかは確かに判断がつかなかった。

言われた言葉、ここが永琳が元は住んでた村つて話の真相は僕にはわからない。けど淡々と話すその様子は、何かを覆い隠して口に出しているのだとなぜか僕は感じた。

本当に、これが永琳が僕に見せたかつた物だろうか？

「あれ」

考え込んでいた僕に投げかけられた声に反応し、彼女の指し示す先を見た。

「——っ」

光の反射で視界が遮られ、見られなかったその全貌が太陽が傾くことで僕の目にしつかりと映された。

「ミサイル、ロケット？ あ、いや……まさか、宇宙船……？」

鉄骨に支えられて天へ向けられた建造物。ビルに紛れて中央に突き出たように建てられたのは紛れもなく空へと昇るために作られたソレだった。

「あれが一目でなんだかわかるのね。なら話が早いわ」

彼女の言葉遣いは柔らかかった。それでも、顔は感情が抜け落ちたような、能面なままだった。

衝撃を受けた僕を待つことなく、続く言葉が突き刺さった。

「私と、宇宙に行ってくれない？」

## 第9書 豆腐だから仕方ない

「そっか……。

……少し、考える時間貰ってもいいかな」

「そう、よね……」生に関わる事だもんね」

宇宙（そら）に行くと言う告白に玲は少なからずの動揺、着いて来てほしいと言う願いに戸惑いを覚えた。

僕が行ってどうする？ 素朴な疑問が首を絞めるように思わず息が詰まりそうになつた。

今の生活は、彼にとって満足か否か。答えは簡単、否だつた。

外に自由に出れない。幾ら本が好きだとしても彼にも限度と言うものがある。下手すと一生、それでなくとも長い時間閉鎖された空間で過ごすことは彼にも容易に想像出来た。

もしも月に行くとして、果たしてそれは今の不満を解消するに足りるのだろうか？

——そもそも、僕の不満って？

気づけば、期限の先延ばしの口上を述べていた事に玲は言った瞬間後悔した。

隣に居た永琳の顔が今にも泣きそうなほど歪み、すぐに取り繕った笑みを浮かべた事に胸を打つ様な痛みを感じ、言葉に詰まった。

「え……ッ」

慰める。と言うにはこの場合は少し違うと感じて考え直した。ならなんと声をかければいいのか、思い浮かばず心の中で地団駄を踏みたい気分だった。

長く生きていると言っても、人生経験で言えばそれほど苦労した記憶がない。人と関わらない生活をして来た彼では咄嗟に出る気まぎれな、この重くなりつつある空気を紛らわす台詞が言える筈もなく、飲み込んだ呼吸を最後に。それ以降、逃げと知りながらも落ち始めた夕焼けで燃える都市視界を固定させたのだった。

「……………」

その後、会話がなくなった二人の間には重い空気と、太陽が沈み切った夕闇の風景の如く沈鬱した気分と共に訪れた冷えた夜風急かされて帰宅を余儀なくされた。

『…………』

暗くなった道を歩く間でお互いに言葉を掛けないのは話題がないという訳ではなく、永琳は玲の思案を邪魔させないがための気遣いからあえて口を慎んでいたからだだった。

それが社交的な場であれば、気心知れた中でも優とされる判断だったかもしれないが

この場合、それは悪循環でしかなく、玲は永琳の沈黙を悪い意味で受け取っていた。

それ故に、玲も永琳に做って話に触れず、ただ黙々と沈黙を守っていた。

重苦しい空気の中、玲は帰路を辿る途中で見た都市は、昼間に見た輝いていた筈の都市の記憶は急速に色褪せ、都市の夜景は邪悪な、嫌悪感とも似た想いを彷彿させ、ぎこちない動きで目を逸らした。

嗅ぎ慣れた匂いを感じて彼は重くもないドアをゆつくりと引き開けた。壁どころか空気に染み付いた薬品の香りにもう見慣れてしまったビンや管が並べられてるテーブルにちらりと目を向けて、彼はふとため息を吐いた。

昨日今日と睡眠を取って日中行動したと言っても疲労が溜まるものではなかったのだが、玲は導かれるようにベットへと倒れ込んだ。体に取り付いた重圧も、ベットの上では脱力させて無駄に力が入っていた全身から力を抜いて行くと、重く押し掛かってくる脛に耐えながら彼は先までの出来事に思い浮かべた。

主な疲労の理由、それは彼へ対する永琳の度を越えた気遣いから来るものだった。

『今日は私が料理をするから玲は居間でゆつくりしてて頂戴』

厳密に、料理当番のルールなんて事を決めている訳ではないだから、特に反論などはなかった玲だったが、せめて料理が何らかの気紛れなればと思つてその時は口出しをし

なかった。少なからずの違和感を感じていながらも。

そしてそれはすぐ、確信に変わった。

『美味しいかしら?』

『足りなかつたら何時でも言つて頂戴ね?』

『食器、ついでに下げちやうわね』

『お茶どうぞ。それと余つてた奴のお菓子、食べるよね?』

「あ、ああうん」

彼がアクションを起す毎に、永琳の気遣いの声が掛けられた。

彼女は食事をしながらも、視線は一挙一動見逃さないと玲を見据えていた。

既に予感が確信に変わっていた彼は、次第にぎこちなくなりながらも他愛もない返答をし、何とか流していた。その中で聞いた話では宇宙に行くのは一ヶ月後。

彼女の心遣いが、残された30日後へ対する不安を紛らわす事から来るものなのかも知れない、と。この時ばかりは半分以上ハッキリしない自分が悪いと首を下に折つたが。

「それでも……いくらなんでも風呂にまで入つて来るなんて度が過ぎてるよ……」

「どうやら行き過ぎた気遣いは、彼女に暴走とも思われる行動を取らせてしまったらしい。」

シャワーの途中に乱入して来た思わぬ侵入者に、逆とはいえ甲高い悲鳴を上げたのは、彼のことを思うと致し方ないことであろう。バスタオルを巻いているとは言え、抱いた腕に力が籠りすぎて押し上げられた胸元に、惜しげもなく出された四肢から連なる健康的な鎖骨から漂う色香は些か、湯の蒸気と相まって危険すぎるレベルまで高まっていた。

そこから目も開かずに脱兎の如く逃げた彼を褒めるとは言わぬが責められる言われはどこにもないだろう。

そして現在、逃げるように部屋で縮こまって居る訳なのだが、実に失念していた事に、ここは彼女の部屋でもあるのだ。ある意味当然の来訪だった。パツと点いた明かりに彼は臉を薄く延ばした。

「……………れい」

控えめな声に彼は転がって視線を合わせることで反応を見せた。

彼の振る舞いから表情を見る限り、不機嫌だと永琳は鋭敏に感じ取った。

「ごめんなさい……………」

「……………まったくだよ。ほんと、いきなり入って来るなんて……………びっくりしたんだからね……………」

これだけの会話を聞いてしまうと、どちらが男なのかと思ってしまうが彼は間違いな

く男性である。

「いきなりいきなりじゃなくても駄目だからね」……あ、当たり前じゃない。それに別にそんなこと言おうとしてないのだけけれど」

「独り言ですから、それで？　いきなり……何かな？」

玲は人の悪い笑みで芝居掛かった様子で首を傾げた。永琳に残された選択は、浮かばない考えに視線を宙に彷徨わせてこれ以上彼の怒りに油を注がない事だけだった。

「……まあ、過ぎた事なんだからもういいんだけど」

永琳の様子を見て、これ以上の言及は必要ないと考えて玲は終了の合図を出した。口調は柔らかいものだったのだが若干、やはり投げやりな感じだと永琳は感じ取った。

自分でもやり過ぎた行動に罪悪感がまだ残っていたが、気を取り直して、神妙な顔立ちで逸らしていた視線を彼に合わせ、玲は何だかわからない展開に目を数回瞬かせた。

「今日は、一緒に眠ら、ない？　ほら、明日からまた仕事で……当分帰ってこれなさそうだから……」

一生懸命、彼女なりの精一杯の勇気を出して言ったのだろう。

「うん、別にいいけど？」

彼は特に疑問も懐いた様子もなく、彼女が妙に緊張している事にも気づかず、即決に頷いた。まさか通ると思わなかったのか、永琳は呆然と彼を見つめた後、

「じゃ、じゃあ早速寝ましようか！」

「何だか気合が入ってるみたいだけどちよつと待つてよ。僕にも用意つてものがあるんだから」

彼の思わぬ積極的な言葉に彼女は戸惑いを浮かべながらも嬉しさからか、照れ笑いが隠せずじやにやとした笑みがパツと見だけで彼からも窺えた。玲は「？」と思いがながらもベットから飛び降りた（残念な事に身長的には飛び降りたが正確だった為）。

「そ、そうよね……い、色々……よ、ういが……う！」

しかしベットから降りた後、彼は何故か床に布団を敷き始めた。丁寧に毛布を被せて枕を膨らませて満足げに頷き、固まっている永琳に顔を向けた。

「昨日も寝たはずなのに何だか妙に眠たくてね。どうせ明日も家出るの早いんでしょ？　ならさっさと寝ちやおうよ」

光源の光度を極力下げた後、彼は一人——自分で敷いた布団に潜ったのだが、未だ動かずにいる彼女を疑問顔で見上げた。

「……どうしたの？」

幸か不幸か、形相が浮かんでいるであろう彼女の表情は弱まった光の明暗で玲には見えなかった。体が小刻みに震えているのは怒りからか、はたまた違う何かからか。

彼には全くわからなかった訳であるが、暫しの沈黙の後、怒りの鉄槌が振り落とされ

た。

「はえ？——イタツ！ な、なに!? いきなりどうしたの!？」

「うるさいうるさいー! また知つててからかかつてたんでしょ!? ええ騙されましたとも! どう? 満足!？」

この状況、理不尽と言えばそうでもあるのだが彼の言動がそもそもの原因なのだ。彼には全くわかつていないだろうが。

半狂乱に、我武者羅に振られた手足を玲は布団に潜りながら凌いでいた。

「ちよ、何言つてるかわからな」

「もういいー!」

はあはあと息を切らして煮え切らない面持ちのまま、止めとばかりに彼を踏んづけて跨ぐ様にベツトに横になると乱暴に布を被つて沈黙した。

「えーりん……?」

情けない事に玲が布団から顔を出してそう呼びかけたのは、彼女が静かな寝息を立て始めた頃だった。当然、返事なんて返つて来るはずもない。

混乱から頻りに視界を移動させていると、彼女の寝顔が見えた。しかし注目するべき所はそこではなく、目から流れた涙が道となった跡を見つけ、訳が分からずとも彼は痛まれない気持ちになった。

考えに思い悩んでもそれでも出てこない答えに、玲は数時間のあいだ永琳の怒りように頭を悩ませ、理由が分からずに途方に暮れたのだった。

◆ ガラガラ……タン。

広い通路を反響して寝室まで届いたドアの閉鎖音で僕は目覚めた。今日は湿度でも高いのか、重苦しい空気です上半身だけで起き上がると重圧が肩に乗りかかったように、どうも息苦しさを感じた。

「……結局、少しも寝れなかったな……」

それは快眠出来ない不快感から来るものなのか。それとも、恵みの光を塞ぐ曇天が僕の心と一緒に気分まで塞ぎこませているのか。よく、分からなかった。

気分は悪かったが二度寝する気分でもない。そもそも、僕には睡眠が必要ないのだから睡眠を取る、と言うのは可笑しいのだが、今はそんな事はどうでもいい。

首を下に向け、見てみると、やはりと言うべきか。半分……とまでは行かないが些か魔力が不足気味だった。体の不調も主にこれが原因だろうか？

「だる……」

昨日は少しハシヤギ過ぎたかもしれない、と多用した透過の術に反省を懐きつつ、一先ず居間へ向かおうと部屋を出た。

居間に着くとやはりと言うべきか、既に永琳は出て行った後だったらしい。その証として布が被せられた朝食がテーブルの上に置かれていた。

……と言う事はさっきの音は丁度出て行った時の音か、と独り言に呟いてとりあえずは用意されたご飯に手を付け始めた。

どうせなら起してくれればいいのに、と思ったりもしたが昨夜の様子では無理もないかと内心辟易した。

しかし前の日の事を引きずるほど、彼女が小心者ではないと思ってる僕としてはなんだかなあ、と遣る瀬無さを隠せずにした。

そうすると、やはり理由はあの告白だろうとアタリを付けて見たりもしたが、真偽に關しては怪しいところだ。だけど他に何かあったか？ と考えるとやっぱりそれしかない浮かばないのだからおおむね当たりなのかもしれん。

「うむくよく分からんなあ……」

安定しない思考、この感じだと寝ボケがまだ残っているようで、さつさと食事を片付けて仕舞おうと思つたが、考えと反して食があまり進まない。

やっぱり、体調が悪いのかも知れない。そう言えば最近から体調が優れなかつたつけ、そう考えた僕はフオークを置いて早々に食べかけの物に布で覆つて寝室に戻つた。

で、

「つっても読書するにしても——気分じゃないんだよなあ……」

敷かれた布団を畳みなおす事もなくごろりとなりながら、僕は全力でだれていた。

気分じゃない、と言うのもそもそも僕は気分屋な所があったなと今更ながらも再認識をしても、やはり動くこと事態に今だけは積極的になれなかった。

頭がハッキリしてやっと分かった事だが、僕は現在進行形で悩みを抱えている。

「うちゅうか、一度は言つてみたいと思つた事はない事もないけど……ぶつちやけ写真だけで満足だしなあ」

発言が発言なだけに、その道に携わつた人に聞かれてしまえば切れられても不思議ではない台詞だが、それでも僕としては考えを改めるつもりはなく、本での知識と映像か写真さえあれば十分満足してしまう性質（たち）であつた。

性格言えば修学旅行でカメラを持たない人間、と言つたところだろうか。我ながら的確な表現だと思う。

「……だつたら何を悩んでるんだよ、僕は」

眩きの理由（わけ）は本当は分かっている。

今まで気づかないフリをして来たのが、今回は今になつておつりを付けて、ついでに利子までもついて押し寄せて来ただけのこと。

見て見ぬふりが出来た過去は既に過ぎ去り、向き直らなければならぬ現実が目前に

まで迫っているのだ。

「やべえ……就職活動思い出した……」

とうの昔の記憶に今だ色濃く脳裏に残る黒歴史（トラウマ）を思わず思い浮かべてしまった僕は硬直の後、苦しげに息を吐いた。心なしか動悸もワンテンポ激しくなったような気がする。

どうして独り言なのに、こんなにも言葉にする事が、自覚すると言う事が怖いのか。人は、そう言う風に出てくるとでも言うのか。人じゃないけど、やはり未だに慣れない内臓を締め付けられるこの感覚は人特有物だと、未だに僕が人間から離れられないかと強く思い至った。

「僕は、永琳が好きなんだろうなあ……」

だから、しみじみと吐き出した言葉と共に気絶したのは、少し見逃してほしい僕の新しい歴史だったりする。

## 第10書 やつと言えた

「……?」

彼女、八意永琳が作業ディスプレイとは違う、明らかに私的用途の為に設置された旧式のブラウン管と思われる映像画面を作業の合間に見たとき不審そうに首を傾げた。

また寝てる……? 確か昨日食事を取ったきりよね?

画面に映る映像には玲が布団で横になってる姿がハッキリと映されていた。

幾つもあるカメラだが、始めは彼のへの安全の為に設置されたものであるのだが今となっては監視カメラと大差ない役割に納まっていた(勿論彼の監視であるが)。そして尚、類に類を重ね、これまた彼の知らない、知る由のない事であった。

半犯罪染みた行動に大した罪悪感も沸く事もなく、永琳は湧き上がる疑問につられ、投影ディスプレイに録画映像を流して確認すると、やはり食事を取ったあと玲は部屋に籠ったきり全く動いてない事が確認できた。

ふと画面端に表示された時間を見ると既に針は一度回って夜の8時を指していた。

「おかしい、わね……」

言葉となつて出た違和感に永琳は眉を蹙めた。

玲の平均睡眠時間は長くはない。どちらかと言うと少ないはず、前も言っていたけれど彼自身、本当は睡眠は必要ないし云わば趣味のような物、だったつけ？ 何時もなら寝る時間すら惜しんで読書している筈なのだけれど……寝過ぎたりでもしているのかしら？

……そもそも睡眠が必要ない生物つて言うのが胡散臭いのよね。

常々玲の生活サークルに疑問と不満を懐いていた彼女はその時は特に何を思うでもなく。

「珍しい事もあるものね。さて——さっさとこの作業を終わらしちゃいませよ」

考えを切り上げ、視線を正面に移された。

この間、彼女は長時間の画面と向き直つての作業に態度に表さなくとも多くれ少なからず疲弊をしていた。もししていなかったら、もしくは注意深く見ていたら気づいていたかもしれない。

彼の持つ本が仄かに光を帯びている事に。

「……もう一頑張り、ね」

それに気づいたのは翌日、仮眠から目覚めた後だった。



僕が目が覚めたのは氣を失ってからすぐだった。前までには考えられないほど、意外に早い覚醒（立ち直りとも言う）に驚きはしたが意識がしっかりしても脳内に蔓延る半信半疑さは拭えずにいた。

が、無視できないほどに膨れ上がった気持ちがあるのも然り、この気持ちに目を逸らすほど僕は愚か者でもないし臆病者でもないつもりだ。氣絶はしたが、またそれも一種の気持ちの強さ……なのだ。

言い訳に冷や汗を掻く自分を何とか脳内で説き伏せてどうにか頭の中で構想を練るも、どれもいい案とは言えない。

美味しい料理を作ろうとも、相手の帰宅時間が分からないし、それならばドツキリのような搦め手も考えたが成功するビジョンが見えない。

結局の所、圧倒的に僕には経験地が足りないのだ。今の状態で彼女と面と向かい合っ  
てしまえば言いたい事も忘れて赤面してあまりの恥ずかしさにもかしたら自殺まが  
いの行動に出る可能性までもあるかもしれない。

この気持ちは怖い、とはちよつと違う。

ただ、考えられないほど、あり得んほどに照れくさいのだ。

あくまで比喩だが、長年付き合ってきた幼馴染に告白する、他には血は繋がってない  
姉弟（きょうだい）に告白すると言うところだろうか？　こう脳内で纏めると僕が緊張

するのも無理がないと思う。

正直に言えば今すぐこの都市から脱出して彼女の目の届かない秘境に逃げ出したい。ただその選択を選べば一生後悔する事などに考えつく事でもあった。

何時もであれば尻込みする状況だが、それ以上に、迫るタイムリミットが僕の心を焚きつけてくれる。

この時ばかりは追い込まれる状況が逆に焦りではなく、冷静さを与えてくれた。

どう行動に移すか、思考が冴えるに末に出した結論は、やっぱりあれしかなかった。

言い方として適切かどうかは分からないけど、出来ればお互いに傷かつかないようにと考えての作戦だった。それに、もし断られても僕はどちらにしろ宇宙について行くと決心した。

決して、それを餌に脅す気なんてない。真つ向から、真正面からの勝負だった。主に僕の心情面での鬨ぎ合いだが。

それで、告白のこの字さえ知らない僕が出した結論、それは——  
(やっぱ告白ついたらむーどだよね……?)

我ながら初心者ばりばりの思考に頭を抱えかけたが考えの末、それほど間違つてはないと思ひ始めての結果である。決して妥協とか、腹案などではない。

本音を言えば……ムードなんてない、平凡な部屋の一角でまごつきながら僕が『すす

好きです！』なんて言ってもお遊戯会にならないにしろこのままでは唯のお遊びと間違えられてもなんら可笑しくない。

しかし、ムードと言っても具体的にどうするのか？ 答えは簡単だ。

(僕が今まで培ってきた力を使ってどうにかしてする！)

高らかにそう宣言したつもりだけど……やっぱり、本見たほうがいいかな。……ん、本？

「あーその手があつたか……」

◆ 思い浮かんだ名案に数日前に読み切った書の内容を思い出し始めた。

「——つ、こんな時に！」

それまで取り掛かっていたプログラムの確認を手に止め、モニターに表示されていた映像に思わず舌打ちを洩らした。

何時ものよう、彼が過ごす部屋を映す監視カメラから彼を見て仕事に取り掛かっていた途中彼——玲が急に立ち上がり、なにを仕出すのかと様子を窺っていた時の事だった。

寝起きという事もあり、彼のことだから大したことはないだろうと思つていたが、彼の本——あの訳が分からない文字で綴られた本が朱色に光り出した時、思わず自分の目を疑つた。

次の瞬間、本から飛び出すは朱色の文字にそれはあの本に書いてあつたと同じような訳の分からない、明らか文字として成り立つてない文が、屋敷を這うように壁を覆つて朱色に輝くと同時に仕掛けていたカメラの画面が砂嵐に切り替わつたのだ。

——不味い。

人知れず永琳は唇を噛み締めた。今は都市内は、妖怪達の不可解な動きに警戒をしていて少ない異常事態を見逃すほど甘くない警戒態勢を敷いていたのだ。そしてそんな中、彼が居る事がばれてしまつたら……。

私自身がどうなろうとどうでもいい。そもそも彼に助けられた身なのだ。今更、死のうがどうでもよかつた。だけど——彼だけはだめだ。

永琳はいつの間にか、血が零れ落ちるほど強く、手を握り締めていたことに気づいてハツとした。

此の俣ではいけない。早く彼の所に行かなければ、そう思考を切り替え、機械の電源を切ることを忘れ、自分のために用意された個室の部屋を飛び出した。

後ろから聞こえる同僚からの何事だなどと言う、静止を求めると呼び声。私の名を呼び

説明しろなどという声を全て無視する。今はあんな奴らを構っている暇はない。私は建物から飛び出し、持つてる総力を出し切つて屋敷まで走つた。

その姿を見た通りを歩く人々は驚きの声を上げるもそれは彼女に届かなかつた。

(——せめて、何事も起きなければ言いのだけれど……)

永琳は不安な気持ち、胸を騒ぎ立てる中、目の前にある自分の屋敷を見上げていた。

よし——大体これで準備が整つたか、と玲が一息ついていると、ガラガラと玄関が開く音がした。

同時に押し掛かる疲労から僅かに遅れて反応して体を向けると、息を切らして鬼気迫る表情をした永琳が立っていた。

玲はその様子に一瞬間を食らつたが、彼女が来たなら些か早すぎる来訪だつたが好都合だと、柔らかな笑みを浮かべようとしたがどうも緊張からか、強張つた物になつてしまった。

玲は笑顔を維持したまま、永琳を見たが彼女が強張つた表情を崩さない事に少々戸惑いを覚えた。

そんな彼とは別に、永琳は硬い表情を崩さないまま、表向きは何時と変わらない様子で廊下を歩いて玲に向かって行つた。

ふと気づいたときには玲の前には仁王立ちし、昔よりさらに成長した……体でさらに大きな影を玲に落とした。

正直彼女の今の顔を直視すると恐いが、今が踏ん張り時であろうと自分を鼓舞し、目を逸らさず見上げる。すると彼女は、どこか不安げに覇気のない震えた声で、口を開いた。

「……な、なにをしているの？」

彼女らしくないハッキリしない言葉に思わず玲は首を傾げた。なにをそんなに動揺しているのだろうか、その間に玲が考え事に言葉を発さないと急に怒ったように言葉を荒げた。

「何をしていたのよ！」

「え……」

肌を叩きつけられた怒気に驚きのあまり玲は目をまるくした。

自惚れ、などではなく永琳は玲に対してこれほどまでに、怒声を上げる事なんて今までになかった事であった。玲の戸惑いから困惑に、感情の変化に伴って逆に頭が冷えて行った。

しかし、何をしていたのかと聞かれるとは……僕がなにかしてたのを知っている？

なぜ？ そう頭の中で考えが駆け巡るもどれも要領を得ない。それよりも、現状で一番

の問題である説明に言い悩んでいる僕の様子を見て、さらに眉間に皺を寄せる彼女に目を白黒させながらも思い悩む。

事情を言いたいのは山々だが、サプライズとして用意していた術式のタネ明かして——なんて事をしたら折角用意したプレゼントが——と言つても今の永琳の見る限り、言わなければ言わないで逆効果であろう事は玲の目から見ても明白であつた。何よりこれ以上混乱している彼女にさらに動揺を与えるのは良くないと思考を簡潔させた。

彼は、はあー、と盛大にため息を付いて、彼女はそれにさらに鋭い眼光を玲に向けられる。それを無視して嘘すら許さないであろう彼女の目を見ながらおすおすと口を開いた。

「別に永琳が怒ることじゃないよ。ただ——準備してただけさ」

「……準備？」

それはなにかと、彼女が口を開こうとした瞬間、玲が術式を発動させ、壁が朱色に輝きを帯び始めた。それに目を見張る彼女に目を向けて一言。

「ようこそ、僕の世界へ」

にこやかな彼女に笑みを向けて、際限なく光が洩れ出す朱色に体を染めて、彼と彼女は視界が朱色に染まつた。

屋敷に到着して何時もなら荒い息のまま、彼と顔を合わせたくなくないが今はそんなことも言つていられない。不安の一心に玄關のドアを乱暴に開け放つた。

彼は確かにそこに居た。

永琳が忌避した予想とは違い、何の変わりもない屋敷内部に彼女は安心よりも強い、不信任感を懐いた。

驚いた様子でこちらに振り向き笑顔を向ける彼は何時もと同じ——でもどこか何時もの彼と違う？

疑心暗鬼な思考に拭えぬ不安感が何よりも恐ろしく、彼女の胸の内を掻き回した。

「……な、なにをしているの？」

口から零れた声は自分の物とは思えぬほど掠れ、どれだけ今に恐怖しているか表していた。

それを、玲は永琳の問いに答えない事で更に増長していく。無言で、強張つて見える笑顔をこちらに向けるだけ、それがまた永琳の心を揺さぶつた。

それを見て、私知つてる彼が何処か、遠くに行つてしまったような気がした。

よぎつた考え、崩れそうな表情を隠す強張つた顔で見る無言の玲の姿は、永琳のことを突き放しているのでは、と。よく考えてみれば、この時の自分が普通ではなかったと気づけただろう。或いは気づいてかもしれないが、彼女の悲観は止まらなかった。

やだ、やだよ。私を置いていかないで——どこにも行かせない!

それは支配欲による激情の感情だった。昔からあるトラウマにも似た感情、彼女はそれに囚われ、気づいた時には激を飛ばしていた。

一瞬、自分で言ったにも呆然としてしまった。

湧き上がる感情は後悔、やってしまったと彼に——き、嫌われてしまいかも……。崩れ落ちそうになる体を押さえる様に不安な気持ちを何とか体を抱えるように抑えた。

ここで自棄になつてはだめ、と自分から湧き出る感情を何とか押さえ込んだ。

苦しい——彼はまだ黙っている。もしかして嫌われてしまっただろうか? 表現ができないほどの苦痛にも似た時間、彼女が痛みを必死に抑えていると、彼がはあー、と深いため息を吐いた。

一息から感じた呆れ、落胆と言つた感情を彼女は誤認した。

なぜ? どうして? 私が貴方が何かをやっていることを邪魔してしまった? もしかしたら外に出れない事を不満に思つたのかもしれない。私を嫌いになったかもしれない。様々な憶測が飛び交う中彼は言う。

「別に永琳が怒ることじゃないよ。ただ——準備してただけさ」

「……準備?」

準備とはなんだろうか? 彼は偶に訳の分からないことを言う。それは私とは違う、

先を見ているような言葉、そして彼が使う不思議な術のことは知っていた。どの文献にも存在しない文字の数々で紡ぎ、最後に結ばれて発動することが出来る術——彼は魔術と言っていた。自慢げにそう言う彼の姿は子供そのものでとても可愛らしい。けど、今はその可愛らしい姿もどうしてか、とても恐く感じてしまう。

魔術に準備が必要なのは知っているけど……それで何かをしようとしていた？　ならなにを……？

それを聞こうとした瞬間、周囲が朱色に包まれ、言葉がでない悲鳴が上がる。

そして彼は変わらぬ笑みを浮かべながら言ったのだ。

『ようこそ、僕の世界へ』

その時にはすでに意識が深く沈みかけていて、聞こえた彼の声は耳元で囁かれているような気がして不思議と幸せな気持ちだった。



周囲は数々の本棚に囲まれた空間、本棚どこまでも続き、先が見えないほどである。そしてその空間の中心には広いテーブルが置かれており、それを囲むようにイスが数えるほどと、端に置かれた高級感があるソファーには二人の男女が座していた。

男は青年の風体しており、優しげな顔には微笑みを浮かべ漆黒の黒髪は目に掛かるほどの長さに残る髪は雑ながらも縄で束ねていた。見る人が其処にいれば人目で好青年

と言った感想を抱くであろう。

服装は長めの灰色のパーカーを着込んでおり、ゆったりと着こなし、人が良い印象を受けた。

女性は赤青の奇抜な人目で中華風と感じる服に、此方では珍しい銀色の長髪で長い後ろ髪は青年と同じく、後ろで束ねる形を取っていた。青年はその女性に微笑みを向けながら優しい声色で。

「さ？・起きて永琳」

そう声をかけると永琳と呼ばれた女性は震える臉をゆっくり開け、夢から覚めたような、どこかまどろんだ目を青年に向けた瞬間、驚いたようにその目を見開いた。

開いた口が塞がらないと言った様子で、何時もキリつとした顔を呆けたモノと表情が変わっていた。それが面白いのか青年はクスクスと笑い、笑われた恥ずかしさからか、女性は顔を赤らめ俯ける。

「ふふ、永琳僕だよ？ れい、もしかして忘れちゃったかな？ ふふ」

それはそれは可笑しそうに笑う青年の口元は、悪戯っ子の悪戯が成功したような子供っぽい笑みを浮かべ、永琳は驚きの混じった声を上げた。

「れ、玲？ なんていきなりかつこよ——じやなくて成長してるのよ！」

驚きを隠せない様子で、そう言う女性は照れているのか、手をぶんぶん振り回してそ

う主張する姿に、玲と呼ばれた彼がさらに吹き出した。

それに女性は憮然とした表情に、ふんと顔を他所向け、如何にもイジケましたと主張しているようで、彼女の容姿は大人と感ずるにも関わらずやるのが些か子供らしい。それにまた笑みも深くするも、さすがに悪いと思つたのか声は上げず、謝るも彼の顔には依然と笑みが浮かんでいるため、本当に謝っているのか怪しいものがある。

それを女性が見るとはあ、と諦めのため息をつき、ここはどこかと青年に問う。

それに青年はぱつと表情を真面目なものに変えて、先とは違う空気に変わり厳かに口を開く。

「此処は僕の中であり僕の世界、此処では全てが僕であり全てが形が違えど僕なんだよ」  
彼がそう言うのと彼女はその言葉を吟味する様におずおずと口を開いた。

「——なら……この座っているソファーも、あの本棚いっぱい詰っている本も？」  
「そう、全てが僕と言う形を現しているものなんだ」

そう言う彼はソファーから立ち上がり、それに続けて彼女も立ち上がる。歩く彼の後ろを着いて行く彼女の姿を満足そうに見て、彼女は彼に手を引かれながら本の森の中を進んでいく。

二人の間には言葉はなくとも、目で語らい、理解し合っていた。ふと女性を見ると、顔には満足げな笑みを浮かべ、それに続けて彼も小さく笑う。

目的地に到着したのか、気づけば荘嚴な王座が二人の目の前に現れていた。と同時に玲は彼女に振り返り、永淋はその動作に首を傾げる。

玲は語るような口を開いた。

「昔、永淋と出会うより昔、僕の世界にはこのイスとここまで通ってきた本が入っていない本棚しかなかったんだ。僕はその本棚に沢山の本で埋めて、埋めて。それはとても楽しい事で、それでも少し寂しくて、虚しくもあつたけど、それでも僕は満足してたんだ、だけ」

王座に一歩ずつ足を進める彼の肩は、僅かに震えていた。彼女は彼のその姿に何を言いたいのかと視線を送りながらその場に留まる。彼は続けるように言った。

「——この世界にきた僕は、君出会って、少しづつ、ほんの少しだけけれど、変わったんだ」  
そう言つて辿り着いた王座の上にあつたモノを拾い上げ、背を向けていた彼女に振り向く彼の目には僅かに涙が浮かんでいた。

「この『世界』に来てから君に遭う前までは、元はこの王座と、本が詰つた本棚以外無かつたんだ。でも君と出合つて、君と共に座るためのソファアが増え、君と語らうためのテーブルが出来て、君と刻む時間を知るための時計が出来て、何より——」

いつの間にか彼は彼女の目の前にいて、彼女は彼の言葉に静かに耳を傾ける。

「——何より、君と過ぎした本『記憶』が出来たんだ。今まで人と触れ合つてきたけど、

思い出だなんて、こんな事は初めてなんだ、だから、うまく言えないけど……これから  
も、こんな僕と一緒に居てくれますか？」

そう言う青年は、右手を彼女に差し出す青年の目は不安気で、彼女の目には青年の姿  
がぶれる様に悲しそうにする少年の影が見えた。

青年の手に目を向けるとそこには朱色の宝石で遜色された指輪と対になるように蒼  
色の指輪が乗せられていた。

それを確認すると、彼女はその整った顔を涙で歪め、彼と同じく、床に跪くように崩  
れ落ちて嗚咽を洩らす中で掠れた声でも確かにそう聞こえる声で呟く。

「……ほんとに……本当に私でいいの？ 私を許してくれるの……？」

その言葉には、今まで抱いてきた何百年経とうとも感じてきた罪悪感が含まれてい  
て、そしてなにより深い恋心があった。彼女自身……彼のが好きだった。だけどそ  
れを考える度に深い罪悪感で苛まれ、こんな自分じゃ、彼と釣り合う分けない。そう信  
じて生きてきた。

それは言うなれば一種の罪滅ぼし、手が届く所に彼が居るのに、手が伸ばしきれない。  
途中で手を引いてしまう彼女自身が、何より嫌いだった。

何より嫌いな自分自身のことを彼は一緒に居てほしいと、そう言った。それはとても  
幸せな事であり、それはとても、長年の罪の意識からか、叶えられた願いであり……嬉

しきから、涙を零した。

「うん……。この世の誰も許してくれない事だろうが、僕は永淋を信じて、永淋も僕のことを信じてくれる限り、どんなことでも許すよ。だから——」

今度こそ——

「こんな僕と一緒に居てくれますか？」

「——はい」

微笑みあう男女は見つめ合い。彼は彼女の左手に朱の指輪を、彼女は彼の左手に蒼の指輪を、その瞬間二人の姿は重なり合い、それを祝福するように、窓からは金色の光が差し込み、荘厳なる王座はそれを見つめるようにそこにただ静かに、佇んでいた。

## 第11書 決意

目が覚めると、既に見慣れた天井が目に入り周囲を見ると、机に置かれた薬品が並べられていて、それを見てそこが彼女の部屋ということに確信した。

どうやら術式を組み込んだのに意外と疲労していたらしく、指輪をはめたあたりから記憶がおぼろげになっていたことに気づいた。あの後、たぶん僕が気絶したと同時にこちらに戻ってきたのであろう。

相も変わらずの脆弱さに情けなさを感じながら、僕はいつの間にか寝かしつかれていたベツトの上から起き上がった。と同時に部屋のドアが開いた。

「ああ、やっと起きたの？ 貴方が急に倒れて心配したんだから」

「あれ、永琳？」

内心、何で自分がそんな驚きの混じった声を上げているのか分からなかったが、永琳の表情を見て更に驚いた。

そう言う彼女は心底心配したと深いため息を吐き、目元の涙を拭っていた。まさかそんな心配されるとは……。少し寝ていただけなのに、大げさではなからうか？ とい

うかやっど？

「ねえ永琳。やっどってどうゆうこと？」

気づけば疑問が先立って口から出ていた。

「……呆れた……貴方が気絶してからもう一ヶ月よ一ヶ月！」

「は、はあ!!? そ、そんなに？」

彼女の言葉を聞いて、そんな素つ頓狂な声を上げる。なんと、確かに自分でも少し、無茶な術式を組んだと思つたが……。なるほど道理で体の調子がいい訳だ。

どこか遠い目を向けているとパーンと頭から小気味いい音が鳴つた。

「いつつ〜いきなり何す、ん……の？」

僕を叩いた張本人に、顔を向けるとそこには般若のような形相の彼女が居て、僕は思わず場違いであろう、わあーと人事の様に小言で呟いた。

「貴方が気持ちよく寝ている間、私が何をしていたか貴方知っているかしら？ 突然私  
が研究所から飛び出してきたことを同僚やら上層部の連中に懇切丁寧に説明して、謝罪  
文の書類を作成した後には私が周辺住民にその説明をするために回ったり、一時的とは言  
えここから急に居なくなつたことをでつちあげる嘘を考えたり——」

と、まだまだあるぞと言つた不平不満をぶちまける永琳に、いつの間にか正座の体勢  
を取らせられていた僕は勿論反抗する気すら文字どうり失つていた。というか最初の

ほうはあまり僕は関係なんじゃないか？

「ねえ、研究所を飛び出したのつて永琳の責任だよな？」

「説教中よ。黙りなさい」

……理不尽だ。

そう思いながらも僕が逆らえるはずもなく、その後も、永琳の説教と言う名の小言は太陽が沈みきるまで続き、足の感覚がなくなってきたあたりでやつと永琳が立ち上がり説教というより、半分以上横暴である話に終わりを告げたのであった。

「……で」

「——で？」

足の痺れのまま立ち上がることが出来ない僕に投げかけられる言葉に、思わず首を傾げた。なんだまだ話が終わっていないのか、できれば手短かにしてもらいたいものだ。だと思つて無言で、彼女を見上げていると永琳の額に、青筋が立っていたのを見て思わず焦る。

「ど、どうしたのさ永琳？ な、なんか怖いよ？」

思わず口走つてしまった言葉に、はつとした時には時すでに遅く、彼女はドスの聞いた声「へえー」言う。すでに部屋の中は、薄暗くかつたが、彼女がこちらに暗い笑みを向けていたことが、なぜかハッキリと分かり戦慄する。

立ち竦んでいると、いつの間に取り出したのか、右手には在り得ない色合の薬が入った注射器が――

「デジャブツ、と言う間すらなく早口で弁解をまくし立てた。

「ちよつと！ 分かった、分かったから！ ごめん！ ごめんなさいいいい！」

僕の必死の命乞いが成功したのか、今にも首に刺さりそうな注射器はピタリと首元で止まり、ただだらと流れる冷や汗袖で拭う。

「そう、それなら早く準備しなさい」

「へ？ 準備？」

一体なにを準備しろと言うのだろうか？ まさかさっきの長い説教中に何か、言ったのだろうか。半分以上聞き流したので全くわから――『ブツ』

「――つてええええええええ！ 痛ッああ！ なにアグレッツシブに首に注射器刺してんの！」

「大丈夫よ。中身は栄養剤だから」

ニツコリとそう言う彼女、いやその色で栄養剤とか在り得ないでしょと思つたが、しかしそこはさすがの永淋クオリティー。薬の色なんて能力で、なんとかなるとかならないとか。いやならなかつたら洒落にならないよ。ほんと……。

「で、準備つてなに？」

「冗談ではなく本気だったのね……」

とまた正座されて説明——ではなく八割型の説教を聞かせられた。搔い摘んで纏めると、どうやら僕が寝ている間色んなことがあつたようだ。

端的に言うと、シャトル出来た——隕石があと少しで落ちてくる——月に逃げるとかなんとか、半分以上説教だったので聞き流していたが、大体そんな所だろう。永琳に理解した内容を自信満々に言うと拳骨をもらつた。解せぬ。

「適当に要約しすぎよ……というか貴方、性格変わつてないかしら？」

いや、僕はいつも通りですけど？ あれ？ おかしいのか？ 僕ってこんなにテンション高かつたけ？

「あ、あれ？」

なんだろう。自分でも分からないけど……——気持ち悪い。

「——ッ！ どうしたの!？」

あれ——なんで目の前に永琳の顔が、視界が震えて、景色が歪んでいた。どうやら仰向けに倒れたみたいだ、と辛うじてそう、認識できた。

なんだか右腕が熱い。まるで溶かされた鉄を流し込まれたみたいだ。あれ？ なんだ右腕が光って——

思考の刹那の閃きに無理矢理に抑え込もうと左手を添えたが、気づいた時には遅かつ

た。

次の瞬間、パリンと何かが砕けると同時に、爆風が巻き起こった。同時に体から溢れ出して来る力の波に圧倒された。思わずそれに、舌打ちを洩らしながら如何にかして抑えようと、魔力を加えるも押さえが利かない。

——今まで魔力で抑えていた妖力に、魔法陣の許容範囲を大きく超え弾け飛んだのだ。抑えていた妖力が、何処にいくのか——僕の頭にはすっかりその考えがなかったのだ。長年貯めに溜まった妖力が、今になって体を巡り、妖気となって体から迸る。そして湧き上がる妖怪としての感情——僕の原点であり押さえつけてきた欲望の感情が今になって暴れ出して来る。

このままじゃ不味い——本能的にそう察した僕は本を手に取り即席の結界を作り、一時的に自分を押さえつけた。

ふと気づいた時には、僕の周りには瓦礫が散乱し、クレータの中心には僕が、それを囲むように複数の男女がいて、その目に宿るのは明らかな敵意であり、その男女に囲まれるように中心に永琳が居た。

「——ごめんね。永琳、一緒に行けそうに無いや」

僕が口を開けるとその兵士だろうか？ 兵士達は銃口を僕に向けて永琳の顔色を

窺っている。どうやら——彼女が抑えてくれたらしい。

「…………どうゆうことなの…………？」

「今まで妖力を抑えていた楔が耐え切れず、つて所かな」

ははと空笑いを上げる。こんな事になるんだつたらもつと、丁寧をやつとくんだつたなあと、今更ながら後悔しながらも、後の祭りである。

僕の自傷の笑いに、永琳は顔を歪める。幾ら彼女でも、ここまで暴れた僕を月に連れて行くことができないだろう。欲望は力と主に教えられていたのに…………僕は本当にだめな従者だ。何時も爪が甘いなあ。

同時にキィキィと、錆びた鉄が擦り合う様に、結界が悲鳴を上げ始めた。…………もう、長くはないだろう。

「永琳、僕はもうだめだよ。今だってギリギリで抑えてるけどもう少しで——」

「——少し黙ってて！」

彼女は癩癩を起こした駄々っ子のように、手を振るい、必死に考える素振りを見せる。とそこに走り寄ってきた男が、永琳に近づき耳打ちをした。

最初はそれを鬱蒼しそうに、露骨に嫌そうな顔をするも次第にその表情を真面目なものに変えていく。僕はその間、どうにか妖力を操作できないか、と試してみるもどれもうまく行かない。

今まで本ばかり読んでいて魔法ばかり学んでいたツケが今になって回ってきたような複雑な気分だ。

「玲、落ち着いて聞いて」

そう感傷に浸っていると永琳が幾分か落ち着いた声色で話しかけられた。

「今、この瞬間妖怪達の大群がこちらに向かって移動を開始したのよ」

「……どうするの？ 正直僕の相手をしている時間もないほど切羽詰ってるんでしょ？」

僕の間に不敵に笑いながら永琳はそれに答える。

「貴方なら溜まったストレスを発散させるならどうすればいいと思う？」

「——あーなるほどね」

その答えに合点言った様子で答える僕も、不敵な笑みを彼女に返して、焼け石に水で在ろうが僅かに残った魔力で結界に強化を加え、立ち上がった。

さあ、大暴れと行こうか。

「……………」

「……………」

二人だけで都市の外周を目指して舗装された道を歩いていく。僕達の間には会話は

無く、既に近隣住民はシャトルに避難したのか、辺りには全く人の気配はなかった。

がらんとした道を歩きながら、予定、作戦と言っては余りにもお粗末だが予測としては、妖怪達の侵攻をシャトルの準備する時間を稼ぐため、ある程度僕が暴れて妖力を発散させた後、シャトルに乗り込み、月へと逃げると言った算段である。

大部分の市民達はすでにシャトルに乗り込み、その時を待つ間の時間稼ぎをして後は無事帰還した僕を妖怪から人間を助けた者として祭り上げるとか……。

後は燃料の積み込みのみとなっているので、時間稼ぎと言っても僅かなものと永琳は言っていた。だが、そんなことは僕の頭にはなく、僕が暴れたせいで奇跡的にも死者は出なかったそうだが少なくとも、迷惑をかけたのには変わらないのである。罪悪が胸を締め付けるのを振り払い永琳に向き直る。

「悪いね見送りまでしてもらって」

「ええ、まったくよ。これでも忙しい身なのだから少しは感謝してもらいたいものだわ」  
「はは……感謝してるよ。今も昔も——ね」

そう他愛もない話をしながら、僕は不意に足を止めると、同時に彼女もそれに習い足を止める。

息を浅く吸って、深く吐き出した。何だか緊張しているみたいだ。

「最初、君と出会った時は絶対絶命のピンチだったよね。いきなり悲鳴が聞こえてきた

時はびっくりしたなあ。あの頃、実はどこかのヒーローみたいなのに、颯爽と現れて、君を助けて、大丈夫って声をかけて終わりだと思ってたんだけど、いつの間にか、それが何年も引き伸ばされて……。それが叶ったのは数百年経った後で、その後的一生に生活しだしたなんて……。ほんと偶然って笑えないよね」

「——貴方、覚えて——」

あと一息だ、と語調強めに頷いた。

「うん、覚えていたよ。でも黙ってたわけじゃない。確信したのはつい最近なんだ」

だから気にしなくていいよと、そう言つてはぐらかす様に、笑つて永琳の肩に手を伸ばす、いつの間にかまた背が伸びたのか、背伸びをしないと届かないよまったく、それがまたおかしくつてクスつと声が出る。

「永琳」

彼女の首を抱きながら耳元で囁いた。

「今まで有難う。君のおかげで僕は——大切な、本以外でやつと大切なモノに気づけたような、いや、確信できた。それはとても嬉しい事で、君とこうやって触れ合うのは、君からしたら他愛でもない事でも僕からしたら……。とても幸せな事なんだ。だから——」

永琳は黙つて聞いてくれている。僕は先の台詞言うかと思わず、今になつて言葉に詰りそれは喉を詰らせた。いつの間にか泣いていたのか、小さく嗚咽を洩らして、吐き出

すように最後に開くは――

「だから……自分のことを大切にして、僕の事なんてもう忘れて、ね。これから自分の為、みんなの為に僕にくれた幸せを分けてあげて――」

――さよなら。

そう言うや膝から崩れ落ちる彼女の体を支え、僕と同じく泣いてくれたのか、その目元の涙を拭き取る。そして誰も居ないはずの空間に話しかける。

「そこにいるんでしょ？ 出てきてくれないかな」

そう言うや、凄まじい殺気と共に白い衣を纏った黒髪の女性がなにも無いはずの空間から現れ、光に体を輝かせながら地に降り立った。その顔には至って落ち着いて見えるも溢れ出る神力は今の彼女の様子を雄弁に語っていた。

「落ち着いてよ。別になにもしてないから、彼女寝てるだけだし」

「……どうやらその様だな」

ふうと、安堵の息を吐く神、酷いなー僕ってそんなに信用ないかな？ あ、でも都市の一部を破壊したのも僕だし、それもしょうがないかもしれないなあ。そんな事を考え少し憂鬱になりながらも、殺気を収めた神に目を向ける。

「それで少しお願ひしたい事があるんだけど？」

「……言つて見るがいい」

「彼女のこことお願いします」

「なぜかポカーンとする神をほつといて、彼女を地面に横たえながら立ち上がる。僕は妖怪が侵攻してきているであろう方向に頭を向け、能力で妖怪と僕の間合いを計る——まだ時間はあるか。」

「そう結論付け、神と向き合うと神は既に永琳を抱えていて此方に視線を向けていた。どうやら願いは聞いて貰えたみたいだ。だけどまだあるんだけどな——」

「それじゃあ、次のもいいですか？」

「なんだ、まだあるというのか？」

「嫌そうにするのも隠そうとせずそういう名も知らない神。」

「なに、簡単なことですよ。僕を——」

「つてください」

「……」

「それに又唾然とする神、ほんと表情豊かだな——この神は。本にはお堅い連中と書いてあったがそうでもないのかな？ まあいいかそんなことは、と僕はそんな神を無視して言葉が続ける。」

「それと最後に、この指輪と一言、言伝を頼んでいいでしょうか？」

「——ああ」

「

それを神に伝え、今度こそ終わりだと言うように僕は背を向ける。最後に――

「彼女のこと……お願いしますね」

僕はそう念を押して目的地に向けて走り出す。

「ふん、少しは自分の心配をしたらどうなんだか……」

と、残された神の眩きは僕には届かなかつた。

◆

「……止まれ」

額に黒い角を生やした、鬼の男がそう手で侵攻を制すと彼の周囲に蔓延る様々な妖怪達は、ピタリと動きを止め、同時にその侵攻を塞ぎ止めた原因の者に視線が集中する。

それは灰色の服を纏った少年、いや正確には子供だった。

傍から見れば子供からは人間特有の力の証である霊力の欠片も感じず、それに順ずるように、他にこれと言って何も感じない。見れば見るほど注意する点すら見えない唯の子供……。

しかし、少年は妖怪の大群に囲まれているというのにも関わらず、顔には笑みを浮かべている。それを見た妖怪は、気が触れたか、などと言って感じた不気味さを破棄捨てる。

しかしその妖怪達を統べる頭である鬼は、依然として厳しい表情を崩さず、少年がなにを考えているのか見定めようとしているが、底が見えず、考えが読めずにさらに警戒を厳しくする。

「……まさか、鬼ごっここの相手が本当の鬼だったとはね……」

「そうか、お前はあの時の……」

少年の思わぬ独白に聞いた鬼は厳しい顔から打って変わって思い出したように口元に笑みを浮かべた。

少年の言葉は理解できなかつた部分は多々あつたが、鬼の脳裏には確かに数年前に逃げられた獲物が今になって、姿を現したのだと確信できた。それはその言葉に、嘘はないと本能的に理解出来た為だった。しかし、それでは、はて？ とふとした疑問が沸いてきた。

依然として不敵な笑みを浮かべる少年。そう、人間と言う種族でありながら年相応の姿をしていない違和感に鬼は人知れず眉を顰めた。

「さあ……そろそろ始めようか」

矮小な姿は至って堂々としているようにも見えるが、よく見ると少年の手が振るえているのではないか。

鬼はそれを見るや、予感やら思考を他所へとぶん投げて不遜な態度で応じた。

「おう、久しぶりだなガキ。処で少し聞きたいんだが、人間のお前が何故あの時の事を知ってる？ 幾らなんでも成長が止まったとかではないだろう。それともその小さな成りは流行り病か何かか？」

哄笑を含めた鬼の言葉に。

「鬼でも知らない事があるんだね、そう……あまり、大した事がないんだねえ」

コツコツと自分の頭を叩く少年の言葉の意味など、先が続けられなくとも鬼には分かった。

「ハハハ！ 自分で言ってる意味が、分かってるか小僧……？」

普通なら身を竦めてしまうであろう覇気が含まれた言葉に、少年は全く反応を示さず、表情を崩さない姿に鬼はやはり気が触れたのかと考えたが、少年の眼の色を見てその考えを改める。

——あれは戦いにきた者の目だ。

鬼自身それを見て、少年の壮絶な覚悟を感じた。それは今まで数多くの強者と相対した時と同じく、その姿を幻視したとも感じられ、知らぬうちに肩を震わす。

気づかない内に震えた手を見て鬼は思わず、悪態をつくとそれを見てか知らぬか、不意を付くような眩きにも似た声を発した。

「——悪いけど、ここを通す訳には行かない。それとそろそろ限界なんだよ

君らには悪いけど僕の憂さ晴らしに付き合ってもらうよ」

鬼が何を、と言おうとした瞬間。周辺の妖怪を巻き込むような爆発が起きた。

凄まじい爆発音に吹き上がる神風と共に、舞い上がる土ぼこりと、それを起こした張本人である少年から感じる馬鹿げた妖力、少年が——いや少年から姿を変えた青年が手を横に一閃すると、それにより舞い上がった埃は払われ、その姿を現した。

「——っ！」

『——!!』

先ほどまで少年の姿をしていたそれは、今は青年に姿を変えていて体から迸るその妖気に当てられた妖怪は腰を抜かしたように地べたに尻を落とし、それ以外の大部分の鬼が連れてきた妖怪達は狂ったような意味の無い言葉叫びながら鬼の周りから次々と姿を消して行つた。

そもそも、大部分の妖怪達を力で押さえつけて引き連れて来たのだろう。恐怖政治と言う言葉があるように、恐怖で打ち付けられた柵には更なる恐怖を。鬼自体に忠誠を誓う者はこの場には、一人していなかったのだ。

「やってくれたな……！」

底冷えするような怒気を含んだその声に、青年は全く反応を示さない。が、その目は鬼から離すことはなく、その灰色の目は何を思つてそれほど冷静に鬼を見ていられるの

か、彼以外わからない、が。姿形は変わったが依然としてその眼には強い意志の力を滲ませていた。

——言葉は不要、かと一人呟きを洩らしたか定かではないが鬼も青年に対抗するよう  
に、体を妖力で纏う。

二人の妖気がぶつかり合い、地鳴りにも似た音が響き渡った。両者の足元が、大きく  
地面が砕けた瞬間、鬼は青年に向かって飛び出した。

「ハアアアアア！」

二人の距離はあつという間に縮み、鬼の豪腕が青年の顔を打ち砕かんと振り抜かれた  
が、青年はそれを上半身だけで屈んで交し、と同時に鬼の懐に飛び込んで鬼の顎を狙う  
拳を繰り出すも、鬼は身を後ろへ引く事でそれを回避して攻撃移ろうとしたが、それよ  
りも早く反転の勢いを乗せた青年の風を切る足蹴が鬼の腹部にぶち当たった。

鳩尾を狙った一撃に鬼は低く呻くも、その場に何とか留まり、右足を振り抜いた体勢  
のままの青年の腹部に、お返しとばかりに拳を叩きつけた。

「っあ……い！」

腹を突き破るほどの衝撃が体をつき抜けたのにも関わらず、依然として青年は冷静に  
その鬼の拳を撃ち抜かんとする勢いを殺す為に後ろに飛ぼうと身を浮かせた。

青年の体が宙に浮き、一度離脱を謀ろうとしたが鬼はそれを許さず、左手で青年の袖

を引っ張つて体を引き寄せた。

瞬時に二度目、右腕を力一杯振りかぶり、青年の頭目掛けて振り下ろした——いや下ろそうした。

掴まれた状態で身軽に体を使い。青年は両足が鬼の首に巻きつけて勢いを付け鬼の顔面に拳を打ち付けたのだ。

グガン！

「ちいー！」

一撃。

刹那の間で鬼は自らが頭突きを繰り返す事で拳と相殺を凶つた。

骨が砕けるような音が響き、妖力が込められた拳に脳を揺さぶられ、体勢を崩しかけた鬼に追い討ちを掛けるよう、青年が右足を振り上げ、雷鳴の速さで打ち落とした、が。鬼の左手は今だにしっかりと青年の右腕の袖を握っており、本能的に危機を察した鬼は朦朧とした意識の中で袖を引いた。

青年は釣られた魚のように空中で体制を崩し、空ぶつた足が運悪く鋭利な角に突き刺さり、そのまま抉られたまま、紅い線を引いて青年を地面に叩きつけられた。

「——ガッ！」

短く悲鳴を洩らす青年が上を見上げると同時に覆いかぶさるような重い拳が襲い掛

かる。

「オラアアア！」

背中は地面に叩きつけられ、胸部を強打された事で肺から空気が押し出された。酸素が吐き出され、呻く青年を見上げる鬼に瞬時に青年は危険と感じて起き上がるようにするもそれが出来ない。

極度の集中化でコマ送りにされた視界で見ると、鬼は左足で青年の腹を踏みつけ、固定されていて動こうとも動けないのだ。身を振り、どうにか逃げようとするも、力の差は歴然だった。

「アガアアアアアアア！」

鬼のような怒号で吐き出された気合の元、振り落とされる鬼の拳を無駄とも知りながら受け止めようと、両手を前に突き出し、それは掲げるも。

次の瞬間、振りぬかれた鬼の拳はその余波で周りの大地を砕き、青年はそれを一身に受け、大地にめり込んで平地から姿が消えた。

終わったか——そう思い、気を抜きかけた鬼はすぐに考えは裏切られた。

すぐさまにその地面の中から抜け出そうと、もがく二本の腕が突き出された鬼の足を掴み、引き千切らんと足に指が捻じ込まれ鬼は、先までの油断を払拭し、躊躇なく更に左足に力を加え青年を潰す。そして何度も、何度も拳を振り上げる。

振りぬく毎に大地は揺れ、そのヒビは広がっていく。

——幾度か鳴った地響きは何時しか止み、その場には鬼の耳を塞がんばかりの咆哮上げた瞬間、天を目指して突き進むシャトルが月を目指して飛び立ったのはほぼ同時だった。

宇宙に飛び立ったシャトルの中では、蒼い地球を見上げ、二つの指輪を朱と蒼の指輪を血が滲むほどまでに握り締めた銀髪の女性が涙で瞳を濡らし嗚咽を洩らしながら泣き叫んでいた。周囲には誰も居ない場所で、急にピタリとその女性がその涙で濡れる顔を上げ、真つ直ぐと地球を見下ろすその眼の中には確かな覚悟と決意の炎で揺らいでいた。

## 第12書 サガ

気がつくとも周囲は何も見えない闇で——

——またここか……。

僕はあー、と安堵からともわからぬ溜息を吐き、暗闇の地面に倒れ込む。

「負けた……」

思い出すは鬼への恐怖だった。体の骨を砕かれ、筋肉を裂かれ、頭に至るまで粉々に砕かれた時の痛み。僕はあの戦いの最中、自分の意思で体を動かせなかった——自分の妖力に操られるなんて従者として、妖怪としても半人前もいい所だ。というか死んだよ。

……ショックだ。立ち直れないかも、と言うか今更立ち直ったから何だっつてんだ……。主の従者として、その任を守れなかったのだ。しかし——してはいけない。僕は自分がしたこと的一切後悔はしちや駄目なんだ。

——……永琳達は無事だったかな。

半分意識がなくて時間とか考えていなかったが多分、大丈夫だろう。妖怪達の大半は逃げたってたし、やることは殆ど、神様に頼んだから問題はないだろうと思う。

はは、さつきから思う——だろうとか。所詮は僕の憶測でしか計れなんだけど、ね……。

口から吐かれた息と共に、今になって空気を吸うための呼吸を行ってない事に気づいた。

混濁し始める意識の中で、自分でも笑ってしまふほど馬鹿げた事を考えてしまった。

——でも、一つだけ後悔があるとしたら、せめて——『もう一冊最後に読みたかったな』。

眩きは音になる事はなかった。一瞬の瞬きの間に、僕の視界で何かが掠めた。

瞬間、永遠に変わらない深淵の闇の中で視界が揺らいだような気がした。

「……なんだ？」

僕はその空間を凝視するもやはり先とまったく変わりなく、なにも見えない。

「気の、せい……か？」

ここは簡単に言うると主の世界だ。なによりも、不変の世界で変化(それ)が起きた。なぜ——それはまだそれが完全な物ではなく、僕と言う異物を抱えているから？ いや、

それは言いて妙だ。僕は主との契約の元まさに一心同体、一蓮托生している。なら何かが異物としてこの世界に異変を起こしている……？

「——あつ」

その時、僕の脳裏に思い出されるは主の言葉『輪廻転生』だった。

僕はまだ、その枠から外れてない……？ だからこの世界で僅かならも変化が起こった。僕が生きたいと願ったから？

わからない。理論も、思考も追いつかない。だけど僕はまだ、少なくとも——生きていく。

『——生きてどうする』

不意に投げかけられる問いに、戸惑いを覚えるも僕はハッキリと、先まで倒れ込んでいた体で、無理矢理立ち上がり——答えなんて決まっている問いに答える。

「僕は生きて、生きて。どれだけ孤独だろうと、どれだけ殺されかけようと生き抜いて、生きていたい！ この体が無くなっても、僕と言う記憶が無くなっても、生きて……生き続けて——本を——主と共にその知識（欲望）を満たしきるまで生き続けたい！」

返事はなかった。死力を尽くした僕の心の叫びは聞き届けられたのか分からない。

無言の時間、僕が今まで生きてきた以上に、とても長く感じられた時間で、それは突然に終わりを告げるように僕の体を包み出した。体が真っ赤に染められて行く。

それは足元から首元に至るまで染められて行き、視界が完璧な赤に染められた瞬間、全身に感じる痛みに倦怠感。それに視覚、聴覚と言った様々な感覚が戻ってくる。と同時に聞こえる大地を揺るがすような咆哮。

僕は思わず絶叫していた。

——ああ、僕は戻ってきた！



「……主は、化け物か？」

僕が地面にめり込んだ体を地表に押し上げると、鬼が咆哮を上げたままの状態で、固まり口をあんぐりと開けて目を剥いている。しかしそれもそうだろうと鬼の驚き同意せざる得ない。

あれだけ体をぼこぼこに殴られたら普通生きてるほうがおかしいだろう。だが、僕の体の状態は未だに酷い状態には変わりなかった。

無事に動かせるのは両足と腰くらい、左腕指がバラバラに裂けた左腕に関しては、千切れて僕が嵌っていたくぼみの中にぼつんと残っていた。

右肩も外れ、右腕に関しては手が無い。よく見れば数メートル先に転がっていたが、これってくつつくつくだろうか？

まあそんなことは今はどうでもいいとして、ほかの部位も手ひどくやられていたが、頭に関しての傷は完治していた。

今の状態は瀕死には変わりないが、即死するほどではないモノにまで回復していた。

「ハハ、つつつても……」

背骨が、バツキバツキにやられたのか、グラグラと体が安定しない。立っていることさえこの状態じゃ奇跡じゃないか、これじゃまるでゾンビ見たいだと、自傷気味に鼻で笑った。なんだか知らないが酷く愉快な気分だった。

けど、正直このままで殺り合うにはこちらが余りに分が悪い。つい弱気になり自分の腰に視線をずらすと、驚くことに一瞬自分の血で染まってしまったのかと、思うほど真つ赤に輝いていた。

（——使えってことか？）

ちらりと仰いで見ると、

鬼はまだ、僕の様子に啞然として動きはない。

やるなら今しかない——隙を突き、僕は妖力の応用で本を引き抜いて本を開くのを同時に行った。

瞬間、本から飛び出す夥しい量の文字、いや、もう文字とは言えない真つ黒なソレに眼を見張った。一瞬、驚きの余り反抗しようかと半歩、後ろに下がったが文字の追撃が容赦なく僕の体に巻きついてくる。鋭い痛み顔を擗めたが徐々に収まる痛みの箇所を眼を向けると、次第に体の欠損を補って行くのが見えた。

「——なっ！」

鬼の襲撃の間もなく、ものの数秒で僕の体の修復はほぼ完了していた。

弾け飛んだ腹部は黒い蝨く文字に埋められ、出血を抑えていて、それを確認するように触れると内臓と同じように脈動を繰り返して機能している事が分かる。

両腕とも漆黒に染まり、体には折れた骨をpushさえるように、それは添え木のような要領と一緒に、尚もその字の数々は僕の体に強化して行く。それに危機感を感じたのか、鬼は瞬時に地を蹴り上げ、轟音と共に振り上げた手刀を僕目掛けて振り下ろした。

体を弓なりに反らし、全身と豪腕からなる素早い手刀は、正面からぶつかれば名高い名刀さえ、両断されるだろう。冷静に分析をしながら僕は能力で正確な間合いを計りながら通常では対応出来る筈のない間合いから動き出し、右腕を前に突き出して手刀を迎え撃った。

衝撃（インパクト）の瞬間、手刀に因つて巻き起こった風がかまいたちとなつて僕の肩口を鋭く裂いたものの、受け止めた黒腕には傷一つ付いていなかった。

「くはっ！」

足元から涌き立つような歓喜に従い、黒く染まった右腕を振り上げた。まさか力で押し負けるとは思わなかったのか、鬼は片腕を上げた状態で硬直し、がら空きの胴体に黒の一閃を描いた。

「ぐッ！」

斜めに出来た傷跡から鮮血が吹き上がったが、傷の入りは浅かった。

現に反撃の一手が僕を襲うのは傷跡を確認しているのと同時だった。一安心する間も無く迫った一撃は僕に回避する暇も与えずに、容易く柔腹を突き破った。

「……！」

反射的に振った身も意味を成さなかつた。視線は動きを追うように、呆然と鬼から突き刺さった腕へ、それから滴る黒い液体へ移っていく。見えた範囲ではない、鬼が、唇の端を上げてしていると気づいた。

身長差から持ち上げられた体に、反抗する術もなく自然と視線がかち合った。

——痛みのない腹部、恐怖から、それとも恐慌からか。僕はごくごく自然に、それがこの場では不自然な、壮絶な笑みを浮かべた。

鬼の腕と僕の手が重なり、鬼の顔が歪むと同時に――。

「僕の勝ちだっ！」

黒き指は無数の文字から為っていた。それは僕の力、つまりは妖力により成り立っている。気質の違う力同士、反発しあうそれ等を無理に相手に流し込んでさえしまえば、答えは簡単、内部破壊だ。

「弾けるオオオおお！」

僕の掛け声とともに、突き刺した指から流れた妖力に因って鬼の肘から下がバラバラに弾け飛んだ。

「——オ——!!」

鬼はそれに声にならない悲鳴を上げるも、流石鬼。激痛に怯まず、鍛え抜かれた肉体から為る中段の前蹴りを放ってきた。

着地と同時に僕は左腕でそれを屈んで受け流すと瞬時に引いた右腕を鬼の胸目掛けて突き出し、心の臓を貫いた。それは鬼の中心であり、走馬灯のように浮かんだ記憶に僕は懐かしい感覚の中、呟いた。

「——ガ」

「……ストライイク……!」

顔に笑みを浮かべてそう言った瞬間。

バン! 鬼の体はその下半身を地面に残し、上半身が弾け飛んだ。血や内臓は黒く染まり、その教科書のインクのような黒が僕の体に降り注いでいた。

勝ったのか……? 倒したのに倒していないような、明瞭としない意識の中、やっと自分に掛かる黒い物を見てハッキリと勝ったと確信した時、言い表せられない達成感に拳を天に掲げる。

「よっしやああ!」

柄にもなく大はしやぎして、今にも小躍りしそうな気持ちの中、僕は鬼の死体に背を向けて、都市に足を向けた。

永琳は隕石が落ちてくると言った。そしてそれは多分全てを破壊し尽くしてしまうであろうほどの規模の物だろう。前の世界の地球のように長い長い冬眠期、スノーボールアースと言ったような氷河期が来るかもしれない。何より――

「この本が全て隕石でなくなっちゃうなんて勿体無いじゃないか」

僕はそう言っただけで都市内の本屋を散策、もとい強奪していた。ま、盗つても誰も困らないから別にいいよね。肉体的にも精神的にも疲れていたが、これに関しては別として苦に感じなかった。

そもそも妖怪とは、自分の欲に忠実な生き物だ。その欲に従わないと、どうなるか……は身をもって知っている。僕はもうあんな事コリゴリだ。

まあ、僕が妖力を封じるなんてバカな事しなきゃこんな事には為らずに済んだはずなんだけど……。

次はもつとうまくやろう、とそんな事を反省しながら僕は本（主）の収納魔法の魔方陣に本をポイポイ入れていく。

しかし自分でもビックリしたことに、妖力の総量が異常にあがっているのだ。もしかしたら封印していたせいで、妖力のポケットが広がったのかもしれない。分かりやすく言えば、やせ細った僕が伸びきった服を着るような感覚だ。しかし先ほどの鬼との戦闘

で予想以上堪えたのか……大部分の妖力を使っていたらしくなんだか眠いし、体が重い。

「よしこれで最後、と」

そう言つて僕は本を閉じて一度満足げに空になった店内を見渡すと、足早に店内を後にし、あの洞窟向かった。

まさか何百年も暮らしてきた洞窟にまた戻つてくるとは……。僕自身驚いているが、隕石を防げそうな場所なんてあそこ以外知らない、と言うより思い至らない。もしかしたら都市内にも核シエルターのような物があるかもしれないが、僕はそんな場所は少なくとも知らなかった。

まあ、何百年も実験し続けて張り巡らされた魔法陣に、強化魔法の数々、耐久で言つたらすでに要塞レベルではなからうか？ たぶん核が来ても大丈夫なのではなからうか……いや、さすがにそれは、汚染とかがあるから無理、だとしても兎に角、凄まじい耐久があるということだ。最後に永琳と過ごした家を見に行こうとして、止めた。

僕が暴走して壊してしまつたから、もう跡形もないだろう……。鬱にな気分になるのを堪え、トボトボと密林の中を進み、やつと目的地に着いた時には、既に夕暮れ時、僕はその底が見えない洞窟の入り口でもある穴の淵に文字を刻みながら、最後の仕上げにありつたけの妖力と魔力を流し込んだ。

「……………」

それが完了すると不意に、倒れそうになるのを必死に堪え、穴に落ちるように洞窟に入った。

最後に侵入者が居ないか確認——異常なしと……あー流石にもう限界だ。

「お休み、なさい……」

最後にそう主に言った瞬間、猛烈な睡魔に襲われて僕は意識を闇の中に落としました。

## 古代編

## 第13書 盛大な自爆

ある日の森の中、太陽は既に空の冲天の勢いで上りながら燦々とその森の中を天高い場所から照らすも、鬱蒼と茂る木々の間は薄暗く、湿った靄のような霧が立ち込めて夕暮れと勘違いしてしまいそうなほどに静寂に包まれていた。

森の先から聞こえる音はなく、時たまに吹き抜ける風で草木が鳴くくらい。生き物が存在するとは思えない静けさは恐ろしく感じるほどに平坦だった。

感じた通り、周辺には動物の気配は全くない。

そしてこの様な薄暗いような場所を好む妖怪と言った物の怪の類の姿も見えないせいか、そこは近所の村人からはそれが、逆に気味が悪いと専らの噂と為っていた。

月日が経ち、何時からか、その森には色づいた瘴気が立ち込み始めるようになった。それは何が原因かは全く不明であり、周辺の動物達が数を減らし始めたのはその頃からだった。

生ある生き物は徐々にその場から何処かに去って行き、生き物が寄り付かないせい  
か、そこは不思議な場所として、何よりその森から漏れる瘴気が人に害があるものだっ  
た故か、何時の日からか、それは魔物さえも寄り付かない。

安直ながらも『魔境の森』と村人から畏れられるようとなつたのだ。

しかしながらそんな不可解な物が手が届く距離——とは言わないが、近隣に在るとし  
たら人が不安を懐くのも至って自然であり、それを解決するために動くのもまた道理で  
あろう。

つまり何が言いたいのか。その不安な気持ちをお願いとして聞き届けた。今この時、瘴  
気が充満する森の上空には一人の——いや一柱の神が佇んでいた。

容姿は誰も見惚れるであろうほど整っており、上空にいる為か、風が強く靡くも、彼  
女は悠然に空の足場に立ち、そのふんわりとした青紫色の髪が頬を撫でる。

背には何の用途に使うのか不明だが、注連縄を巻いたような物が括り付けてあり、そ  
の豊満とも言える胸元には、鏡が飾り付けてあった。それは日の光を受け反射して、ま  
るでそれ自体が発光しているように、光輝いて自然と感じる威厳の様は彼女自身がまさ  
にこの世の者ではない。幻想的など言つた印象を受ける。

しかしそのような悠然としている彼女であろうと、その表情には少なくない憂鬱とし

た陰りが見える。

森を眺める彼女の目は、その森から立ち昇る瘴気を見る毎に、陰りを帯び、ふう……と口元に手を当て妖艶に息を吐く様は、正に恋に悩む乙女の如く、彼女の吐いた小さなその溜息は厳しい心中を表していた。

「あー……メンドクサイ」

そう呟くと同時に彼女から感じる威厳が少なくとも薄れたような気がした。

あーもう！ と自身の髪をがしがしと搔くのは彼女であり、まるで先ほどまでであった威厳のい、さえ感じさせない姿だった。

どうやらこちらが彼女の素らしく、彼女は一通り自分の中でなにかと葛藤する様子を見せるも、ゆっくりとその森の中に入って行つた、という事は少なくとも用事を済ませる事にしたようだった。

そもそも彼女自身なぜこの様な森に来たかと言うと、偶々村の村人達が彼女を深く信仰する村人であつた為だった。

その村人達はこの森から漂う瘴気からか、体調を崩す者が増え、それをどうにかしようとする村人総出で祈祷をし、信仰を捧げたのだ。

その深い信仰心を受け取つた彼女は、その願いを無下に断る訳にも行かず、今こうし

て森の中、瘴気が立ち込め、森の中では視界が悪いためか、空から大体当たりを付けその場所を探している訳なのだが……。

「……本当に気味が悪い森ね……」

整った顔を歪ませ、吐き捨てるように呟く彼女は、忌々しげであり、まさに不機嫌であつた。

どこから出したのか、巨大な木の柱をぶんぶんと振り回しながら、邪魔な木々を片つ端から吹き飛ばしていった。

「……………」

これだけ暴れても、それ以外物音一つしないのだから、まさに魔境と言うべきか。最早生き物の影すらない森で彼女は不安と不満が腹の奥底に溜まっていく気がした。

「さっさと終わらして帰ろう……」

呟きと共に彼女が振り回していた柱はピタリと動きを止め、同時に彼女の足も止まつた。

「ふうん……」

彼女の視線の先に在るのは一つの小さな穴。しかしそれは明らかに普通の穴ではなく、その穴からは際限なく闇色の靄とも霧とも似つかない禍々しい何か吹き出していた。

彼女がそれに最大限までの警戒を持ちえながら近づき、その深い淵を覗くも、見えるものはやはり何も無い。

「——強力な結界、か？ 見た事も聞いた事もない形だが……何か封印されて、抑えきれなくなったその影響で瘴気が……？」

繁々と観察しているとその穴の縁には不思議な文字が刻み込まれ、彼女には感じた事がない力の片鱗を感じる事が出来た。

「ふむふむ……なるほど……わからん」

彼女はしばらくその文字を解読しようと試みたが、自分の知っている言語とは全くかけ離れたもので、相当昔に刻まれたモノなのか、霞んでなんと書いてあるか分からないがすぐ側に書いてある文字は少なくとも自分達が使う言語に近いという印象を受けた。

「わ、我……？ いずる時、目覚めん……？ 知らんがな」

やはりよく分からないモノであつたが、少なくとも何かがある事は確かだと解釈する事は出来た。

という事はこれだけ周りに影響を与える奴だ。相当昔だろうが大暴れした妖怪なら記憶にありそうなモノだが、封印なんぞした事がない彼女にはどれも記憶に当てはまる人妖は少なくとも一人としていなかった。

ここに封印されているの妖怪か、それともそれに準ずる何かか……。

考えるも、突然止め止めと言った様子で彼女は首を左右に振り、考えを振り払った。そう、すでにここに来た時点で自分のやることは決まっているのだ。

無言で右手を天に掲げると、同時にその手には不可視の力が集まり、暴風にも似た力に余波により木々の草木が吹き飛ばれていく、それは収束と、凝縮を繰り返し、風が止むと彼女の手の平には青紫色の光球が浮いていた。

ぽいつと彼女はその球を穴に投げ込むと、同時にかなりの勢いで後方へと下がった。一時の静寂が森を包む中。

破った爆音に事前に耳を塞いでいた彼女は何か事なきを得ていた。

音で地を揺らす激震に、地響きと共に穴から吹き上がったのは天を貫かんばかりの竜巻だった。

竜巻は周囲の瘴気を吸い込み、集めていく。そして、森全体から集まったと思われる黒々に凝縮された瘴気が作り出した穢れの塊に、彼女は神力で作り出した柱を気合の下に投げつけた。

「はあああああー！」

天を突く竜巻と、その膨大な量の力に内包された柱がぶつかり合った瞬間、眩しい光が周囲を包み、薄つすらと目を開けると、既に瘴気も竜巻も消え失せていた。森は元の平穩の姿を取り戻した事に一息付くと同時に、穴に視線を向けた彼女に瞬時に悪寒が

走った。

そこには一人の少年がいた。

(こんな所になぜ子供が、村人の子供か?)

しかしその考えはすぐに間違えたと気づく。少年から感じるは微弱ながらもそれは妖怪として妖力だった。

少年の姿も、今の時代からは考えられない灰色の着物に、足には鎖を巻きつけ、それを目で辿ると腰には紙の束と思われる書が携えられていた。

そして少年の顔にはどこか生気がなく、髪はこの大陸の者達と同じような漆黒の黒髪だった。その目はこの地域の者ではない黒目ではなく、灰色だった。

だが、彼女はそんな違和感に目を向けず、視線をある一方向を指していた。

袖から僅かに覗く四肢、相当ぶかぶかの服なのであろう、と思いかけて、その袖から覗いた指は黒いなか蠢いていた事に背筋にヒヤツとしたモノが流れた。

——不気味だ。彼女は一目でそう感じ取り、警戒態勢に入る。

しかし少年はその様子を横目でチラと見ただけで、顔を背けどこを見ているか分からない瞳は、空の虚空を見つめるばかりで二人の間には言葉などなく、空白の時間がこの場を支配する。

『……………』

何故、私はこんな奴にこんなに警戒しているのだ？ 不意に彼女にそんな考えが浮かぶ、たしかにそうだ。少年から感じる力は微弱なもので小妖怪でさえ彼に勝つてしまいうようなレベルである。ならなぜ私はこんなに警戒しているのだ？

そう疑問が沸くも微動だにしない少年を見て、思わず齒噛みする。

そもそも彼女は今日に限って、機嫌が悪くあまりこの願いにも乗り気ではない気分で、しかもこんな辛気くさい場所に来たのに、そこにいた一人の子供に、尻込みする自分自身にイラ立ちが募る中、ソレが限界に達しようとした時、その姿相応であろう可愛らしい鈴のような声が、森に溶けるように響く。

「——本、読ま、ないと……読む、読む読む、何を？ 決まってる本だよ、何？ というか、どこ——知らない。分からないよ……あああ……読みたい——早く、早く——」

まだ続く少年の言葉に彼女は思わず面を食らった。

勿論少年の周りには何もなく、それが独り言だと分かる。だがまだ少年は一人で喋り続けているもその声には、一切の感情すら含まれて居らず、見ただけでその存在が危うい、と感じさせる。

封印された妖怪が自由になると、一時暴走状態になるということはザラにあることだが、それとは違う危なさをこの時彼女は感じていた。知らず知らずのうちに、額から汗が滲んだ。

「な、なあ、お前さん」

そこで思わず彼女は少年に声をかけてしまった。

それが聞こえたのか、少年の独り言がぴたりと止み、その虚ろな灰色の目に、彼女の姿を映すと同時に、少年の顔が歪みその目には悲哀の感情が爆発し、涙がせりあがって行く。

「——お姉さんも、僕のことを邪魔するの……？　僕、は、本を読みたい、だけなのに——」

少年は零れんばかりに、その目には涙を湛え、嗚咽を吐き出すと、一緒に言葉を吐き出した。最初はなにかの演技かと、彼女は疑ったがその潤む目には真偽の余地もないほどに本が読めないことを悲しんでいるように見えた。

その姿に彼女は面を食らい、如何するべきかとオロオロと視線アツチこつちに、彷徨うも勿論視界には助けになる物は何も映らず、目の前に視線を移すと何時の間にか少年は彼女の裾を掴み、鼻をずすと鳴らしながらその愛らしい顔は涙で歪ませていた。

この少年に過去に何が逢ったか知らない彼女だったが、こんな風になるまでに、その昔に何か辛い事があったのだと痛まれない気持ちになつた。

彼女はその姿を見て、無意識のうち胸に湧くは情の感情に体を任せ、少年に目線を合わせるために、腰を落とし、ぎゅつと抱きしめ、漏れる嗚咽を落ち着かせるように背を

宥めると、少年は次第に落ち着きを取り戻していった。

「——大丈夫よ、安心して私は貴方の邪魔なんてしてないから、好きだけ本を読みなさい？」

自分でも気づかないうちに、そう彼女は耳元で少年に囁き、少年はそれに鼻水を自分の袖で吸いながらうんと頷くと同時にぱつと顔を笑顔で輝かせて彼女から離れる。

あつ、と心なしか洩るような声に彼女は無意識に上げた声に赤面をしているとそれに気づいていないのか少年が元氣よく両腕でバンザイしながら言う。

「じゃあお姉さんに聞きたいんだけど近くで静かな場所知らない？」

「——あ、ああ、それだったら——」

と余りの少年の変わり身の速さに動揺しながらもこの先に静かな広場があると伝えるとき、彼女が止める間もなく、少年は元氣よく走り出し、藪の中に入ろうとした時に一度こちらに振り向きぶんぶん千切れんばかりに振られる腕を見て彼女は思わず目を疑う。少年の腕はよく見たらそれは腕ではなく、黒い何かが蠢く『モノ』だった。それに面を食らい、それでも少年それに気づいていないらしく、元氣よく手を振る少年に彼女は手首だけで軽く手を振るうと少年は満足したのか。その姿はすぐに藪中に消える。

「あの子は一体……」

独白する彼女はしばらくその場から動けず、周囲が暗闇に包まれるまでずっと少年が

消えた藪の中を見つめていた。

◆ 気を失って目覚めた時、始めに感じた感触は岩のごつごつとした質感と、肌から骨髄まで水に浸かったような寒さだった。

さむっ、さむ！ 驚きのあまり魔法を使う事すら忘れて思わずパーカの中に手足ごと頭まで突っ込んで暫し厳しい寒波に耐え忍んでところ、やっと火を付ける手段を思いついた。

閉鎖空間での火の用途。と思いついて、発動しかけた魔法を取りやめて保温に切り替えて魔術を発動させ、包まってるから暫く……何とか平静に思考できるまでに回復できた。

「うう……やっぱ、僕の予想は当たってた？」

スノーボールアース、この寒さはそうとしか思えない。今頃見渡せる限りの地表が雪に覆われている事だろう。今さっき感じていた寒さ、表ししたら明らかに今まで地上で暮らして感じてきた低温のマイナスメータを全力で振り切ったの更新であろう。

……今外に出てはヤバイ。そんな事は考えなくとも分かる。

「……どうしようか……」

概ねの不安の理由としては何時までこの状況が続くかが分からない。脳内で歴史を

振り返ろうと思うならば、この大極寒が終わる時期が実に曖昧な事がすぐにわかる。それに、一度張った魔法陣が永久的に発動しない事も今後の問題だった。

「うわあ……もう殆どの奴がぼろぼろじゃん……」

防護系から隠密、探査ともろもろの結界に至るまで、文字通り決壊寸前。恐る恐る指で触れると、止まっていた時間が進んだように刻まれた紋が急速に色を失って消失した事に、想像以上に地表にぶつかった衝撃が大きかったらしいく、ギリギリで耐え忍んでいた事が僕でも理解できた。……少しでも、後ちよつとでも掛けていた魔術が少なかったら、考えただけでもぶるつと震えがきた。

……この様子だと上はもつと大変なんだろうなーと、考えを切り替えながら、ふと自然な仕草で——本を取り出して読み始めた。

——よくよく考えれば外に出ても大してメリツトを感じないし……と言うか寒いのが苦手な僕の本音としては今外へ積極的に出ようとは思わなかった。

「んー前はこれ読んだし……今日はこれ読んでみよつかない」

そう能天気には僕は書かれた文字列を目線で追って行った。

安全な空間、一睡もせず本を読み漁っていた顔を上げて、天井と表す一筋の出口にふと見上げたのは何時だっただろうか——僕は気づいた、いや、気づいてしまった。

「あれ……これ、って」

七色の光に照らされた洞窟内、ある一角だけが覆うように真っ黒なボールが落とされ  
ていた。

気づけば唯一の水源である湧き水が氷解していた。これは氷河期が去った予兆では  
？ そう思つて確認しようと思つて蓋を外そうと片手をかざした。

「？」

違和感に気づいたのはその頃だったか、握つた手のひらに手ごたえはなく、振つた手  
の先にはなんら変化の予兆すら見られない。

「……あ、え？」

ただだと服にシミを作り始めた汗に焦りを感じて何度も、何度も魔術を行使し続け  
た。

「はあはあッ、は……嘘でしょ……解除出来ない……う？」

そ、そうだ……何なら水路から出ればいいじゃないか！ 服が濡れるのは不快だが今  
はそんな事を気にしている暇はない。

よろよろと水面に近づき、波紋を作つた水面を見て息に喉が詰まった。

「——ちくしょう！ 何で、障壁じゃなくて結界を張つたんだ。しかもこいつは……」

直に触れて分かつた。元の術式に込められたそれは一枚の壁ではなく重なつてより

厚みを増した壁が僕の自由を阻んでいた。

「3重境界……は、はは。よくも考えずにこんなもん張つたな僕は……」

そもそも朦朧とした意識で書いた術式が合っている筈もなく、その弊害はと言うと内部からの術式への干渉は一切不可能に加え、異常なほどの力を注ぎ込んだ事による本来の能力を超えた、状況が状況でなければよかつた強固さが僕をより苦しめる。

「つかなんだよこれ、こんなん張れるなら鬼と戦うときにでもやれば楽に勝てただろ。今更出来るって……アホか。てか今になつて思い出したけど僕って妖力と魔力の併用的な使い方つて絶望的に下手糞な筈なんだけど、出来るにしても遅すぎるわ。てか硬すぎんだろこれ、僕がこんなんやるとかまじありえんわーハツハツハ……」

「……ふざけんな——!!」

え? 何? 自分の魔術で窮地に落ちるつて笑い話にもならないんですけど?  
殴つても殴つても——つかマジカッテエー!

「おおおおおお落ち着け俺! ま、ままだ全然大丈夫、よゆうよゆう僕なら出れる、デレルでれる出れるでれる……」

……ぶつぶつぶつぶつ。

「ぶつ——ハ」

八方塞がり、あーこんな状態の事なんて言うんだっけか。ああ、思い出した思い出し

た。

すっかり投げ出した体勢で思い出した言葉を呟いた。

「……………かゆ……………うま……………」

一先ず……………寝るか。直視出来ない現実を目を背けようと僕は瞼を閉じた。

——勿論、目が覚めて始めに見た物は、依然と変わらず僕を塞ぐ何重の壁だった。

あれから……………何百年経ったかな、今日も今日とて長い一日になるだろうな、とすっかり根暗根性丸出しの考えから一転。

「ん……………」

感じた異変に僕はすぐに気づいた。

「風が、変わった。それに上にも……………何か、いる?」

僕がいる場所は極端に生き物が少なく、そのせいで生物に対する反応が過剰になっていたおかげとも言うべきか、すぐ呟いた言葉に確証が持てた。生き物がいなくなつた理由、その原因の一端……………と言うか全部僕が悪いのだが、脱出する為に色々試した魔術が周辺の、様子は分からないが環境を汚染していると思われるから。

「結界の容量を超えれば何かが起こるって思ったんだけど」

頭を掻いて上を見上げるが、まあそんな簡単に破れるものではなく予想通り、不発に

終わったんですけどね。

「はあー、しかもこの感じ……神か」

計った限りじゃ力はそこそこ、そして何やら険しい気配が伝わって来たが、「ハッ、どうせならここら周辺を破壊してくれればいいのに」

小音の破壊音にガツカリして物騒な願望を願うもそれもすぐ止んだ事に言い表せないほどの失望感に加えて、どうしようもない絶望感にどうにか振り払おうとかぶりを振った。

この何百年間、僕は努力の限りを尽くし続けた。が、結果はどれも駄目。

前向きだった気持ちも次第に後ろ向きに変わり、……気づけば焦りのあまり下級の魔術すら初歩的なミスをするほどに落ちて、落ちて。

「魔法ってなんだっけ……」

自分が分からなくなっていた。

妖怪は決して脆くはない。それは人間と比べたら体も強靱だし、心も強い。だけど――僕は元は人間だ。それが今の状況で痛いほど分かった。

孤独のあまり独り言が多くなった。最初は、寂しさを紛らわすそれが次第に虚しくなつて……気が狂いそうだ。

「くっそ……見失うな、僕は、僕はまだ死ねないああ、まだ本があるじゃないか……まだ、

まだ」

思わず呟いた言葉に、最近思い始めた思考が介入してくる。

（本の内容は無限なのか？ それとも有限、終わりある限られたモノなのだろうか？）

黒く染まった教本が、今の僕には頼り気なく見えた。

本質を見失った妖怪の迫る道は単純な肉体の破滅。それは例外もなく僕の肉体も含むだろう。この場所に居ても今までは大して危機感を懐かなかった、考えすらしなかったが次第に募り始めた不安が焦りの気持ちに拍車を掛けていた。

それに、どのみちこのままでは僕が精神が危ぶまれた。

——ポトン

「……次は何だ」

投げやりになった思考に振り回されながら、抱えていた顔を上げた。

上から落ちて来たと思われる球体のそれに込められた神力に目を瞬かせると、数秒の静寂の後、一転してギョツとした。放った神が雑な性格なのだろうか、込め切れなく漏れ出した神気が考えなくともその危険性が嫌にでも伝わってきた。

「——」

反射的に逃げようと体が動いたが、そもそも密室の空間では逃げ場なんてない。

思考の硬直、数瞬でしかない時間が仇となった。

「まずっ」

眩い光に目も開けられず、薄目を開くと同時に襲つたのは打ちつける様な暴風。時間が引き延ばされた感覚に目を見開き、考えずとも本能的に体が前へと動いていた。

爆音が鳴った。

だが僕はそんな些細な事に見向きもせず、ただ天井の一点を睨み付けた。右手が手とは別に、瞬時に鋭利な棘となつて鋭さが増していく。吹き飛ばされ、神速の速さを超えた事に精神より体が悲鳴を上げ始めた。軋む骨にぐら付くのを歯を食い縛つて耐える。

ヒュ——ン、空気の壁を貫いた槍が一瞬にして天上へと到達する。

ぶち当たつた一点に対して結界は瞬時に色濃い反発の色を示した。

（早く——速く！）

背後から迫ってくる暴虐の風が凄まじい勢いで迫っているのが摩擦で焼けた肌からチリチリと焦りを懐かせる。——まだ結界は残っていた。

風が足元に達し、少しづつ身を削り始めた時、急速な変化に目を覆った。

「——わ、わ、うあ……！」

視界が開けた時、真上にあつた水色が見えた。次にそれを覆う白から、照らされる緑と目まぐるしく色を追つて行つた。自分が落ちている事すら忘れ、久々に見た外の景色

に見惚れていた。

使えなかつた魔術への悩みと溜まりに溜まつた苦悩の一瞬で吹き飛んだ気がした、その時は。

——気づけば、何故か神様に抱きしめられていた。何でこうなつたし。

呆然としている僕に、神は自由に本を読んでいいとか言っているが。そう言えば天気がよくつたから本読みたいなーとか考えが口から出たのかもしれない。

……よく考えもせず外に出た感動のあまり、泣いた興奮から他に何か口走つた気もするが……そのせいで何だか勘違いをさせているような気がするけど、そんな事よりもこの状況が僕には凄まじく恥ずかしかった。

そもそもこの人（神だけ）とは初対面である。何をトチ狂つて僕は黙つて抱きしめられてるんだ。

いや、別に気分としては悪くはないんですけど、つて違う違う。僕は、そう、これが原因で気まずい空気になる前にさっさと立ち去ろう、うんそうしよう。

そう考えが纏まり、よくよく思い返すと行き先を決めていない事に気づき、聞くと神はさつと教えてくれた。この神さま、僕が妖怪つて気づいてる筈なんだけど……書と事実は大分食い違つてるのか？ 兎も角、存外目の前にいる神は親切心に溢れていたことにこの時ばかりは感謝した。

その意味も込めて、立ち去る前に手を振った訳だが、相手の顔には戸惑いの色が濃く見えた。

一瞬、嫌われたかも、と不安な気持ちになったが振り返された事に安堵して次こそ、足早に林の中に駆け込んだ。

「あ……抱きしめられたと言っても不可抗力だから別にセクハラ、とかじゃないよな……？」

呟いた台詞に背筋が凍る寒気を感じ、僕はそこから更に歩く速度を上げて考えを何とか追い払った。

## 第14書 予兆休憩

お世辞にも高いとは言えない山の傾斜、緩やかに覆つて広がる大小様々な木々の間に隠れるよう、一軒の小屋が存在した。

強風が吹けばぐら付きそうな木材たちは寄り固められ、何とか耐えしのんでいた。——到底、人が住んでいるとは思えない古屋だけに、周囲は荒れ果ていていると思いきや、驚くことに草木は丁寧に剪定され裏手の獣道でさえ綺麗に整つていた。

人が住むにはあまりに人里から離れた位置にある古屋に、不自然にも整頓されたそこは見るもの全員がはて、と疑問に首を傾げるだろう。

そして次に思い浮かべる事は必ず、決まっている。

『一体誰が住んでいるのだろうか?』

キィ、と短い木々の悲鳴の後、一つの影が扉の奥から現れた。

「ん……はあ——」

降り注ぐ光に反射して見えた影と聞こえた声は幼い少女を思わせる。ゆつくりと伸びをして突き上げた腕は短く、先を突いた拳は凶暴、と言うよりも可愛らしい印象を受

ける。

その小柄な体系が暗がりから出て切った時、やっとその姿が鮮明に見られた。

赤と黒が混ざり合ったチェックのワンピースと思われる服装。スカートから生えるほっそりと、瑞々しい長い下肢から子供らしい丸いひざ小僧の下にはつんと付いた裸足が覗く。

ほんのりと赤みがかった健康的な肌にくるんと跳ねたライトグリーンの髪からは勝ち気そうな瞳が少女から活発的な印象を受ける。

全体的に華奢な風体に、片手には水汲みとバケツトのようなモノが一緒に入れられていた。

少女は空を見上げ、眩しさから遮った指の先からそつと快晴の空を確認すると、口元に笑みを象り、軽い足取りで裏手の獣道に入ってしまった。

清涼とした川辺に緑髪の少女、風見幽香は満喫気分で水を汲んでいた。

「はあー今日もいい天気ねえ」

花好きであり、花妖怪でもある彼女からしたら、雲一つない今日は最高の曜日だった。

チャポチャポと音を鳴らす桶を軽く片手で持ち上げながら、軽快な足取りで生い茂る葉っぱから滴る光のアーチを潜りながら、幽香は上を見上げてふふん、と満足げに鼻を

鳴らした。

幽香が向かったには花妖怪の名に負けないほどの色とりどりの花々が咲き誇っていた。どれもが最良の状態を保って花たちは満開の花びらを広げて彼女の帰りを迎えた。

少女は微笑を浮かべると、早速水やりに取り掛かった。

彼女の、幽香の一日は中々ハードな労働から始まる。

毎朝早朝には彼女だけの庭園に足を運ばなければならぬし、水場が若干花畑から離れている為往復も重労働だ。何より一つ一つの花たちの状態をチェックするのも幽香の仕事であり、日課であつた事からも由来する。

——これほどの手のかかる世話など、よほど花好きでなければこなせないだろう。

しかし幽香は特に苦も感じずに花たちの世話をこなす。疲労の様子など見せず、どちらかと言うと家を飛び出した時より活き活きとしているように見える。

「お花さんお花さん、今日の調子はどうですか？」

暖かい陽気に当てられ、眠気の混じつた間延びした声に反応を示したとも取れる動きで茎が揺れた。彼女は微笑を浮かべるとすると横にずれて続いて他の花たちにも質問を投げかけた。

……庭園の端で浮き上がった汗を拭つたのは、既に昼を過ぎてすぐの頃だった。少女は深く空気を吸い込むとそのまま吐き出した。

「……うん、今日もみんな元気！」

周囲を見渡して快活にそう言うのと軽い足取りで摘まれた花が入れられたバケツトとスツカリ空になった桶を持ち上げて辿った道を戻ろうとした際『ああ』、と思い出したように足を止めた。

「……」

その視線を追うと、花畑から少し離れた場所に周囲の木々とは離れて一際巨大な木が居座っていた。

幽香は自分の顔が僅かに強張るのを感じ取ると、マーサツジの要領で揉み解して硬さが取れたところで巨木へと続く道へ足を進めた。

太陽はまだ中天を少し過ぎた頃の筈、幽香は頭の中でそう何度も反芻して周辺の沈鬱とした雰囲気をつらわそうと試みたが成果はあまり芳しくない。道を入れてから数分として経っていない訳だが、鬱蒼とした木々たちが光を遮って、聳え立つ巨木がより夜にも似た帳（とぼり）を落とす引き立て役になっていた。

こればかりはしようがない。

彼女は諦め混じりの息を吐くとせめて数秒でも早く着くように足を速めた。その願いに答えた訳ではあるまいが、数秒して目的の場所へと到着した。

「は——」

長めの呼吸に、毎度の事ながら地面に力強く根付く古代の樹に感嘆のため息を吐いた。

命の息吹とでも表そうか、幹の表面張り付いた苔は大樹に貫禄のようなモノを与え、視界に収まり切らない程の大木の棒から連なつて手を広げる細枝は光を受けて葉の細部まで煌き、神々しいという思いを懐かせる。

何時までも見ていられそうな光景に彼女は見上げていた視線を巨木を辿つて下にずらして行き、その根元。目を凝らさなければ樹の一部だと見間違えてしまいそうな、明らかに樹とは異なつた異物へと目を向けた。

これも毎度の事ながらよく見れば、子供と思える体躯の輪郭が幽香にはハッキリと確認できた。服と思える灰色の布地にはコケと姿を隠すかのようにツタが張られ、子供の表情と言えば鼻先から下側が見えるだけに止まり、それより上は被せられた布に隠されて把握できない。

それを見て彼女は自分が緊張をしている事を自覚しながら慎重な足取りで近づくと、あと数歩で手が届くと言う距離で足を止め、彼女は葉の天然クツシヨンに腰を下ろした。

より近づいた事で明確に子供の姿が見えた訳だが、分かる事と言えばあまり変わらぬ、子供は少年であつた事と、両手には開かれた状態で彼女が知らぬ本、と言うモノが

乗っていたという事だけだった。

「ここに変化はあった？」

呟いた言葉に共鳴してか、少年の側に生えていた花の茎がふらつと揺らぐ。

『なにもない。けど、……あ、そういうえばまた笑ってた』伝わってきた念に礼を述べると幽香は見えない相手の瞳へと視線を合わせる。少年は微動だにしない。

彼女は摘んできた花を束に合わせ、そつと少年の前に差し出し、無言で目を瞑って手を合わせた。

視界のシャツドダウン。彼女の脳裏にふつと浮かんできた情景は過去の物だった。

人間、動物は共に、自身の居場所（テリトリー）と言うものがある。人間であれば寄り固まったソレを村と言い。獣であれば、群れという。

更に規模を縮小するならばそれは自室部屋だったり、はたまた荒れた洞窟内かもしれないが、それは妖怪も同じでお互いに分を弁えた。大きく分けるとするならば管理する側と、される側と分かれていた。

そしてこの山も前までは、何処と変わらずにそれを守り、山の頂点が存在していた。

昔の彼女の庭園は小さくとも荒廃した地表に咲く一輪の花のよう、規模は小さくともその頃の少女は自分が作った一人だけの庭に満足していた。

この日も、花たちの世話を終えてきて帰ろうかと思つていた時だった。重低音の唸り声、はつと聞こえた方向を見ると、暗がりの先にイノシシとも狼とも言える妖怪がこちらを睨んでいた。

——彼女は一目見ただけで知らない妖怪ではないと気づいた。

それはこの山の主であつた。幽香とその管理者は、この時決して仲の良い間柄と言うわけではなかつた。

しかし、幽香は何も無断でこの場所に住んでいるわけではない。この様な場所に隠れ住むのは育てた花たちを荒らされないようにする為、出来るだけ周囲の妖怪に目をつけられないように、認められなくとも分を弁えた行動を取つていた。それだからこそ、頂点である山の主の急な来訪に驚きと緊張からの逡巡の間、彼女は挨拶をすべきか迷つた結果、震える体をいさめて口を開きかけた。

「……あ、こん——」

そこで初めて、彼女はまともに視線を合わせた。

数度しか顔を合わせなくとも気づくほどに、妖怪の野獣の瞳に籠つた敵意に彼女は理解することできた。その予想が的中したとおりに、地を蹴つて野獣は幽香目がけて飛びかかつた。

「きゃッ」

引き攀った悲鳴が上がった。

戦い慣れていない彼女は反射的に頭を抱える防御の姿勢を取る事で、しゃがんで突き出た妖怪の牙をかわした。

傍を通り抜けた風斬り音に続いて轟音が轟き、バキバキと木が折れる破壊音が耳を打った。

大木が倒れた衝撃の地揺れで竦んだ足に自由が利かず、自失呆然と次の突進に後ろ足を掻く妖怪を眺めた。

なんで――

疑問が頭を埋める中で、必死にこうなった原因を見出そうとしていた。

妖怪の突き出た牙と同じく、野獣の眼球は数センチ前へと押し上げられていた。常時開かれた口と鼻から際限なく垂れ落ちる液体で、彼女は明らかに管理者だった主が――既に正気を保っていない事に気づくことが出来た。

駆け出した妖怪に、彼女は迫る形相から目をそむけるように体を丸めた。

「……………」

一向に訪れない痛みに、おそろおそろ顔を上げた彼女が見たものは、木のツタに絡められ絶叫を引き連れて森の奥に消えた妖怪の姿だった。

そして、震える足取りで辿りついた先にあつたのが、大樹の根元で目を瞑っている子

供と、気が失せた状態で縛られた妖怪の干物だった。

すーっと薄く開いた瞳で、幽香は目線で目の前の少年にたずねた。

貴方は誰……？ 何であの時私を助けてくれたの？ 何で寝ているわけでもないのに目を瞑っているの？ ——なんで、こんなところで一人で居るの？

幾ら時間が経とうとも、少年は彼女の問いに答える事はなかった。それでも諦めずに、張られた糸が切れないよう、沈黙を保って直視し続けた結果、彼女が漸く得られた反応は、パラ……と紙を捲る効果音だけだった。

「はあ……」

きんちよーして損した。……動けるんだった何か一言くらいしなさいよ！

真剣になっていた自分が途端に馬鹿らしくなり、彼女はもやもやと胸の中で渦巻く考えをため息と一緒に吐き出した。

「もしかして神様、とかじゃないかあ……さすがに」

ちらりと視線を配った幽香には、木に寄り掛かって何かをしている少年が、神などの高尚な存在にはどうがんばっても思えなかった。

どちらかと言えば、妖怪の村から逃げ出した子供か。親に捨てられて居場所を失った妖怪にしか見えなかった。

こうしてあの日、命を助けてくれたお礼として毎日欠かさず摘んだ花を納めてきた

が、それも今日で潮時かもしれない。

そもそもお礼を強制されていた訳ではないのだ、今更自分がそれを止めたとして何か変わるだろうか。

「……今日でお別れ、ね」

そつと呟いて尾を引く未練を断ち切るよう手荷物を握って立ち上がった。

立ち去る途中、不意に、勢いをつけて振り返ってみた。

そう、よね……。

反応のない少年を見て、最後ののだからと幽香は懐いていた少々期待が淡く消えていく失望感を胸の内までに抑えた。

幽香は次第に足早なる森を走っていた時に、声を聞いた気がした。

——近づくな。

彼女は、振り返ることなく家への扉を開け放った。

## 第15書 境

「おい、あの噂知ってるかよ？」

「ん？ 噂って？」

とある質素な村の中で、表通路は横行が激しく商売で人々が賑わいを見せる昼下がりに。

通り人を呼びとめ、呼び込む声が呼びかう中央通りからそこより幾分か離れた建物の影になるように、壮年の男が若い男を呼び止めた。

「なんだ知らねえのか？ あれだ、山ん中にある花畑にいる大妖怪の噂だ」

「あー、それだったら知ってるよ。確か昔からあそこに住んでたらしいけど、最近じゃ村まで襲ってくるんじゃないかって近隣の族長達が話し合ってるっていう、あれだろ？」

「あん？ なんだ知ってたのかよ」

声が聞こえるのは家、というには些か質素すぎるであろう位置の裏手、家としてではなく農具入れとして使われている場所だった。

柔和な笑みを浮かべる若者と言えるほどの男が一人、それとは対象的ないかにも頑固

親父と言つた風体の厳しそうな男だ。

頑固そうな男は若者の言葉を聞くと、あからさまに落胆したように顔を下げても、すぐにその暑苦しい顔を上げ、若者に耳打ちをするようにそれを近づける。

男は顔を喜色にはらんだモノへと変え、だげどよと言葉を続ける。

「そこに住んでるつつう妖怪つてのは、どうやら花の妖怪らしくつてよ。つい最近、つても数十年も前の話だがよ、そいつは人が其処に近づいても花に害さえ与えなければ、人を襲うことなんて滅多になかったらしんだがよ。最近じゃ近づいただけで殺されちまう奴まで出やがる。だからよ、噂では専ら宝を守つてるなんて言われてな……」

「宝!？」

「おい! 声がでけえ!」

驚きのあまり声を上げる若者を咎める様に拳骨を一つ落とす、男は目を鋭くして周囲に目を配つて誰も気づいていないことを知ると、ほつと息を吐いた。

そのまま怨めしそうに向けられた視線を、

若者は、たははと苦笑いで答え、手を後頭部に当てすまないと言謝つた。

男はそれの態度に又も目に険を宿したものの、この若者は何時もこうなのだろう。直に諦めたように再度息を吐き、何度も周囲に目をやりながら、声のトーンを幾分か落として話を続ける。

「実はよ、この話はここ最近、この村にきた風変わり旅人に聞いた話でな。そいつと偶然酒の席で一つ酌をした時間聞いた話でな。その宝つてのがよ、四角い、黒い箱のようなものだそうだ」

「箱？ でもなんでそんなのが宝なんだよ？」

「まあ最後まで聞け。……偶然にも旅の途中でソイツがああ山の中で迷つてな。そんで行き着いた先がああの大妖の花畑だったそうだ。」

近隣で有名な話だったもんで、偶然姿は見えなかったにしろ奴も直その場から逃げようとしたんだと、でも、ある一方を見るとその足が止まっちゃまってあるのモノに目が行っちゃった」

若者は男の話に引き込まれるように話の続きを促すも、男はもったいぶりながら。

「何でもその日は月があまり出てなかったらしくてな、そんで真つ暗なもんでそいつは焦つてな、大きな物音を立てちゃまって」

「ああ！ もう前置きはいいからさつきと言ってくれ！」

「おお、悪い悪い。……それでよ、そいつは絶体絶命のピンチって時に、暗闇の中でホタルの光を見たらしい」

「ホタル……？ でもそれって宝と何が関係あんだよ？」

「旅人もそう思ったさ。でもな？ それはよくよく目を凝らすと、七色に光る玉だった

そうなんだ。近づいて見てみると、そこには黒い箱が置かれていたらしい。

その宝は、薄雲から覗く月の光を浴びるたんびに色を変えて、それは綺麗だったんだとよ。

思わずそいつも見とれちまって暫く其処から動けず、雲が月を隠すと同時に気がついてすぐその場から逃げたんだとよ。それで、だ——」

声を切った男の顔は興奮のためか上気しており、より暑苦しさが増した顔を若者に近づけて、俺達もそれを見にいかねえか？ と誘いをかけた。

「ふ……むう」

若者は男より冷静さを保ちながら、僅かに逡巡するも、諦めたように首を振り、いや、俺は止めとくよ、と言って不満を漏らそうとした男に向かって言葉が続ける。

「いや確かに興味はあるが、命を捨ててまで見ようとは思わないよ。それに、あの族長のことだ。この事を既に知ってるかも知れないし、何よりそんな所で勝手に俺達が行ったら、村を追い出されるかもしれないぜ？」

「……はあ……だよなあ。……畜生ッ」

本気で悔しそうに拳を握り締める男を宥めながら、若者が酒に誘って落ち込む男を連れて賑わう大通り戻っていった。

その男達が話していた屋根の上では一人の女性が優雅に藁屋根に腰掛けていた。

時代には珍しいドレスを着こなして頭には帽子のような物を被り、顔には真偽の分からぬ。何ともいえぬ笑みを浮かべてそれを隠すように、手を口元に添えていた。

「あの子がねえ……」

そう呟く女性の声が村を吹き抜ける風に攫われ、その輝く金髪がふわつと宙に巻き上がると、大通りの方では風で品物が飛ばないように必死に耐える商人達の声が悲鳴となり村中に木霊して、ふと気がつくように風が止むと同時に、その場から女性は跡形も無く消え失せていた。



ある所の小高い山腹、其処には色とりどりの花達が咲き乱れ、その中心である場所には、一人の女性が花達一つ一つを手で確かめるように手に取って様子を見て、満足げに頷く作業を何度も繰り返していた。

花達をみる女性の顔には常に慈愛に満ちた笑みを浮かべ、其処に花畑をすり抜けるように風が吹きぬける。そのクセのある新緑の髪を風がかき乱れた。

ふと気がついたように女性は顔を上げ、風が吹き抜けた一角、其処を目を向けて数秒、

いや数瞬だったかもしれない。

顔に浮かぶは確かな憂いの表情をすぐに気を取り直したように息を吐き、花達の手入れに戻る。其処には何時もと変わらない生活を送る一人の妖怪の姿があった。

「——はあ……」

そう溜息が聞こえたのは花畑から離れた一端、木製の丸テーブルと二つのイスが置かれた一つに座る幽香からのものだった。

何時ものチェック柄の服を着こなしして何時もと同じく花達の手入れを終えて休憩をしていた彼女は、空の虚空を見上げるとまた溜息を吐き出した。

その横には誰が座るのか、何故か幾分か小さい形をしたイスが置かれていた。

今の彼女の顔には確かな憂いが浮かんでおり、その視線は暫くその一角を見て離さない。その肘はテーブルに付け、その手は頬に添え、また一つ溜息を吐く。その姿は何処かの淑女かと思いい違えるほど、絵になっていた。

幽香は憂鬱だった。

何を悩むかと聞かれれば——色々と悩みはあるが大きいのはやはりあの子供のことだった。

縁を切った、と彼女はあの時、そう思っていたが。偶にだが未だに花のお供えを続けていた。

少年に最後に会ってから冬を超えては暖かい春を向かえ、暑苦しい夏が過ぎればまた冬がやって来る。その環境のサイクルは既に80を超えていたが、しかしそんな物は妖怪の彼女からしては大した時間ではない。

寧ろ短いと言つてもいいだろう。もうこれつきり、これつきりと長らく自分に言い続けて今に至っているのだが、なぜこんなに憂鬱で気分が優れないのか。

理由は、行動が不可解だと感じたためだった。自分のではない。あの少年のが、だ。

——あの子が本を閉じた。

不安なこの気持ちはその一点に向かつていた。

少年がその本を閉じて眠りにつくように動かなくなつてから少なくとも400年。初めは動くのか、目覚めるのか、何をしゃべろうかと期待したものの、それを裏切るかのように日々は過ぎていった。

期待と不安が合わさり、それが重石のように彼女にのしかかり今にも潰れそうなほどだった。だから、この数十年の間、一度もあの森には足を向けていなかった。

しかし今は彼の事ばかり気にしてもいられない。

「はあ……疲れるわね……」

急激な、最も大きな変化が今の彼女を彼への悩みと同じくらいに頭を悩ませていた。それは人妖の彼へ対する襲撃の頻度だった。

彼が眼を閉じてからか、何故か人間がよくこの花畑に迷い込むようになったり、最近  
は討伐隊まで仕向けてくる始末、そもそも幽香は自分から人間を襲ったことなど滅多に  
ない。

襲うとしても花達を傷つけたりしなければ、警告（物理）をして帰ってもらうくらい  
である。でも、最近ではそれが鬱陶しく感じ殺してしまう事もしばしば……。

「チツ……」

しかし殺す、と言つてもそれでも他の妖怪の基準は良く分からないが、幽香自身、相  
当甘いのではと考えていた。そして妖怪に至つては狂つたような奇声を上げて暴れま  
わるせいかさらに性質が悪い。

どちらの襲来も既に月に一度のペースのレベルではなく、週に一度か、この所ほぼ毎  
日それが続いていた。

その為か、安心して寝る暇がなく彼女は酷く、そう。端的に言うならば、とても不機  
嫌であった。

そのためか、突然の来訪者に対する態度もそれによつて乱雑になる訳だが、

「あら、ご機嫌様如何かしら？ 幽——」

「死ね、え、え、え、!!」

そしてなんと間が悪いことか、突然空間に黒い裂け目が出来たかと思つたらそこから

洋風の紫色のドレスを揺らす金髪の女性が現れるとその顔には真偽を悟らせない——言うなれば胡散臭い笑みを貼り付けて優雅に地に足を付け、ドレスを持ち上げて優雅に挨拶をすると同時に幽香に殴りかかられ、その強烈とも言える打撃が見事に彼女頭を打ち抜き、その体は紙の様に吹き飛んで先ほど裂けたままの空間にその体が放り込まれた。

それは一秒にも満たない一瞬の出来事で、本当に起きたかどうか目を疑うものだが、現れた女性から弾かれて落ちている帽子が更にその遣る瀬無さというのか、空しなさを感ずる光景だった。

暫くの間、花畑の中は静寂に包まれた。庭園を囲んでいた妖怪、動物共に彼女の豹変ぶりに恐れをなして逃げていく足音が聞こえる。

先ほどの出会い頭殴るという驚くべき光景を生み出した張本人である幽香は、幾分かスッキリした。と言った顔で、その額の汗をいい仕事をしたと言わんばかりに袖で拭き取る。そして——

「さて、花達の世話でもしましうかしら？」

……今日も幽香は平常運転、実に平和である。



「ちよつと花妖怪！ いきなりなにすんのよ!!」

「なによ隙間、私は花達の世話で忙しいんだから邪魔しないでくれるかしら？　ふふ、というかどうしたのその頭のコブ？　見る限りとても痛そうね。見てるだけでこちらも痛くなるから早く消えてくれないかしら？」

「あ、な、たが殴ったんじゃないか？」

「あら？　記憶にないわよ。気のせいじゃないかしら」

全く一々細かい奴、そう評しながらぎゃーぎゃー騒ぐ知り合いの妖怪を適当に受け流す。

面倒だ、と思いながらもつつい構ってしまふのは何故だろう。なんだか見ると苛めたくなるのよねコイツ、それにしても今の私はどんな顔をしているだろうか？　たぶん心底楽しい、嗜虐的な笑みを浮かべているだろう。

目の先では八雲が今にもムキーと言いついそうなほど悔しそうに地団駄を踏んでいるのを見るとそれが可笑しくて、辛うじて笑うのを堪える。数百年来の再会だと言うのに全く変わってない様子に思わず噴出しかけた。

「……なに笑ってるのよ」

「いや、何でもないわよ？」

これでも私と大して変わらないほど生きた大妖なのだから少しは身の振りと言うのを少し考えてはどうなのだろうか。と会うたびそう思うのだけれど、流星と言うべき

か、先ほどから感じる殺氣と妖力は他とは比べ物にならないほどの物。と言うよりコイツはここに何しにきたのかしら？ もしかして私の遊び相手にでもなってくれるのかしら？

「先に言っておくけど今日は戦いに来た訳じゃないわよ。貴方、一々こう言わないと無闇に襲い掛かるんだから」

「——チツ……ならなんできたのよ。できれば手短にしてもらいたいものだわ」

「……そう、なら早速いいかしら？」

言うとは何時ものように薄気味悪い笑みを浮かべ、口元を隠すように手を当てて胡散臭い雰囲気を醸し出し始めた八雲に少しばかりが苛立つ。

こう言う時のコイツの用件は何時も碌な事が無い。それにウンザリしながらも顎を縦に頷く。そうしなければこいつは帰る気はないだろうし。

「この場所に最近——いえ、貴方に何かあったかしら？」

その質問にハツとなりかけて、平静を装うと必死になる。

「——ええ、なんだか最近になって此処にくる愚か者が増えて困っているのよ。何とかならないかしら？」

少なくとも嘘は言っていない。疑っているのか……こちらの真偽を窺おうとその鋭い視線で私を睨むように見てくる。

しかもその視線には含まれるのはあからさまに此方を挑発してくるような殺気、しかしこんな物は私からしたら微風に等しいもの、悠々とそれをその視線を目で受け止めて逆に挑発をしてやる。

暫し睨み合っていると諦めたように溜息を吐く八雲にニンマリと笑いかける。しかし、突然気を取り直したようにその胡散臭い雰囲気を見つめたモノに変えた。それに私が呆気に取られている内に口を開いた。

「そう、ならその村で聞いたんだけど、黒い。七色に光る本に関して何か知らないかしら？」

「……知らないわ」

無意識に、嘘の事を口にしていた。

本？ 疑問に思ったがこれも口には出さない。

内心、分からない焦燥に何故か焦りながら辛うじて平然と受け答えが出来た。その返事を聞いてか何故かバカにしているように笑う八雲に眉根を寄せる。

「ま、言いたくないならいいですけど。ふふ、それじゃあ質問を変えましょう」

「もう、何も答えるつもりはないわ」

くるりと背を向けて、足早に家へと帰ろうとした。

コイツと話しているとやはり気分が悪くなる。

「くく、別に答えなくてもいいですわ。あの子、れいは元気がしら？」

「——は？」

その言葉を聞いた瞬間思考が止まった。れい……？ 一体誰の事を言っているか？ そんな奴聞いたこともないし、知り合いにもそんな名前の奴なんて一人もない。

「ふふ……やつぱり」

そんな私の様子を見てか、はたまたほかに理由があるのか。その顔には、なにを考えているのか分からない笑みを浮かべてこちらを挑発するように見てきていた。何時もなら受け流せるそれも今じゃなぜかそれを見ると酷く心がざわついた。

「あらあら、本当に何も知らないのかしら？ それとも、話して貰えなかったとかかしら？」

「——何、を言ってるの？」

なぜ、声が掠れるのか、私の口が、喉が、緊張のあまり涸れていた。依然として八雲はこちらを見やり、私の様子を楽しそうに見ている。

なに、これ。何で、コイツ何かが。湧き上がってくる感情は黒くて重い、憎悪だった。「まだ分からないのかしら？ ふふふ、困ったわね——」

五月蠅い、なにが言いたい……お前は、何を知ってるの？

「そんなに怯えてどうしたの？ まるで路頭に子供見たいに震えて——」

はっ、私の何処が怯えているって言うのかしら？ バカにされるのもいい加減我慢の限界だ。次、次私に何か言ったらコイツを殺そう。

そう決めて怒りで震える肩、指先に力を加えて必死にそれを抑えていた。だけど、その時の私はそれに気づけなかった。だから、既に目と鼻の先に居た私の耳元で囁く八雲にすら気づけなかった。

「この際だから教えてあげる。彼の本当の名前は」

「――」  
最初から気づいていた。それがあの子を指す言葉と言うことくらい。

でも、私の中から沸いてくる感情がそれを許さない。なんで、私が知らなくて、こんな、この女が知ってるの？ 長年一緒に居たのに話した事もない私が、声すらも聞いたことない私を知り得なくてなんでこいつが知ってる？ それが不思議で、不可解で、不快で、理不尽で自身が抑えきれなくなつて……溢れ出す嫉妬の感情に身に任せて八雲に襲い掛かった。

◆ 「……まるで獣ね」

あの子の噂を聞いたからまさかと思っていたけど、彼女が狂わせられているなんて……。

我が強い大妖怪がその己を失うと言う事は盲目になると一緒。それなのに、我が一倍強い彼女がこんな事になるとは私自身それが驚きだった。

これは彼の能力なのか、それともあの本の魔力というものなのか。

まあ、今はそんな事はどうでもいい。此の俣だと彼女の存在自体が危険だ。少ない友人のために人肌脱ぐのも悪くはない。

「ぐう、あああああああー！」

今の幽香は空間に能力で開けた黒い裂け目、能力で作った隙間に四肢を吸い込まれるように動きを封じている。

幽香は目をカツと見開いて、それでも必死に其処から抜け出そうと鋭い歯で今にも私の喉笛に噛み付いてこようと吼える。今の所、私が開いた隙間で手足を押さえているが正直、この状態が何時までもつか判らない。私の能力である『境界を操る程度能力』で空間を裂く隙間は確かに便利だが相手が同等、もしくは格上相手になると話は別だ。

相手の力に対して作用するように能力を使用すると莫大な妖力を消費してしまう。今も押さえているだけでも額に汗が浮かぶ。

「でも……弱音を吐いてもいられないわね」

無意識に溜息が出そうになるのを堪える。危ない危ない、溜息をすると幸せが逃げ込んでしまったっけね？

不意にくすつと笑いが零れる。少ない時間だったが彼と話して教えてもらった事、まるで何でも知っているような雰囲気を纏う彼は幼かった私からしたら魅力的に映った。彼は容姿とは裏腹にその中に沢山の知識を持っていた。

右も左もわからなかつたあの頃に、彼に知り合つて私は相当幸運だったのかも今更ながらそう思う。それとあの時した小さな約束も。

「ふふ、貴方との約束ですものね。でも、今度会つた時はお返し、しつかりしてくださいと怒りますわよ？」

そう自分でも忘れていた無邪気な笑い声を上げ、懐かしい昔の事に思いを馳せながら、私は幽香を縛る隙間を解き放つと同時に、彼女が飛び掛つてきた。

「——さあ、来なさい獣に成り下がった花妖怪。今日は気分がいいから……半殺しで許してあげますわ」

◆ 「落ち着いたかしら？」

憎たらしい声が聞こえ目を開けると、既に日が落ちかけていてあたりは夕闇に支配されていた。

私と言えば、なぜか地面に体を投げ出した状態で横たわっていた。手足が気だるさに包まれているように口をあける事さえ億劫と感じてしまうほどに消耗のあまり立つ事

さえ出来ないような気がしてくる。

「だけど、そんな事は私が許さない。」

私が無理やり立とうとしている間、八雲は黙って私を見ていた。立ち上がったて全身を見てみると至る所に傷があり、其処感じる妖気が八雲の物だと私は気づいた。

「……っ、アンタ私に何したのよっ」

今からでも殺してやりたいが疲労感からか、頭が重く、実際の所立っているだけで限界だった。

「——本当に何も聞かせてもらえなかったの？」

「だからさつきつから何を訳のわからないことを——！」

「うーん……そう言えば準備がどうこうとか……集中がどうこう言つてたような……」  
ぶつぶつと呟く八雲に私は力を振り絞って掴みかかろうとした。

「あら、野蠻」

だが今の状態では碌に動くことができず、軽口と一緒に逆に倒された。

「ああ………そう、か。うんうん、それなら——幽香、彼は今寝てるのかしら？」

軽い調子で尋ねる隙間に顔を向ける。何でもない言つた様子、めんどくさげにそう言われると大事な物が穢されたような気がしてムカムカと怒りが沸いてくる。

「——ッ！　なんでお前がそのことを!？」

「彼は、本当に一言も口を開かなかつた？ あの子、恥ずかしがり屋だから話さなかつたんだと思うけどそれとは別に警告なら言うはずなんだけど『僕に近づかないで』、とか」言葉が出なかつた。言われれば確かに聞き覚えがあつた気がする。でも、なんで今まで。

「……貴方、拒絶されてでも彼の傍に居たかつたんじやないの？」

「……」

「あくまで聞いた話だけど、知的生物の殆どは嫌なことからなるべく目を背ける傾向があるそうよ。意識的ではなく、本能的にね。あたま、ああ脳つて言つたかしら？ それが迫つた現実に対して自分が耐え切れるか判断してそうなるそうよ。だから、気づく気づけないじゃなくて——ああ、小難しいことはもう良いわ！」

……この際ハッキリ言うけど——幽香、貴方は寂しかっただけなんじやないの？」

呆然と見ていた八雲に突きつけられた指を叩き落す気すら失せていた。

「私と始めてあつた時もそうだつたように、自分の中で割り切つても時間を引き延ばしてずるずると幽香……本当は彼の声に気づいてたんじやないの？」

「分らない、わよ……」

「幽香……」

おぼろげだつた景色の変化に、思い出してきた記憶に頭を抱えた。

血が染まった手に、下に沈む死体はそこ等じゆうに広がっていた。泥水溜まりに、浮かび上がった私は愉悅の表情で鮮血を舐めとっていた。

「わ、私は……あ、なんで——」

あれは私がやった事？ でも、あれは私が思った事だから——彼の、せい？ ——違う。違う違う！ あれが本当の私なの？ 私が、わたしがあんなに醜い感情を？ わたしはだれ、に？ ほんとうのわたしはどこにあるの？ わたしは、わたしは——

「——幽香」

厳しい声、だけど此方を咎めるような響きはなく、八雲の気遣うような声にハツとした。

「貴方が自分を見失うほど混乱しているのはわかるわ」

こちらをしつかりと見据える八雲の目を見ていると朦朧としていた意識が真っ直ぐに伸びていくのを感じた。フラフラとしていた体に芯が通っていく。

「でもそれは唯の甘えでしかないわ。彼ではなく、自分を見なさい幽香、本当の貴方は何処に行つたか？ そんな物なんて何処に行きようもないでしょ？ 貴方は初めからここにいるのだから、あの不遜で、大胆で、大雑把な自分の絶対的な自信に満ちた貴方は、この程度の影響で乱されるものなのかしら？」

「——っ」

ああ、コイツ私のことを元氣付けようとしているのか、幾ら混乱しようとも、そんなことくらい気づけた。

ガラにも無いことをして、全く余計なお世話だ。

「うっさいわね」

それに言葉一つ一つに私情があるじゃない。そして私はなにしているの？ このまま言い返さない。そんなことをしたらそんなの——それこそ私じゃない！

「——ハッ！ 何を言うかと思えばそんな下らないこと言つて、分つてるわそんなこと。それにアンタほど私は不遜でもないし大雑把でもないと思うんだけど？」

「あ？ あら、何を言うかと思えば、そんな粗野な貴方にそんな事を言われるなんて心外ですわ。出会い頭殴り掛かるなんて猪のマネをしていたくせして」

「は？ 何を言つてるのかしら？ そもそもアンタがいきなり不法侵入してきたせいでしようが、自業自得なのだけれど？ それともそんな事もわからないのかしら？」

.....

「——なによっ..」

「——なにがよっ..」

睨み合う両者から迸る怒気と殺気が一陣の風となり、二人の間を吹き抜けた。

それは数時間か、それとも数秒だったのか、沈黙の中両者は睨み合つて初めに息を吐

いたのは八雲だった。

「——はあ……止めましょう。こんなの不毛以外なものにもならないわ」

「ええ、そうね」

私自身それは賛成だった。このまま殺り合っても良かったが、万全の状態じゃない今じゃ不利だ。しょうがない、今日の所は見逃してやろうとしよう。

「それで、今日ここまで来た本題に移ろうと思うのだけれど」

服の着いた土を払っていると八雲が神妙な面持ちでそう切り出した。

本題も何も彼のことを聞きに来ただけじゃないのかしら。

そう言うのと、それもそうだけれど、と何とも歯切れが悪い返事を返してきた。しかしほかに何かがあると言うのだろうか？ 疑問が浮かぶも、今は大人しくコイツの話を聞くでしょう。

「ならさつさと話なさいよ」

「……少しは変わったと思ったのだけれど……」

「いいからさつさとしなさいよ」

こっちは疲れて立ってただけでつらいってんのに。

「はいはい、それじゃあ言うわよ。初めに言っておきますけどこれは警告よ？」

タツプリ間をあけて、

「此処から逃げなさい。彼を置いて」

余りの、八雲の言った言葉に一瞬、息に詰った。

何を言い出すかと思えば、花を、彼を置いて逃げる？　なぜそんな事をしないといけないのか。しかし依然として八雲の目は鋭さを増し、それが鬼気迫ることだとわかると同時に質問を飛ばしていた。

「何故？」

「理由はあるわ。一、貴方が彼の影響を受け過ぎているから、正直私でも此の俣で貴方がどうなるかわからないわ。次は無い、しっかり覚えておきなさい」

それを、彼の能力だ、今は抑える作業を行っていると八雲は言っていた。

「そして問題のその二、彼の力のせいで周辺の妖怪達が活発化しているから。これは貴方も実感していたでしょう？　それが等々深刻化してきたのがその理由。そして三つ目だけ——」

そう言つて間を空けて、空気を肺に取り込み、溜息と一緒に吐き出した。

「人間達の軍隊が、神を引き連れてもうじきここに攻めてくるわ」

## 第16書 待ち合わせには遅刻は厳禁

「——嫌よ」

一瞬の間も開けずに幽香は八雲の助言に即答した。

「……もしかして勝てる、と思ってるのかしら？ 花妖怪。断言しておくけど万が一、貴方には勝ち目なんてない。戦うだけ無謀、助けなんてない。足掻くだけ無駄なのよ」

呆れと苛立ちが混じった八雲の言葉に、幽香はこの場の雰囲気にとぐわらない、はぐらかしとも取れる柔かな笑みを浮かべた。

細められた瞳に続いて睫毛が伏せられ、つり上がった薄紅色に染められた唇はキツと歪めたように引き締められていた。

「昔は、今と違ってここは荒れ果てた土地だったわ。木々は好き勝手に生えそろって、草なんて今の私たちより背が高かったのよ」

「何を……」

言ってるのか、と言葉を言い終える前に幽香は背を向たことに八雲は怪訝に眉をしかめる。

「今みたいにこう花たちが満足に咲けるような環境じゃなかった。そこに転がり込んで

きたその時は自分の不運を呪ったわ。どれだけついでないんだって。それでも、何かに抗うように毎日木を押し倒したり、土地を切り開いて、必死に土を耕した。

今に思えば、ここから離れてまともな他の場所を探す事くらいできたでしょうね。

……不思議よね、昔は考えもしなかった考えが今になって浮かんでくるわ」

ふと空を見上げた幽香の横顔を見ていた八雲は過去を振り返って彼女が味わってきた感情までは知りえないしろ、この花畑は、花妖怪である幽香から切っても手放せない物だと理解できた。

「——この枯れた土地に一本の花が咲いたときの私の気持ち、貴方には到底理解出来ないでしょうね」

語り終えた幽香は青芝生に腰掛けたまま、無言で自分だけの庭園を眺めている。

「……後悔、してるのかしら」

じつとりとした風に巻き上げられた髪に手を添えながら囁く様に呟いた。

聞こえなかった訳ではない。だけれど幽香は聞いた瞬間、逸らしていた思いが過ぎったのか、浮かべたそれに背けるよう頭を腕の間に伏せた。

「後悔してない。してる訳がない……ってハッキリ言えない自分が恨めしいわね」

「ならさっさと逃げなさい」

くぐもった自嘲の籠った返事をバツサリと切り捨てた。

「……………」

「? 聞こえないわ。言いたいことがあるならハッキリ言いなさい」

——陽は沈みきり、すっかり辺りは夕闇の幕が落ちていた。

太陽に変わり月が青白く発光して月夜の下で、花たちは色とりどりの彩色を銀燭の物へと変えて呼吸することにより、帯の煌きが増しているかのように八雲は感じた。

美しい。素直に彼女は思った。だが、考えたのはそれまでで、それ以外に特に思うことはなかった。

「この花畑を必死に貴方が作り上げたのはわかったわ。……それでも命があればやり直せるじゃない。今は引いて、逃げればいい。何で前に進もうとするの?」

幽香が感じている花たちに対する親しみも、愛情から不安まで。様々な想いが頭を浮かんで消えるのを、物に対する考えがずれている八雲には察する事など出来なかった。

出会ったのは今日と昨日の関係ではない二人。お互いの素性など、大体は把握し合っているはずだったと思っていた。

その思いの食い違いに少なからずの苛立ちを募らせていた幽香はついに、  
「それができたら、こんなな悩む事も、ここまで苦しむなんてなかったわよ!」

髪を掻き筆るのを寸でのごとで抑えた、と言った様子で両手で頭を抱えながら胸に詰まった感情を吐き出したが幽香の嘆きは届かない。八雲の冷め切った瞳が鋭く細め

られ、言葉語らずとも淡々と彼女の背を射抜いていた。

冷酷とも取れる八雲の沈黙は、幽香に無言で「だから？」と再度、問いかけていた。「花たちの声が聞こえる私の気持ちがお前にはわかるか、わかるわけない！」

必死の叫び、振り向かれた表情とその一言で八雲はやつと、自分の失言に気づいた。

彼女の手で一から育てた花ならば、関係で言ったら親子だ。そしてこの庭園は花を守護する土壌であり、人間で例えると村と同じ。代々受け継いでいった土地を人間が懸命に守るように、幽香は一人ながらも村を守ってきた。それはどんなに小さい物だろうと、他人からしたら有象無象の物であろうと、彼女からしたら生涯変えられない物だと。

八雲はとんだ思い違いをしていたと考えを改める。現実逃避気味に語っていた幽香が抱いていたのは庭園への愛着ではなく、守護の執念と溢れ出すほどの情熱と花たちに對する愛情だったと。

それに対して思い至ったとき、自分はどれだけ彼女にぞんざいな言葉を投げかけていたのかと。

「幽香……！」

後悔の念が口を開かせるより先に体が動いた。

「っ！・ 触るなああ！」

肩に触れた瞬間に手を弾かれ、八雲は痛みを感じるより先に目を見張った。

片方は見つめ、もう片方が睨む中で、ぽつり、と雨粒が突然二人に降り注いだ。

次第に数滴だった雨粒は徐々に雨脚ははやまり、雫は髪を濡らし、顔を伝って服を湿らせる。

謝罪の言葉に口を開くのも忘れ、八雲は苦悶に曇らせた幽香の顔を、気づけなかった友人の真相をただ無言で見つめる事しかできなかつた。段々と蒼白に変わる八雲の色は雨の冷たさに熱を奪われたとはこの場合考え難かつた。

「くっ」

「……あ」

走り出した。逃げ出したとも言える幽香の遁走を防ぐべく、八雲は弾かれた右腕を伸ばした。しかし、突きだした手の反応はあまりにも愚鈍だつた。

あえなく握った手は先ほどまでそこにいた彼女の残滓（ざんし）を捕らえて空を切つた。

追つた視線の奥では幽香が森の茂みへと姿を消したのが同時であつた。

ぎーぎー

ノイズにも聞こえる雨音と共に、手を伸ばして固まつた八雲へと容赦なく打ち付ける。

思い浮かべたのは、何時も毅然としていて、傲慢で、自意識過剰な反面、変な優しさ

を持つ、風見幽香の輪郭だ。

気丈であり、自分の弱い姿を他人に晒す事を嫌っている彼女が先ほど見せた表情は八雲を驚愕に長い時間足元を縫い合わせる威力を持ち合わせていた。

——木々の縫い目から、或いは木の葉から落ちてきた雨雫に幽香は疾走しながら腕で目元を拭った。

「うっ、うう……」

滲んだ視界が足元をくらませる。偶然根を這っていた木に足を取られ、派手に転んでしまった彼女は、起き上がろうとするが、思い出せば戦いつかれた後だと、無理に動かした体のツケが今にやってきて自力で起き上がる力さえ残ってはいなかった。

ぬかるんだ地面にへたり込んだまま、漏れる嗚咽を隠すように両手を口元へ押さえつけた。

「……………」

涙ぐんだ瞳が目元に溜まり、抑えがきかず一筋の道を作った。次第に勢いを増すそれに、彼女は対には反抗する事を諦め、手を離れた。感情を抑えるのも限界だった。

「あ、あ、あ、ああああ！　う、あ」

——今となつては雨の雫となつて隠れてしまったが、彼女は確かに、先ほどまで伏せていた顔の下に敷いた腕を涙で濡らしていた。

涙声と際限なく漏れる嗚咽が山彦の如く辺りに木霊する。せめての慰めと、より強く雨脚がはやまった雨粒の音が幽香の絶叫を覆い隠していた。……両腕で涙が溢れる瞳を覆ったのは、彼女が今できる自分へ対する最後の反抗だった。

◆  
眼を瞑る瞼の奥で、僕は魔力の構想を練りこんでいた。動かないせいで手足や体の感覚が鈍くなって暑さとか寒さなんてあまりに気にならないが、ぽつぽつと降る雨は耳障りな音をたて僕の集中力をそぎ落とそうと無駄な努力に勤しんでるように思えた。

幸い、なんでか雨粒は頭上から落ちてきていないが、こうも長い時期雨が続くと気になつてくる。もしかすると、今は季節で言えば梅雨に差し掛かった辺りなのかもしれない。

湿気、いやだなー。

内心で嘆息を漏らしながらも、手ではなく頭で行う作業の手を休ませない。

僕が本の魔力に気づいたのは、神同士の戦いを仲裁している時だった。

……自分でも何してんだ。とは思うが、巻き込まれたのだから仕方ない。どうやら僕は、相当厄介ごとに巻き込まれる性質（たち）らしい。

今に思い出すとその片鱗やら旅の最中で色々やらかしたなー、ちよつと反省する事が多々あったりした。眼を瞑つてるせいで外の状況は分からないが赤裸々な思い出は僕

の表面温度を上げるくらいの効果はあった。

まあそんなことも色々あったりなかったり、と。外を出てから数百年間くらいははしやぎ過ぎてあつちこつちに飛び回っていた。いやマジ何やってんだ僕。

でもある意味じゃ、飛び回ってたおかげで本の魔力の被害が最小限まで抑えられたのかもしれんと希望的観測をして見たが、なんてたつて相手の欲望にそのまま作用する魔力なんて、集中的に浴びてしまつたら並の人じゃ即、廃人だ。

だから今はこう人が少ない場所に籠つて封印の作業をしてる訳だけど……昔はそれは生き物なんて全く寄り付かない場所だったはずなんだけど……時間の流れって恐ろしい。

すっかり緑豊かになつてしまつた山中には今では沢山の生き物が住み着いてしまつていた。

そう言えば、ちよつと前まで来てたあの子はどうしたのだろうか。姿、つつつても目深くフードを下ろして居るせいで足元しか見えなかつたが、声からして女の子……だつたと思う。自信はあまりないが。

毎回傍で何かをしてる気配は伝わつてたけど具体的に何してるかは集中状態であつた僕の耳には入らず、全く把握していない。と言うか見知らぬ人と目線を合わせるのに勇気が足らなくて毎回上げた時見たものは立ち去る時の後姿だけだつた。見た限り

じゃ、やっぱり女の子だったかな？ どうも記憶が曖昧である。

……外出たあとも人と関わらないようにしてたからコミュ障が加速したのかも、いや絶対的にそうだ。

思い浮かべた少女の背に、僕は悩みに思案した。

”離れる”とか”逃げて”と色々言った覚えあるけど、今になったらそれって全然聞こえなかったんじゃない？ だって性懲りもなくちよくちよく来てたし。

……これって目覚めたあと大変な事になるような気がするんだけど、何で気づく前に実力行使にでなかったんだ僕は……。確かに手を掛けたら多少の罪悪感はあるにしても、あとを考えればどうってこともない。

今になって気づくって……いや、ここまで来る前に僕が何かしら強く言えばよかったんだけど、ここまで物が言えないとなると……最早僕のコミュ障は難病のレベルかもしれない。

そう言えば最近全然来てないし、もしかしたら僕の助言が通じたのかもと淡い期待を懐いてみたり……死んだのかも——？

——あーヤダヤダこんな事を考えるくらいだった封印に集中しよう。

溜息すら吐けない今の状況に、僕は内心歯噛みした。力を収束し過ぎたあまりに能力の使用も、目を瞑ってからは指一本碌に動かさなくなっていた。今の状況が分からない

のがこんなに面倒だったなんて。

微々たるものだが順調に作業が進んでいく感覚だけが今の僕への一つの救いだった。

時間のかかる工程を不可解に思うかもしれないが、魔法の封印なんて一瞬で済む、なんてのは対象の構造をすべてを理解して上で力で押さえ初めてできる事だ。と、言うのも……本に掛かっている魔術の形式は僕には理解できない物だったという単純明快な理由からな訳だが。

だから解くことも出来ないし、完全に封印する事も叶わない。ならどうするか、数年考えて思いついた結論は魔力を収めるための器を作ることだった。

本を手にとって分かったのは、どう足掻いても理解不能な術式に、難解の魔術。それと何かが漏れ出してくる感覚だった。

基礎に100年、それが7つ。これが器にかけた時間。空のそれに、更に魔術を組み込むのに数十年。

読書の片手間で取り組んでやっていた事なのだから辛くはなかったが面倒なのは変わりなく、一生やりたくないというこの思いだけは確かだった。

……時間をかけて作りあげた器、それでもこの魔力を抑え込められるかは、僕には分からない。それだけ恐ろしい容量なのだ。

一体どこからそんな出力を出してるのかは僕の知りえないことだが気にはなった。

だから、一度だけ魔術に干渉してハッキングを試みてみたのだが。

結果、死にかけた。詳しく状況を説明するなら、全身大火傷と全身の骨にひびが入った。

傷の完治は出来たが頭にこびり付いた恐怖は癒えなかったのも頷けるだろう。骨が折れるとか、ちよつと火傷するくらいなら誰もが経験した事があるとは思うが、全身火傷にひび、骨の髄まで染み渡る痛みは発狂モンだと……。

魔術のおかげで後遺症はなかったが禁書も禁書、あまりに危なすぎる代物であるのは確かである。それでもこの本を手放さなかったのは単に結んだ約束もあるし、ある意味僕がどうしようもない、読書バカだったということなのだろう。

我ながらどうかしてる。内心そう揶揄しながら慎重に、閉じた本から漏れ出す霧にも霧のようにも感じられる立ち上る煙を体に一度取り込み、イメージのみで作り出した創造の器に移していく。

ふと、衰弱の一途を辿っている体で唯一退化の影響をあまり受けていない耳が、土砂を踏みしめる足音を拾った。

誰だろ。そう思ったがよくよく考えればここに来る生き物など、あの子しかいない。

内心、何度目の溜息だろうか。忘れてしまったが息を吐くのすらできない事を思い出すと、瞑っている目頭辺りが凝り固まるような気がした。

「……こんばんわ」

耳に入った女性特有の高い声に、僕は思わずうん？ と首を傾げる。

——む……どうやら挨拶を聞く限り外は夜、らしい。しかしこれはどう言うことだろうか？

「今日は、ちよつと独り言を言いに来たわ」

……悲しいことなのか、それとも喜ぶべきなのか。他人の心情に物凄く気を使う僕は他人の感情にえらく敏感だと自負——うん、考えている。

完璧ではないが気づけば表情を見れば大体のことがわかるようになっていた。長生きのおかげ、老人スキルと言うべきか。

空気と言うか雰囲気などで大体は察することも造作もない。それが声色、声だけとなると多少ながら正確性は落ちるが、僕には目の前に居る少女がどんな気持ちなのかくらい、気落ちした声色とどんよりとした雰囲気は伝わってきた事に察する事ができた。

「少しの間、ここを離れなさいけないの」

思案していた脳内に少女の申し訳なさげな声が響く。

謝る理由が全く見当もつかないんだけれど……それにしてもなんで、そんなに気を落とされているのか。

理由が湿度だとか天気が悪いとかだったら思わず同意して頷いてしまいたいようなもの

だけれど。

「だから、私が居ない間もしかしたら危険な物とかが迷い込んで来るかもしれないの。……もし、この声が聞こえてるなら今すぐ逃げたほうがいいよ」

「動きたくとも動けないから無理なんです！」と、返事ができたらどれだけいいか。それと人払いの結界を張ってるからそもそも妖怪やら人間なんて無意識でない限りここに近づけないし。危険、と彼女が言ってもそれほど僕は危機感を感じなかった。

「はは、私なにいつてるんだろ……聞こえてたら、そもそもこうはならなかったでしょう」

ドシヤ、と水分を多く吸った土草の上に居座った音が聞こえた。意味のわからない言動は別に、風邪でも引かないか心配になったが、僕が考えても無駄か。

声が途切れ、ぼつぼつと静寂を取り戻しつつあった空間で、何か思い出したように目の前でいるであろう少女がかすかに呻いた。

「ねえ……何か言ったらどうなの？」

……。喋れたら楽なんだろうけど、ね。

「お前のせいで、今私がどんな目に合ってるかわかってる……？」

深遠の奥底から響いた声に冷水をぶつ掛けられたようにやつと、この少女が何を考えているか合点いった。つまりは、僕に対する復讐だろうか？ 理由はわからないが、魔

力の影響やら何かしらの不備が僕にあったのは明白だろう。訳は知らないが、彼女の口ぶりだと僕の能力とは違うが本が周りに与える悪影響に気づいているらしかった。

「殺してやる」

憎悪の籠った宣言と共に身を引きずる音が聞こえた。一呼吸の間に次に肉が軋む音に加え、僅かな嗚咽が伝わってくる。泣いているのだろう……泣きながら、感じる息苦しきは僕の首に彼女が手を掛けているから、か。聞こえる音だけで、僕は自分の今の姿を想像した。

けたたましい雨音、それ以外の音が消失し、気味が悪いほどの静けさを森に与えてた中で、僕から滴る肉の締め付ける音がしんしんとした気配を漂わす森の一角で悲鳴のようにキリキリと締め上げられていた。

「ふーう、ふーう……!」

荒い息遣いが耳鳴りとなって鼓膜を揺らす。

首に掛かっていた重圧は次第に強くなると思いきや、意外にも何故か時間に経つにつれ弱まり、ついには掠れた声と共にフードの下に隠れていた僕の肌に、何か冷たいものが落ちた。

「死ん、でるの……?」

動揺しきった声に、内心「イヤイヤイヤ」と首を振ってるわけだが僕の内情、そんな

こと関係なしに物事は進んでいく。

息を詰めた気配が伝わった瞬間、発破音に似た爆発音が耳元を撃った。

ギギと木が軋む擬音が耳障りに音をたて、木の葉に留まっていた雫だろうか、滝のよ  
うな轟音をたてて一齐に地面にくだった。

「――！」

理由は知らないが相当お怒りらしい。生命活動に必要な行為の殆どを停止——つまりは今の僕は仮死状態な訳だが死んだと思われるとは勘違いにも程がある。

あーでも、このままだと……今は死体と勘違いされているようだけれど相手は随分と荒っぽい手合いみたいだし、死体とか関係なく存在とか、残っている肉体それもろとも消されかねない、と感じた身の危険にどうするか思考を組み立てていると、予想に反して爆音が収まる頃には先ほどまでであった少女の気配が消えていた。

あれ？ と拍子抜けするのと、何でと疑問を思わずにはいられなかった。

試しに耳を澄ましてみたが、大きな音を聞いた後では正確に音が聞き取れるはずがなく、ただの耳鳴りが遠くまで鳴っていた。それと合わさる雨の音が僕の耳を打つ。

(訳がわからないな)

独り言をしゃべりに来たと思いきや実は殺しにきたと、んで。と思つたら死んでたから(誤解だけど) 八つ当たりして——憎むべき相手だったら肉片もろとも消されると

思ったけどそんな事もないし。

(?! 結局なんだったんだ?)

謎すぎる行動に、頭を捻ったが。分からないならまあいいか、とこれ以上考えても時間の無駄だと思い、思考を打ち切つて再度止まっていた魔術へと手を移した。

又か……。耳をつついた土砂を蹴り上げる音に内心、面倒だと感想を込めて思いつきりなじつた。

そう言えば、前の足音が聞こえたのは、今からすぐだったか？ 時間の感覚が狂っている僕は、一分前と感じていた少女の来訪に続いて来た足音に辟易すると同時にがさざと草木を分ける異音に警戒心が跳ね上がり今度こそ意識を覚醒させた。



灰色の雨雲から遠雷のようにゴロゴロと鳴り響いた音が山彦となつてそこ等一带に住む者たちは、何時自分の身に落ちてくるか判らない災厄の恐怖に生ける者を問わず自分の住処に追いやつていた。

気が緩んだ瞬間を狙うかのように、爆音が何処か知らぬ場所で弾けた。大概の者は安堵から息を吐き着地地点からほど近い者は運がよかつたと次の襲来がない事を心から祈つた。

——その祈りが聞こえた一柱の神は、純白の袴と同色の長髪を鬱陶しげに掻き揚げた

後ろ髪から白いうなじがそつと姿を表す。つんと尖った鼻に人とは思えぬ美貌の次に前髪に隠れていた双眸が隙間から覗き、鋭く前方の指し示し、動く人影を見つけると何度目かに判らぬ息を吐いた。

「ほんと、人間って面倒よね。少しでも不満があればすぐに神頼み」

呟くと共に群青色の空覆う靄を見上げながら口の端をつり上げ皮肉気な笑みを零した。

「この長く続く雨も元はと言えばあつちからしてきた。所謂お願い事なわけ、人間達の慣習では雨乞いって言ってるらしいけど今回はあのお方は気合が入りすぎたようです。……手が掛かる子ほど可愛いと言うけど私には到底理解できないですね」

「……それだったら、帰るついでにその神に言つて頂戴。そんな気まぐれで雨を起こすんだったら首を絞められるくらいの覚悟をしておきなさい。私の花びらを散らせた罪、このくらいじゃ済まないわよ」

ふらふらと体を揺らした起き上がった幽香は満身創痕ながらもよそおった気丈な態度に、神は声を殺した苦笑を漏らした。

「くく、そうですね、貴方の遺言であれば或いは……食事会話の合間にも話すかもしれませんか」

上品に手を当てながら笑みを取り繕う姿は、普通であれば嫌味に感じるものだが大人

びた声を零し優麗に微笑む様は自然とそれがなかった。

「しかし、貴方が先に言った花はどうも私からしたら見えないのですが……ふむ……嘘言、そう取つてもよろしいのですかね？ それでしたら態々私が言伝する理由もありません」

「自分で破壊して置いて、よくそんな白々しい態度を取れるわねっ、花を散らしたのも全部お前がした事じゃない」

彼女が指差しで示した地面は、柔らかい土などではなく白い石が周辺の草木の根つごと土を盛り上げていた。

冷たい雨に打たれ、萎びた花に視線を流しながら神は冷淡な表情で言った。

「それでしたら尚更、貴方を見逃すわけに行かないのですよ。今日私が呼ばれたのは何も周囲の信者たちの統治だけではなく妖怪の——排除も含まれている訳ですから」

相手を見下した格上の風格に幽香は一步も引き下がらない。それに、再度の厭きれ顔で下がっていた腕を振り上げた。僅かな地響きに幽香は見切った様子で、半歩飛び引いた。

瞬間、先まで幽香が立っていた位置に一本の棘が地面から突き出し、避け切った幽香の姿を見つけると、神は驚愕から上げていた手で口元を押さえた。

「何故、何で避けられたっ」

「そりゃ……あれだけ同じ技を何度も見せられたら馬鹿でも避けられるようになるわよ。それとも、何？」

雨の影響でたれ下がった前髪の隙間からすっと細めた赤色の双眸を覗かせて、薄ら笑いを浮かべて口を開く。

「地面を石に変えた最初の攻撃からの石を生やす一撃で、貴方の能力が大体どんなものくらい誰でも分かるわ。……間があるから何度か避け損ねたけど、もう当たらない。何そのアホ面？ そんな事も解らないでも思ってたのかしら」

格下の相手、それも見下していた、低脳だと思っていた妖怪にあっさりと自分の能力を明かされた事に、内心で隠し切れない衝撃を受けた。

それに加えて相手の挑発的な態度に、目の前の神は押さえていた動揺を押し切って、自身の神力を体から立ち上るほどに出して怒りをあらわにした。

風ではない力の荒波によって巻き上げられた純白の髪を巻き上げて怒りに歪めた表情を幽香へと向けた。

「気が向いたら生かしてやろうと思ったが気が変わったよ、今すぐ殺してやる」  
今まで袖の奥に隠されていた右腕を振り上げた。

圧倒的な圧力にも幽香は微動だとしなない。澄み切った思考で、振り上げられた手に握られていた物が、石の剣だと神の素早い動作から辛うじて認識できた。

「ふふふ、さつきは自分で逃がしてやらないとか言つてたくせにもう忘れたの?」  
「ほぎけつ」

神力が込められた剣が振り下ろされたと同時に、緑の森は石の森と化した。——いや針の山と表現したほうがいいかもしれない。

先端に鋭利な棘を持った柱が何百と地面から突き出された光景は、さしくも地獄のものであるものだった。

この規模だ、予備動作が分かられようと避けれるはずがない。荒い息を整えながら神は一番高い、針を見上げた。

視界を塞ぐように、赤い布の切れ端が宙を舞った。その事に確かな手ごたえを感じ、感じていた緊張に体を緩ませながら、先端へと更に目を凝らした。

雨が視界を阻害する。

降りが強くなった雨粒のカーテンに曇らせられた瞳の中で、血の滴る棘が映った。達成感からつり上げかけた頬。だが、

「え——く、あつ」

驚きに声を上げた次の瞬間、体を襲った痛撃に身をくの字に曲げて次に襲った背中への衝撃から堪えきれぬ痛みに声を上げた。

不意打ちによる一撃に気を抜いたばかりに受身を忘れ、モロに体を撃ちつけたことに

朦朧とする意識の中で一度は見失った妖怪の姿が目の前に入った。

視界が霞んでも、脳は動いている。戦いは続いているのか――

思考がそこに行くつくまでに数瞬の間に幽香は一步の間合いを詰めていた。

「くっそー」

倒れながらも、握られた剣を地面に突き立てた。先と同じ棘が迫る妖怪の足を塞き止めようと地面が爆発したかのような揺れと共に幽香を襲う。

――掠る。翻ったスカートを石槍が貫き、掠めた太股からは血が飛び散る。だが気にした様子など、恐怖を感じた様子など幽香には微塵も無い。

忙しなく動く眼球が、突き出る地面の予兆を捉え、凄まじい反応速度と自らの戦闘経験から最善の手を一瞬のうちに導き、身を振り、妖力が籠った拳でまだ短い棘を砕き、道を開く。

いや、道とも言えない針の筵（むしろ）を擦り抜けていた。視界の中で、まだ霞む姿は作り出した石のバリケードでさえでもとても、スピードが落ちたようには見えない。

「――ッー」

感じた危機感に飛び起きてぐらつく足元を両足を広く取ってバランスを取った。ガクガクとぶれる視界で、幽香の姿を見定めた時にはもう、離れていたはずの間合いは残り10歩までに詰められていた。

「舐めるな妖怪ッ！」

地面が起立し、数本の石柱が現れた。だがそれは幽香を攻撃を意図に出したものでなく、中心に居る者を囲むように一本一本が並みの妖怪など一撃で消し炭にするほどの神力を立ち昇らせて存在していた。

神はその一本、いや、一柱の先端を握り根元から千切った。キーンと響いた涼やかな石の悲鳴に、幽香は聞いた瞬間に思わず耳を押さえた。衝動に駆られた。

「厭な音ねっ！」

「下賤な妖怪如きが、神の力の前で塵と果てる事を喜ぶがいい！」

踏み込んだ一歩が硬い地面を揺らした。予想外の揺れに足元を取られ、たたらを踏んだ幽香を襲ったのは、斜め上から振り落とされた柱が神々しい銀光を懐いた。

「ちいッ！」

触れた物を容赦なく滅する柱を、幽香は片腕をかざすと流すように受けきり、柱は勢い余って地面に硬く打ちつけた。

衝撃はかなりのもので伝った振動に思わず神は握っていた柱から手を外した。

好機！ 思わず口に出して叫び飛び出した自分に、我ながらどうしようもない違和感を抱く。

今、目の前にいるソイツは痛みに呻いている。握り締めた拳は今まさに空いた腹部へ

と吸い込まれていくように、私がまばたきをする間に手ごたえを感じるだろう。だが、何だこれは？

瞬間に湧き上がる疑問に幽香が答えを出す前に、神の一喝が先を制した。

「石の花よ、ささくれろ！」

打ち叩かれ、一度は硬い地面に弾かれ使いの手から離れ、地面に転がっている筈の柱は、気づけば地面の石と同化していた。

「――！」

驚く間も、避ける間も無く背を向けていた柱が弾けた。柱を中心に枝分かれた幾千もの棘が幽香を襲う。

突き抜けた枝が血に染まり赤い血の雫が雨粒に紛れて宙を舞った。

「……これは驚いた。まだ生きてるのね」

かは、と肺に詰まった血を吐き出した幽香は心臓を脈動させ呼吸の最適化――うつ伏せで倒れ、即死に近い傷を負ってもまだ、確かに生きていた。

生きている、と言っても白い石の地面には赤い水溜りが幽香を中心に広がっているのは、このまま放っておいても確実に死ぬだろう。

そう結論付け、神は幽香から離れた。

それでも、何故これほどまでの傷をつけて生きていられるのか。ひとえに、それは幽香の仕掛けた猛攻、猛突のおかげだった。

見渡せる場所、全てに生やす事が出来る石の棘には唯一、棘が侵食しない場所があった。幽香は本能的にそれに気づき、背後で柱が爆発した瞬間引くのではなく、一步前へと進み出た行動により、半ば棘の領域外へと身体が抜け出た。

その為に身体を貫く筈だった棘は半分肉を抉るのに止め、即死には至らなかった。

瞬時の判断、皮肉にもそれは今回神を呼び込む理由ともなった、過剰とも言える防衛。彼女の領域を侵す者共の戦いで得られた戦闘経験から来ている物だった。避けるのを諦め受け切る事に専念した為だ。

しかし、戦いの果てに敗れた幽香だが、頭の中には後悔も、死に対する恐怖もなかった。

「……………」

花が……。音にならない呟きが幽香の口元から零れた。

力が抜け落ちた身体を伸ばし、ぎりぎり悲鳴を上げる肉体を無視して硬い地面に無残に転がった花にそつと手を伸ばした。

——いや、伸ばそうと、した。

「……………あぁ……………」

今度こそ、幽香の口から悲哀の悲鳴が漏れた。

伸ばされた腕が花に届かず、触れる寸前で途切れていた。

生まれてから今まで、数え切れない日々を共に過ごし花を愛で育て上げた右手は、無残にも千切れすっきり荒涼とした花畑の中で冷たい雨に打たれている。

身体が冷たい。薄まった視界、現実感を失った感覚の中で徐々に冷たさが増す事だけがしつかりと感じられた。

意識を失う寸前、それでも幽香は只管願ひ、思っていたことは花に対する愛情だった。

——伸ばされた左腕が、花に届くより先に、幽香の手が小さな手にそっと包まれた。

「……誰……？」

不思議な安堵感に幽香はゆつくりと瞼を閉じた。

「綺麗な花だったんだらうね……」

散った茎を持ち上げながら、少年の声で呟いた。

ええ……とつても。

声ならぬ声が消えた時には幽香の意識は闇の中に落ちていた。



体が運ばれる感覚、次第に募る焦燥感の訳は見知らぬ者に連れ去られたことではなく、手元から離れた本に意識を向けたが為の、殺意にも似た感情を抑えるためだった。

「——その子は？」

「——様！ 実は森の奥深くを見回ってた時この子供が倒れているのを見つけて——」  
 やつと何処かに着いたのか。道中でひたすら僕に頑張れと声を掛けていた男の声が女の声に随分とへりくだった様子で返事をした。

話を聞く限りでは僕は人間の子供、として認識されているみたいだが……今にしては好都合かもしれない。起きる準備はもう整っている。後は瞼を開けて眼を開くのみ。

久々に開いた視界じゃ生憎の空模様だった。だけれどそれ良かったのかも、何故ならこれだけ曇った空でも眩しいと感じるのだ。

僕の身動きした事に、はつと背負っていた男が驚いた様子で僕を地面に横たえさせてくれた。

『……………！……………？』  
 『……………？』

心配そうに僕を見下ろす人たちの顔が見えた。だがそんな事は今はどうでもいい。聞こえる音も、見上げていた視界も意識から追い出して肉体の隅々まで血を巡らすように筋肉が生き返る——動く感覚に確信と共に深く深呼吸をした。

(動く……………！)

眼を瞑ったまま、ふらつく三半規管を制御して立ち上がろうとする。その時僕を押さ

えようとすると手たちを振り払い、立ち眩みのような眩暈を感じながらも立つことには何とか成功した。

人心地つきたい気分だけど、まだまだこれからだ。自分に言い聞かせ、瞳を開く。

灰色の瞳に映ったのは、もう心配そうにこちらを見下ろす人間の姿ではなく、驚き或いは不安から躊躇いと、僕に向けられる不信感が詰まった視線をあえて何も言うまでも無く無視した。

僕の視線はある一方。純白の、銀とも思える女、神の持つ僕の本へと固定されていた。

「……そなたは妖か……？ それとも人か？」

厳かな響きを纏った声に恐れでも畏怖でもなく、凄まじい苛立ちを抱いた。

苛立ちに力が入った身体から、抑えていた妖気が漏れ出し、目の前にいる神に限らず人間までも目を見開くが、そんな事はどうでもよかった。

「貴様……！」

相手側、特に神の瞬時の動きは実に素早かった。咄嗟に僕から距離を取ろうと地面を蹴り上げ、勢いをつける。

離れる身体。

僕の伸ばされた手がムカつくほどに、神の動きに対して遅すぎる。緩慢な手が開かれた時には神は数メートル以上離れていた。

届くはずがない距離、間合い。だけど僕には自分でもどう言い表していいか分からない確信があった。

捕れる！

「返せ」

妖気が全身を包む感覚、瞬間。間合いが詰まった。

「なッ」

驚きから声を上げる前に、僕は手を伸ばして目の前の本を奪取した。指に触れた表紙のざらつとした肌触り、次に感じたどっしりとした本の重み。少し離れただけでも当の昔遠ざかったしまったように思われる記憶、再び感じられた感覚に懐かしさを感じずには入れなかった。

思わず表紙を捲り文字を読む衝動に襲われたが、歯をかみ締めギリギリのところまでそれを押さえた。

辺りに充満した神気に気を配りながら、ここでやっと回りを見る余裕が湧いてきた。

背の高い木が立っている所を見ると、ここは森の中だろう。見上げた天気は雨、大粒雫が硬く、白い石に落ちて碎けて水溜りを広げている。最初は木かと思つた無数の棘が地面から突き上げ、まるで針の森みたいだ。

回した視界で神の背後にある一際膨大な神力を放つ棒切れが4本。しかしそれより

も危険なのは地面に突き刺さっている剣だろうか。恐らくはあれこそが神の新とも言える武器だろう。

自然と分析と観察の両方をこなす視界で、赤い血溜りが映った。

中心で倒れる妖怪は、その出血量から僕から見てもこのままでは助かるようには見えない。

背丈はまあまあ高い。そりや僕より高いだろうがあくまで平均より、と言う意味である。服装も、これまた血塗られてるがこの古い日本の時代に似つかない不思議なワンピース。倒れる女性の姿に、視線が数瞬食い付けにされる。

——見覚えがない相手。

(まあ、どうでもいいか)とすぐさまに興味を無くした瞳を逸らそうとした時に、今まで視界に入れても考えなかったモノが目に入った。

花……?」

地面に転がるそれに必死に手を伸ばそうとする妖怪の姿に、ちくつと頭の中が刺激される。萎びた茎に土がこそげ落ちた細い根っこは、どう考えても硬い地面に生えるモノとは思えない。それならば誰かが育ててたと考えるのが妥当だろう。

「——!」  
思案していた脳内に、さつき聞いた神の声が耳に入った。

「——ああ忘れてた……」

僕の囁きは愚弄とも取れたのか、更に強くなった神気が怒声と共に打ち付けられる。

「……」

せめて反応だけは出来るように、攻撃との間合いを計る。瞬間、地面に動きを感じて僅かに右に身体を逸らす。棘だ。それを合図に、あつちこつちから棘の噴火が始まった。

左から右へ、斜めから下からと鋭い尖端が襲い掛かってくる。

出来れば動きたくないけど……。短い動きで早くもエンジン音にも似た爆音を立てる心臓が、耳鳴りを響かせて脳内から動けと身体に働きかける。

出来るだけ少ない動き、慣れてきた攻撃にセンチからミリへとほんの僅かな動きでかわして行く。

「くっ！」

パキン、と茨の奥から何か割れる音が4つ。同時に飛び込んで来た棒切れが僕の傍を突き抜け、地面へと突き刺さり生える樹木のように枝分かれた棘が瞬時に囲まれる。

閉じられた茨の中で僕の動くスペースは限りなくないに等しい。

壁ではなく棘に遮られた世界で、神の手に握られた剣が真つ直ぐ、刻一刻と僕に向かって石の刃が振り下ろされるのが、能力の能力を超えて——確かに感じられ、まるで

それは自分が動かししているかのとても錯覚するように見えた。

「……当たらないよ」

斜めの一閃。肩口から腹部を突き破る刃は、開けた視界と一緒に僕の服を裂くに止め  
空気と共に抜けて行つた。

「!!?」

確信に満ちた顔から一転、驚愕に見開かれた神を無視して僕は前へと足を出した。傍  
観に徹していた人は怯えからか、もしかしたら飛び掛つてくると思つたがその考えとは  
違い、道が割れる。

その中を通り、ある一方を目指して歩いて、数歩ほどで止まって座り込んだ。

血痕の量は今も勢いが劣る様子はなく夥しい。伸ばされた右腕、指した方向にふと視  
線を向ける。

一輪の花が、淡い色の花びらを散らして血と雨と一緒に地面に流れている。

不意に、少女のあの声が聞こえた。

『花が……』

掠れた響きを持つ声色は、聞こえた僕からしたら断末魔にも聞こえる。

「……ああ……」

聞こえた肉声は、やはり悲哀を纏う声色だった。

ふと浮かび上がった情景は、真下から見上げた大木の景色でも、今まで本を読んだ内容ではなく、歩く後ろ姿に僕の傍にそつと添えられた淡い一輪。

——そうか、君は。

「……………誰……………」

虚ろな瞳は僕を見上げていた。折れた花を摘みながら僕はそつと彼女の手と一緒に包んだ。

「綺麗な花だったんだろうね……………——花の妖怪さん初めまして、僕はれい……………随分と待たせちゃったみたいでごめんよ……………」

呟いた侘びの言葉に、少女ではなくなっていた女性が、ふと頷いてくれた様な気がした。

湧き上がる怒りに駆られ、僕は7つの器——七色の本を召喚した。

## 第17書 遅刻の後は…

最初こそ、神との勝負なんて本気でやるつもりはなかった。最初こそ、本さえ取り返せば後は逃げようと考えていた。

気絶した妖怪の傷を確認した後、数歩離れた場所で立ち止まって見定めるよう目を細める。

よく思考を回せば自分の内包する妖力と魔力の上限が既に半分を切っている。ハイペースの体力消費に十全だった筈の肉体は完全に息切れを起こしていた。

その答えは、格上の相手に無理に能力を行使した代償だろうか。

「この、瘴気はツ！ 皆者、早ここから」

咄嗟に出した器が意外にもアーティファクトとして能力を秘めていて、魔術の補助となり得るがその機能が役に立つかどうかは別の話である。

色濃く映る紫色の霧が自分の内心の焦りを表し汗が止めなく流れ落ちるように露となって空気に溶ける。厳しい状況。

その中で、熱くなる身体とは反対に冷静な思考が考えを弾き出す。

無理に戦う必要なんてない。初めから逃げようと考えていたじゃないか、今からでも

遅くはない。

冷徹な思考は冷たく、地面に倒れるもう一人の妖怪を見捨てようと囁く。後先を考え、この『間合いを操る程度の能力』の行使を考えるならば後一度が限度。それが僕の限界。

「――」

無理をすれば、花妖怪のこの子を連れて一旦離脱は叶うだろう。だけれど、

「人の大事な物を奪ったお前等を、僕はどうにも許せる事はできない！」

「逃げ――！」

逃げるだけじゃ、この子は報われない。この子が本当に花を愛していたなら、少なくとも僕が大事な物を奪われたらその相手を一生許さない。治療も急を要する事態、逃げなんて考えは始めから殴り捨て前へと両手を押し出した。

「集握、集中！」

瞬間、漏れ出す瘴気を見て閃いた魔術を発動させた。7つの器、満たされている4つの器を掛け合わせ残り空の3つの器を使って無理矢理纏め上げる。

元から漏れ出していた瘴気が一気に膨れ上がり、辺りに黒紫色の霧となって立ち込める。人の悲鳴が辺りに響き、止むと同時に、やがて本の形をしていた器が合さってドス黒い一本の棒となって姿を現した。

無理に纏め上げたせいで公式が滅茶苦茶なそれは絶えず形を変え、歪（ひず）みから  
 濃みだした瘴気が雫となって滴る。

一目で有害なその雫が地面に落ちると変化もまた顕著だった。神気が覆っていた筈  
 の地面は一瞬で漆黒に染まり、地面が割れ砕ける。それを起点に黒の侵食はどんどん広  
 がっていく。

「そんな!? 私の力が一瞬で……!」

「……ツ悪いけどすぐ終わらせて貰うよ。あまりあの子を待たせる訳には行かないから  
 ね」

乗って来い、乗って来いよ。

「——今後ろでへばってる人間同様、お前も地に頭をつきさせてやる」

「ツッ！ 妖怪如きが、頭にイ乗るなアア!」

神の咆哮が空気を突き抜けるに留まらず上空の厚い雲まで突き破った。吹き荒れる  
 風は嵐の如く、小さな身体に限界まで力を込め、吹き飛ばされぬよう何とか耐える。

身体強化は使わない、ではなく使えない。これだけの身体能力の差を埋めるのに使う  
 魔力の量も膨大だ。初めから真正面から当たるともりなんてない。

視線の先で噴出す神気と共に神が飛び出したのが映ると同時に掠れて消える。

(来た!)

實際は消えていない筈の神の姿があまりの速さに着いて行けず消えたように見えた。

案の定、瞬間移動したかのように一瞬にして眼前に現れ、剣を振り下ろす神の姿が収束して現れる。反射的に腕を跳ね上げ、受ける姿勢を取った。

驚くほどの速さ、それに剣に宿る凄まじいまでの神力。だけれど僕には見えなくともそこに来る事など分かっていた。

故に、避けるべき場所など容易に予測できる。

必殺の一撃を、能力を使用する事でかわした。またも、上げた腕の隙間から神の表情に驚愕が映し出された。

だがそれは攻撃に避けられた驚きからではなく、視界を塞ぐ閃光（めくらまし）によるものからだった。

「なっ——」

さすがに場慣れしているか。目を潰された事に身を引こうする。

間に合うか間に合わないかの瞬間。ギリギリのタイミングで足元に予め用意していた結界を設置。

結果、足元が疎かになっていた神は背後から倒れるように地面に倒れた。

「この、奇襲に限らずこんな小細工を！ 卑怯者め！」

そう言いながら剣を地面に刺し、そこに起点に盛り上がりとする岩に向かって棒を

突き立てる。

岩肌の白が黒と変わり、伝わりかけた神気を掻き消した。

「卑怯？ 僕からしたら、弱い者いじめをする君のほうがピッタリな言葉だと思うけど」

「あの妖怪はそれに見合う事をしたまでだ！ 私はただ」

「あー、別にいいよ。その、理由とか。どうせ君の倫理観とか聞かされてもあんまりパツとこないだろうし、何より興味が無い。僕が怒ってるのは別に個人的な理由からだから、さっ！」

霞んだ瞳で何やら喚く神がいい加減鬱陶しく感じ、黒い棒を鋭い刃に変化させ白い肌の腹部へと突き刺した。

抵抗なく突き刺さる刃に神は一瞬苦悶に身を振ったが悲鳴はなく、反抗心は萎える何処ろからその瞳を怒りに滾らせる。

「ツあ、ああぐっ……」

尖った棒の先が内部の中ほどまで突き刺さった辺りだろうか、手に伝わる筋肉繊維の抵抗が次第に強まって傷口を締める腹筋を押し返している時、始めは小さかった悲鳴が次第に大きくなって行くのが耳鳴りのように聞こえた。

そして淀みなく進んでいた棘が急に抵抗をなくしてカッン、と音を立てて止まった。それが神の身体を貫通したものだど気付いたのは、嘔きだす冷や汗に髪まで濡らして息

を切らしながら整えようとする姿を眺めてから数秒後の事だった。

「はあ、はあ……はっ、ハッ——」

「……何だかな」

深呼吸を繰り返す神の腹部から貫通して後ろから出てきた棒を見て、そんな独り言を漏らした。

あの子の奪われた物に自分を重ねて、勢いでやってしまったが今更ながら後悔と云うか、自分が取った行動に、何だか急に面倒になった。

自分に呆れた、とでも言ったものか。

見た目麗しい女性をいたぶる男（子供ではないのは脳内補正）、変わろうと思えば何時でも姿は変えられるが少なくとも今変わろうとは思わない。想像するだけで気分が悪くなりそうな吐き気を催すシチュエーションに思わず眉頭辺りが硬くなる。

（殺そうかと思っただけど、冷静に考えればそれはあまりに有義じゃない。神殺しなんて、敵対するも同然、神々と戦おうって気概も心意気なんてそもそももないし……）

……だけど、と呟いた視線の先では雨に打たれ続けるあの子の姿がハッキリと見て取れる。手を触れた時に掛けた魔術のおかげで血は止まってはいたが、依然として背中に残る傷痕は痛々しいものだ。

目の前のこいつを見逃すのは簡単だ。これは、あくまで僕のエゴだけれど、それでは

つりあわない気がするのだ。

あの子が失った物は、強いては自分の命を失ったと同等ではないか？ 僕が本を失うとした、たぶん凄く辛い気持ちになるだろう。うえ少し想像しちやつた。……死にたくなるかも。

んだけどもそれを失うまでに、神の話聞いて予測する限りじゃ、あの子にも何らかの原因があつたのだろう。

そして目の前の神も、別に悪意があつてあの子の物を奪った訳ではない、と思う。この硬い地面は力を最大限まで引き出す為に必要な物だったのだろう。それ故に花を踏みにじつたのは副産物とも考えられる。

明確な敵意はあつたにしろ、信者の頼み事に従つたと思えるその行動は紛れもなく善だ。

……いや、僕は何をそんな深刻に考えてるんだらうね、神の処遇なんてそんな物、初めから考えるまでもなく全部自分の気分次第だろうに。

「……はあー……どうすればいいのか」

生き物の生き死にここまで深く悩み始めたのはこの地が古代の日本だと知つた時からだつたか。

初めて知つた驚きの事実の話は今置いといて、今まで深く考えないで取つてきた行

動に次第と慎重に手を運ぶようになった。それは無意識に歴史の偉人みたいに表舞台に出るのが怖かったのかも知れない。

今みたいに殺すか殺さないか、何度も悩んだりもしたけれど……神と妖。

正反対の性質を持つ二つを天秤に掛けるのはこれが初めの事だった。

「……………」

「う、あ……………」

妖怪が受けた罰と考える傷と痕は僕としても同情してしまうほどの物、正直可哀想だと感情を抱くほどに。

そして、足元にいる神に関しては傷痕に関しても大した物ではなく、まあ……………後ろにいた村人達に関しても瘴気を吸って気絶しているだけで寿命が減っただろうがそれも含め、代償としては少ないくらいだと思う。

(ご)たくを並べれば明らかに妖怪側を擁護してるみたいだけど、僕としては関係のない人の生き死より本を失うほうがショックだから、常識からずれてる気はするけど……まあいいか)

そしてやっと結論を捻り出したのは、悩み出してから1分後の事であった。

しやがみ込んで考えに耽っていた状態からおもむろに立ち上がる。

「……………」

汗でべた付く灰色の髪を気だるげに頭をふつて僕を見上げる神の姿は疲労困憊の様子であり、傷口から刺さる棒を中心に黒々としたシミが神の身体を蝕んでいるのが見て取れる。

神々しい清らかな雰囲気は薄れ、妖の色が濃くなっていた。

依然と無言のまま、僕は棒を勢いよく引き抜いた。

「ひツガあ——！」

萎れかけた頭が跳ね上がり断末魔に悶え、肉が軋み上げる間、瞬間の暇も与えず黒き刃を身体を中心に突き立てた。

ドシヤ、と何かが倒れる音を最後に雨が石を打つ音だけが静かに辺りを震わした。握っていた魔術を解くと身体に押し掛かる疲労感にふら付きながら、のろのろと周辺の片付けに手をつけ始めた。

◆ 「……………」

薄く瞳を開いて見たそれは一見として木製の天井に見えた。ぼーっとして見上げていた見始めこそはなかった違和感が彼女の中でふつふつと沸いて来る。

薄黄色の天井には黒く濁った年季はなく真新しい。継ぎ目一つ苦なく雨漏りさえしなさそうな天井は彼女からしたら違和感以外の何物でもないのだ。

それに、この柔らかい布はなんだろうか。

日の日差しが入っていないのにも関わらず仄かに明るい部屋を眺めながら、ふと彼女は自身に被せられていた厚みのある布を触れる。しつとりとした心地いい肌触りに始めは動物の皮と思っていた彼女だが鼻を近づけ、はつとする。驚く事にこの布には獣特有の臭みがなかった。

この時代、未だ獣皮を剥ぐ技術はあったが加工技術に関しては皆無と言つていい。臭みなど始めはキツイかろうが使い古せばその内なくなる、と言うのが一般認識であった。彼女も臭いに関しては半分諦め、初めの頃など毎朝感じる獣臭さに苦しめられたりもした。

しかし臭いが薄れてもそれでは真新しい時のフカフカ具合が断然違う。彼女は目の前に掛けられた小奇麗な黄緑色の毛布を手で撫で回しながら警戒心に鋭く目を細める。

部屋の中を見渡せば、使い古された丸机にイスに物入れの棚。よく見れば元は自分の家にあった物だと気付いた。

「(ハハ)は……。」

次はより警戒と疑念を込めて呟いた。

「……？ 何の音？」

その時、部屋の外へと繋がれてると思われるドアとは別方向、奥にもう一つあるドア

から物音が聞こえた。

かちやかちやと聞き慣れない物音に更に高まる警戒心に、彼女は一瞬先まで寝ていた温もりが残る毛布に視線を向けるも、振り切るようにするりとベットから抜け出した。この頃にはおぼろげだった意識は覚醒し切っていて、気絶する前の屈辱の記憶は既に彼女の脳裏に浮かび上がっていた。何故自分が生きているのか、多くの疑問が頭に浮かんだが湧き上がる殺意に途端に感じた肌寒ささえも忘れドアを押し開けた。

瞬間、見慣れない道具が目に入ったが今はと気にも止めず、音の発生源に向かつて拳を振り下ろそうと——したその時、荒々しく流れる滝の如く襲い掛かった動きをピタリと止めた。

「——っ！… びっ……驚いた。もう動けるなんて——」

特徴的な灰色の服を纏った一人の子供がおっかなびっくりな様子でそこにいた。その手元には調理途中であろうか、料理の素材と包丁が握られている。

同じく、動く筈がない者が動いた驚愕から彼女も目を丸くして彼に視線を向けると、自然と目が合う。

「……………」

彼の声途切れたのは幽香の無言の圧力からか、無言の間も二人は視線だけでもものを語るように見つめ合う。彼女はただ単純に驚愕から彼の服と幼い顔を行き来させ、彼と

は言う、彼女の顔を確認すると無事だと安心するように頬を緩ませた後、動きがピタリと止まり、その変化にぼかんと呆けた彼女が口を開く前に急速に赤みを帯びた顔を自らの手元へと背けた。

「——そんな格好で何してるんだ?!」

意地にも見たくないのか、見られたと思われたくないのか。彼は決してやましい気持ちなどないと言った様子で腕で顔を覆いながら羞恥に震える手で幽香を指した。

「へ?」

彼の急変に思わず間が抜けた返事と共に確認するよう自分を見下ろした。一目で入ったのは傷一つ無くなっていた手足と肌、そこから流れるような曲線を描いて大きな花卉が開いたような、二つのつぼみとも言えぬ大きな膨らみに反して細い腰周りから流れ落ちた両足は一般的、それに幽香から見ても綺麗過ぎるほど整ったものだった。神との戦いで受けた傷跡が一切ない彫刻のように滑らかな肌触りを再度確認して、そうして漸く自分が一糸纏わぬ素っ裸だと気付く。まさか、このこと? と彼に見られた事に特に気にした様子もなく彼女が口にする、と彼は必死に何度も首を縦に振る。

「服だったら直しておいた。向こうの部屋の引き出しに入ってるからすぐわかると思うから……今は手が放せないから出てってくれないか?」

言いながら、彼は調理を再開させる。片腕で目を隠しながら片手で包丁を扱う姿は珍

妙ながら確かに手が放せそうにないと、彼女は人事のように頷いた。

幽香は台所に向き合う彼を見ながら、少ないながらも交わした言葉を反芻すると自然にその口元が緩み、今更ながら燃え上がった怒りが鎮火している事に気がついた。

——生きていて本当によかった……やつと叶った。声に出さないまま、彼女は静かに微笑んだ。

「でもそれより先に聞きたい事があるわ」

「……悪いが今は答えてる暇が」

「あの時、助けてくれたのは貴方？」

度重なる心労（と言うか羞恥）から彼は溜息をつきたい気分になりながらも、あの時と言うのは神との戦いに割り込んだ時だろうとあたりをつけて「ああ」と頷く。

その返事に彼女が反応を示した様子がない。動く様子がない彼女に愚痴の一つでも零してやろうかと口を開きかけた時。

「そう、ならいいわ……」

質問攻めされると思っていた彼はその拍子抜けする返答に又も動きを止めた間にさっさと出て行つたドアの先をぼかんと眺める。

「一体何だったんだよ……」

彼は小さくそうぼやいて得意でもない料理に、料理だけでもせめて豪勢にしようと、

また深い溜息を吐き出した。

「はあ……問題が山済みだ……」

彼が豪勢にと思つて作った料理は数少なく、今ある材料では彼からしたらそれが限界であつた。一品目は皿に盛られても滴る肉汁が溢れ出し、塩だけのシンプルな味付けながらも香ばしい肉の香りは実に食欲を誘う肉の串焼き。二品目はメインとなろうこれもまた大きな肉の塊、その正体は切れば汁と共に弾けるハーブの芳醇な香りが肉の臭みを消し、見た目だけで食欲を誘う肉の野草詰め。それと残つた骨でだしを取つたスープ、と。見事なまでの肉づくし。そもそも肉を使つてない料理など存在しない。

「……………これは？」

その量に着替えを済ませた幽香が若干困惑気味に目の前の食事より本を優先と、本を開いて読み始めた彼に聞いた。

「人型の妖怪だつたら食事くらい取るだろう、と思つてな。こんなに早く起きるとは思わなかつたけど。材料は人間ではないが、数日振りの食事だしいよりはマシだろう」  
視線で文字を追うのを止めず、彼は幽香の回復力に呆れたように軽く肩を竦める。

幽香は一度彼から目を離して目の前の串が刺さつた肉を見つめる。滴る脂で黄金色に光つて炭の香ばしい香りは鼻孔をくすぐり空腹でなくとも食欲をそそる物だつた。

しかし、

「……………」

「……食べないのか？」

彼はぱら、と本を捲りながら、それに彼女は更に困惑の色を濃くしたような顔になった。それを見て。

「腹が減つても……人間しか食べないと、変な意地を持つてる妖怪もいるからな。嫌なら別に無理食べなくとも」

「いえ、そうじゃないの。その……貴方は食べないのかしら？ 私が言うのも可笑しいけれどとつても美味しそうに見えるわよ？」

彼は字を目で追うのを止めると、表情は変えないながらも神経質そうに本の角を指で叩きながらやがてむっとした様子で口を開いた。

「僕はいい」

別に機嫌が悪い訳ではないのだが、わざやっている訳ではない。素っ気無い態度に彼は我ながら呆れた。そしてすぐ脳内に浮かび上がって来る映像を掻き消しながら。

言葉短め、本を読む行為を続行しようとしているがその目は明らかに文字を追つておらず、焦るように、どこか不貞腐れたように彼は言葉を吐いた。

その映像を直接植えつけた張本人をあまり直視しないよう、こうやって読書に勤しん

でいるフリを続けていた彼であつたが。

「そんな事言わないで、ほら」

そんな彼の態度に気付いたか気付いてないか、彼女は気にした様子もなく肉の刺さつた串をずいっと差し出す。

「私だけ食べるのも、何かあれじゃない？ 独り占めしてるみたいで意地汚いわ」

「……別に誰も見てないじゃないか」

「気分よ、気分。だからほら、一人で食事取るのつて意外に寂しいものなのよ」

『普通の食事でも、二人で一緒に食べると美味しく感じるモノなのよ』遠くに行つてしまったそんな彼女の声が彼の耳元で再生された。『それつて、遠巻きに僕の料理がいまいちつて言つてるよね？』思い出し懐かしい記憶にふと顔が綻んだ。彼女は今頃何をしているだろうか。

「——ああそうだな……それなら一本貰おうかな」

弛緩した雰囲気、そんな彼を見ながら彼女も笑つて、

「一本と言わず沢山食べてもいいのよ？ こんなにあるんだから」

「いただきます」